「娘の産後を支援する実母の母性性・世代性に関する研究」

山口県立大学　博士後期課程

学籍番号 15073301　　氏名　中村敦子

目次

第１章　娘の産後を支援する実母に関する先行研究の検討
第１節　産後支援における研究の背景・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
第２節　実母が母性性･世代性を発揮することにおける諸問題と意義・・・　6
第１項　娘の産後支援に関する先行研究の傾向と諸問題・・・・・・・・・　6
第２項　娘から期待される実母の役割・・・・・・・・・・・・・・・・・　7
第３項　産後支援における実母の母性性･世代性の意義・・・・・・・・・　10
第３節　実母が母性性･世代性を発揮させることにおける課題・・・・・　17

第２章　産後支援における実母の母性性･世代性の特徴
第１節　実母が娘の母親役割獲得過程を支援することの現状と課題・・・・26
第２節　実母が娘の母親役割獲得過程を支援する母性性・世代性のプロセス・28
第１項　研究方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第２項　実母の支援プロセスと諸問題・・・・・・・・・・・・・・・・・30
第３項　娘が実母に期待する母性性・世代性の比較・・・・・・・・・・・39
第３節　実母の母性性･世代性の変化・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
第１項　自己を顧みずに無心に娘と関わる時期・・・・・・・・・・・・・　43
第２項　無理せずに支え娘家族の自立を支援する時期・・・・・・・・・・45
第４節　実母の母性性･世代性を発揮させるための教育・・・・・　48

第３章　娘の産後を支援する実母の母性性･世代性の発達を促すための教育プログラムの検討
第１節　実母を対象とした教育プログラムの現状と課題・・・・・・・・・・52
第２節　実母の母性性･世代性の発達を促した教育プログラムの実践と評価・・・57
第１項　研究方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
第２項　従来プログラムと新プログラムの受講前後の分析から得た母性性･世代性の結果・60
第３節　実母の母性性･世代性を発達させるプログラムの特徴・・・・・・・79
第１項　実母に向けた教育プログラムの効果・・・・・・・・・・・・・・　79
第２項　産後を支援する実母を対象とした教育プログラムの課題・・・・・・・87

第４章　産後を支援する実母の母性性･世代性および祖母としての発達
第１節　実母の母性性･世代性の変化と軌跡および祖母としての発達・・・　93
第２節　実母の祖母としての発達を促すための支援・・・・・・・・・・・・103

第１章　娘の産後を支援する実母に関する先行研究の検討

第１節　産後支援における研究の背景

我が国の 1989 年の合計特殊出生率が 1.57 と 1966 年丙午の年の 1.58 を下回り、1.57 ショックと呼ばれたことを契機に、政府は深刻な少子高齢化に歯止めをかけようと「エンゼルプラン」を掲げ、保育の量的拡大や低年齢児（0～2 歳児）保育等の多様な保育の充実、地域子育て支援センターの整備等を図った。その後も「新エンゼルプラン」をはじめとする様々な子育て支援施策を実施し、出産後においては産後ケアシステムの充実、育児期においては乳児全戸訪問事業など、母親への育児支援の充実が取り組まれている。地域全体で子育てを応援するという意識の高揚がみられつつも、児が就学前の母親への支援においては、その主な支援者は実母であるのが現状である（出石他,2014）。特に産後 1 ヵ月以内においては、江戸時代から続く日本特有の里帰り文化が継承され、近年における出産後の支援の担い手は 6～8 割が実母であるという報告があり（水野,2014;峰崎他,2016）、血縁関係のある実母が重要な支援力として機能している（小林他,2008）。その実母の支援は、産後 1 ヵ月を過ぎて就学するまで、なお重要な支援力であるという報告がある（出石他,2014）。

しかしながら、福原（2006）によると、育児支援を担う 50 歳代後半以降である中高年の女性の生きがいは、仕事が最も多く、次いで趣味、家族との団欒、友人や仲間と過ごすことが続き、子や孫の成長はその後に続いていた。また、自分で楽しみたいことの上位は、習い事やショピング、旅行などであり、孫の世話はそれらよりも下位であった。子どもや孫との付き合いかたについて、60 歳以上の高齢者の意識は「いつも一緒に生活できるのが良い」と答えた人は、2010 年において 15 年前よりも減少し,「ときどき会って食事や会話するのがよい」人が増加している。より密度の薄い付き合い方で良いと考えている人が増えていることが明らかにされ（内閣

府,2011)、子育てを終えて個人としての人生を楽しみたいと考えていることが伺える。このような個人の生活を重んじる現代社会の風潮にも関わらず、実母は娘の出産を機会に支援を開始し、その支援は児が就学するまで続いている現状をどう捉えるべきであろうか。

研究者が先行研究において、娘の産後里帰りを引き受ける実母の体験にどのような意味があるかを明らかにした結果、娘の成長に喜びを得ること、娘に対する愛着や親密性を深めること、娘夫婦の幸福に力添えし、娘との新たな関係性を構築すること、家族を大切にしながら個としての自分の人生を大切にする生き方を見出す意味があることが明らかになった。これらの意味を見出した実母は、全て娘が母親として成長したと実感していた実母であった(中村,2014)ことから、娘が母親として成長することは、実母が支援に意味を見出せるか否かに影響を与えると推察された。

出産後の女性は専門家から導かれた方法で母親としての役割演技を始め、早ければ産褥2週間目頃には、子どもとの相互作用を通じてわが子と自分に適した独自の方法を模索し生み出す。さらに、自分自身の役割と役割期待が一致するように感じられ、母親である自分に心地良さを感じるようになるには1ヵ月から数ヵ月かかるとされる（Ramona,T.Mercer, 2006)。このような感覚を持てるようになると母親役割を獲得したとされる。出産後の女性は、分娩による疲労や創傷からの回復の遅れや産後3～10日に生じるマタニティブルーにより、産後1ヵ月を過ぎて産後うつに移行する場合もあり、心身ともに様々な問題を生じやすい。これらの危機を乗り越え、母親としての役割を獲得するには、重要他者である実母との関係に影響され、実母からの愛情を得られて初めて児に関心が向けられ、母親役割を獲得できる。しかし、母親の重要他者である実母が、娘を母親に育てていくのではなく、娘を援助するという名目で、成長した娘を子どもとして対応し世話する関係が続くと、母親としての役割獲得が妨げられる（新道

他,1990)。その為、母親役割は 1 ヵ月で獲得されることも、あるいは数カ月かかることもあるとされる。産後の重要な支援者である実母との関係や実母の家事・育児への支援のあり方よって母親役割の獲得に違いが生じる（新道他,1990）ことから、母親が母親役割を順調に獲得していく場合と、そうでない場合とでは、実母の支援に何らかの違いがあることが推察された。娘が母親役割を獲得するための支援において、実母の持つ子どもがかわいい、庇護したいなどと思う気持ちの表れである「母性性」(新道他,1990;新道他,1997) を発揮させ娘の育児を肩代わすることは、娘の産後の回復に役立つが、娘の母親としての自立を妨げる恐れがある。いかに実母が持つ母性性を発揮させるかは重要である。

また、母親がその役割を獲得する過程においては、実母の育児を模倣することが明らかにされており（小林,2010)、次の世代のために実母の持つ育児の知識や技術を伝達する「世代性」(柳沢,1985;田渕 2010）は、娘が母親役割を獲得する上で重要な支援となる。しかし、現代の育児方法は実母世代の育児方法とは異なるため、実母が現代の育児方法を示すと、考えが合わないと思う娘との間で衝突が生じやすい（塚田他,2011)。実母がどのように「母性性」と「世代性」を示すかは、娘が母親役割を獲得する上で重要な意味を持つ。

このように、娘にとって意味を持つ実母による産後の支援であるが、実母自身が負担感を持つだけであると、実母の心身の健康を阻害することになりかねない。杉井（1993）が、母親の産後うつや育児不安、乳幼児虐待の問題がクローズアップされ、それら問題の予防に看過されがちな傾向にあったことで、実母に対する支援の必要性を感じながらも支援者である実母自身の心身の健康、あるいは生涯発達の側面から、育児支援に関わる実母を対象とした研究がされて来なかったことを指摘している。1993 年に杉井がそのことを指摘して以来 25 年が経過した今、娘の産後の支援につい

て、支援を受ける娘と支援する実母の双方の立場から見つめ直す時期にあると考える。研究者は、主たる支援者である実母の支援内容や方法、態度、すなわち、娘や孫世代、家族全体の健康と幸福の為に愛情を示し娘が母親として育つことを助ける「母性性」、また、次の世代のために育児の知識や技術を伝達する「世代性」をどのように発揮させるかによって、新たに母親となる娘の母親役割獲得を促進または阻害すると考えた。また、支援する実母には、喜びがある反面、鬱的な気分が生じることが報告されている。そこで、母親役割獲得において特徴的段階を辿る娘の産後 1 ヵ月までの里帰り期間に焦点をあて、実母の支援過程並びに実母の心身の健康への影響を明らかにし、母親役割獲得を支えさらに実母の健康と生涯発達を目指した産後支援の在り方の示唆を得たいと考えた。

本章では、娘の産後を支援する実母に関することを取り上げた文献からその研究の動向を把握し、今後の研究課題を明らかにする。

用語の定義

産後支援：出産からおよそ 1 ヵ月までの娘とその家族に対する支援

母性性：娘や孫世代、家族全体の健康と幸福の為に愛情を示し娘が母親として育つことを助けること

世代性：次の世代のために育児の知識や技術を伝達すること

研究方法

検索ツールは、医学中央雑誌 Web 及び CiNii を用いた。産後支援に関わる実母の母性性・世代性に関わるキーワードとして、「母親役割獲得」「産後支援」「育児支援」「里帰り」「祖母」「実母」「母性性」「世代性」「祖母性」を検索キーワードとした。

わが国において江戸時代から継承されている出産前後に実家に戻って過ごす里帰りは、他の国には見られない日本独特の文化であり、海外における母親が傷病若しくは死亡したときに祖母が行う育児支援とは異なる。そ

こで、文献の選択基準は日本語に限るとし、原著論文に限った。実母が育児支援を担ってきた歴史を鑑みて年代を限定せずに検索した。孫が未熟児や先天異常のある場合など特殊なケースを省いた。その結果、「母親役割獲得」28 文献、「祖父母 and 育児支援」18 文献、「育児支援 and 実母」14 文献、「里帰り and 育児支援」4 文献、「里帰り and 実母」14 文献、「母性性 and 実母」3 文献、「祖母性」3 文献、「産後支援」1 件の合計 85 文献が検索された。85 文献のうち、重複された文献を除くと 81 文献であった。81 文献のうち本論文で明らかにしたいと考える実母による産後およそ 1 ヵ月までの娘とその家族に対する支援について記述された 44 文献を対象とした。

本論文では、実母が産後 1 ヵ月までの娘から期待されている役割、及び実母が娘の産後 1 ヵ月までの支援をすることの意義を明らかにし、娘の母親役割の獲得を支え、実母自身が持つ母性性・世代性を発揮させ、心身の健康を促進するために必要な実母への支援を明らかにすることを目的としているため、対象文献を、支援を受ける娘を研究対象者とした文献と、支援する実母を研究対象者とした文献に分類した。その結果、娘を研究対象者とした文献は 29 文献（添付資料 1-1）、全体の 65.9%（表 1-1）、一方、実母を研究対象者とした文献は 15 文献（添付資料 1-2）、全体の 34.1%であった（表 1-1）。

表 1-1　研究対象者別文献数　　n=44

研究対象者	娘（%）	実母（%）
文献数	29（65.9）	15（34.1）

第２節　実母が母性性･世代性を発揮することにおける諸問題と意義

第１項　娘の産後支援に関する先行研究の傾向と諸問題

娘を研究対象とした 29 文献の記述内容を分類したところ、里帰りの頻度・支援形態等の「産後支援の実態」9 文献、娘が「必要とする実母の産後支援内容」8 文献、支援により「娘とその家族が受ける影響」18 文献、「産後支援に対する認識と評価」8 文献の 4 項目に分類された（表 1-2)。娘を対象とした文献では､実母の支援により｢娘とその家族が受ける影響｣について記述されたものが最も多くみられた。

一方、実母を研究対象とした 15 文献の記述内容を分類したところ､｢産後支援の動機｣2 文献、実母が持つ母性性・世代性であると考えられる「産後支援の内容」2 文献､｢産後支援における態度｣7 文献､｢産後支援により受ける影響と対策」8 文献､「祖母性の特徴」2 文献の 5 項目に分類された（表 1-3)。

実母を対象とした文献では、実母自身の心身が､｢産後支援により受ける影響と対策｣について記述されたものが最も多くみられ､次いで実母の｢産後支援における態度｣について記述されたものが多くみられた。

表 1-2　娘を対象とした文献の記述内容の分類

	1. 産後支援の実態	2. 必要とする実母の産後支援内容	3. 娘とその家族が受ける影響	4. 産後支援に対する認識と評価
文献数	9	8	18	8

表 1-3　実母を対象とした文献の記述内容の分類

	1. 産後支援の動機	2. 産後支援の内容	3. 産後支援における態度	4. 産後支援により受ける影響と対策	5. 祖母性の特徴
文献数	2	2	7	8	2

「産後支援の実態」に関する研究は全て里帰り形態による支援を取り上げており、里帰りの頻度と主な支援者、里帰り期間、里帰りにおける問題点について明らかにされていた。里帰りの頻度は、2002 年では 90.6%（森田,2002)、2005 年では 81.8%（大賀他,2005)，2005 年の全国規模による調査では 60%であり、夫よりも実母の支援が増加傾向にある（島田

他,2006)。2006年では75.4%(南,2006)、2008年では68.1%(松永,2008)、2009年では96.6%(渡部,2009)、2014年では80%(水野,2014)、あるいは82.9%(出石他,2014)であった。里帰り形態で主に実母から出産後の支援を受けていることは、およそ2000年以来今日まで大きな変化がないといえる。里帰り期間は概ね産褥1ヵ月健診までを目安としているが(森田,2002;大賀他,2005;出石他,2014)、4ヵ月以上にわたる事例も報告されている(森田,2002)。およそ8~9割に上る里帰りは様々な問題を抱えており、里帰り先での娘のプライバシーが保てないこと、実母の過干渉、里帰り終了後に援助が途絶えることからくる不安、過去の親子の葛藤を想起する(小林,2010)他、里帰り期間が長期にわたる場合は、母親および父親役割の獲得や母親と父親との関係性における問題が生じる(大賀他,2005)ことが明らかにされた。

第2項　娘から期待される実母の役割

娘が「必要とする実母の産後支援内容」は、娘の67%に生じる睡眠不足と疲労によるストレスを解消し育児に専念できる環境の提供であった(島田他,2001;南,2006;廣他,2007)。特に初産婦は、睡眠不足による疲労感が育児放棄感や自信喪失感を招く(鵜山他,2005)ため、日常生活の手助けである家事全般と沐浴やおむつ交換等の育児の肩代わり(柳川,2003b;松永,2008;小林,2010;水野,2014)が必要である。この育児の肩代わりは実母のもつ世代性を発揮させた支援と捉えることができる。その他、母親へのねぎらいや励まし、不安に対する相談や助言、情報提供、人との繋がり、自分への理解が必要である(鵜山他,2005)。気持ちを分かってくれるといった自分への理解は最も重要な援助であることから(柳川,2003b)、娘でもある母親の良き理解者である実母の援助の意義は大きい。この娘に対する情緒的な支援は、実母のもつ母性性を発揮させた支援と捉えることができ

た。その他、経済的な援助や、経産婦では上の子の世話を必要としていた（柳川,2003b）。また、母親の 25%が乳房トラブルを、24%が児の不眠という心配事をかかえていた（島田他,2001）ことから、これらに対する支援が必要とされていることも明らかになった。産後 1ヵ月以内の娘が母乳育児を確立させるために、実母から具体的にどのような支援を受けているかを明らかにした文献は見あたらなかった。

母親である「娘とその家族が受ける影響」については、母親の心理面、母親の身体の回復、母親とその夫や支援者である祖母および家族全体との関係性、母親の子育てへの影響について明らかにされており、影響については母親が母親役割を獲得する過程への影響について記述された文献数が最も多かった（鵜山他,2005;小林,2006;廣他,2007;前原他,2007;鈴木他,2009;菅原,2012;中沢他,2013）。母親の心理面に与える影響では、里帰りが出来ず実母からの支援が受けられない場合に不安が生じるとされ（渡部,2009）、実母の支援に対する期待は大きく、里帰り自体が母親となる娘の精神的な支えとなっている（小林,2010）。しかし、実母との親密性が母親の不安や抑うつを軽減する一方で、母親が実母に対し生じる依存性は不安や抑うつを高めること（長鶴,2006）や、母親が里帰り終了後の居住地での家事負担に不安を感じ、子どもに対する負の感情が生じることが危惧されている（森田,2002;南,2006;久保他,2012）。母親の身体回復への影響については、実母の支援を受けた母親は、心身共に十分な休息がとれ、体調の回復を促進し、産後の体調が良好である（小林,2006;南,2006;小林,2010）。里帰りの機能には、母娘関係の新たな絆形成と関係構築への発展と、過去の体験の捉えなおしによる親子関係の修復の機能があるとされる（小林,2010）。その反面、里帰りが終了し母親が居住地に帰宅後、夫との気持ちの繋がりに不安を感じ、安定した夫婦関係を低下させることや、母親が里帰りをした夫は子どもが煩わしく、子どもに対する負の感情を持ってい

た（久保他,2012）。子育てへの影響では、1ヵ月以内の母親の育児観に実母が最も影響を与えている（峰崎他,2016）。支援者が夫の場合よりも実母である方が児への愛着得点が有意に高く、母親として活動しているときが自分らしいと感じ、母親としての肯定的感情は高くなる。実母の手段的サポートの満足度が高いほど、母親の育児に対する対処行動が効果的な行動をとる（山口,2009）とされる。しかし、夫が支援者の場合は、子どもよりも母親自身のことに関心が高まり、子どもがいるために自分の思い通りにならないなどの制約感や負担感に対する意識が高まることを明らかにしている（榮,2006）。母親が受ける影響のうち最も文献数の多かった母親役割獲得への影響については、母親は実母から新生児の甘え泣きの存在を教えられ、新生児の反応を読み取れるようになり（菅林他,2012）、子どもの機嫌の良さが母親と祖母の働きかけで増し、祖母に見守られるとゆとりを持てるようになり、ゆったりと寝かしつけることができた（塚田,2015）。初産婦では実母の育児を模倣しながら技術を確立させ（鈴木他,2009）、自分の努力と導きから実母と同じように世話ができることで、育児に自信が持て、愛着が形成され、満足感が持てる（鵜山他,2005;小林,2006）。手段的、情緒的、情報的サポートや頑張りを認める評価的サポートに満足している母親は母親としての自信が高く（前原他,2015）、特に高齢初産の場合は、産褥早期から家族による母親の自信を高められるような支援が必要とされる（中沢他,2013）。このように、産後1か月以内の母親は自分への理解という重要な支援により、自分が描いてきた育児を確立させていく（鵜山他,2005）ことから、産後において関わりの多い実母から受ける影響は大きい。さらに、里帰り中は、母乳分泌量に満足を感じながらも、母乳育児に不安が生じる時期であり、育児に専念できる環境調整を実母から受けることで、次第に母乳哺育行動を通して母親としての自覚を持つようにもなる（廣他,2007）。一方、児の授乳から寝かしつけ時間が長いこと、褥婦の夜

間睡眠時間が短いこと、日常生活で無理をしている母親は母親としての自信が低くなる（前原他,2015）。これらから、母親役割を獲得するために、実母の支援が重要であることが理解できた。

実母の「産後支援に対する認識と評価」については、多くの母親は実母の支援を重要な支援資源と捉えており、献身的に家事育児を助けてくれ、昔の話を持ちださずに自分の育児行動を見守る実母の支援を肯定的に捉えている（森田,2002;白井他,2006;井関他,2010）。また、実母と同じように大事に育てていきたいと実母を目標とし（掛水他,2009）肯定的に評価している。しかし、思い付きで行動し一貫性がない場合は支援を両価的に受け止め、信頼のない育児技術や口は出すが手は出さない態度、相談相手にならない場合や、母親よりも新生児に関心が向いている場合は支援を否定的に認識している（白井他,2006;石田,2012）。また、4 割の母親は新生児のケアや産後の生活、授乳や家族役割について、実母の支援に違和感を生じていることを明らかにしている（峰崎他,2016）。そのような違和感を軽減するために、近年では祖父母学級が実施されている。娘が祖母学級の必要性をどのように捉えているかを明らかにした祖母学級の評価では、母親の立場から祖母学級による実母への情報提供がとても必要だと思うが 28%、まあまあ必要だと思うが 44%であった（峰崎他,2016）。およそ 7 割りの母親が祖母学級を必要であると捉え、育児法の相違に伴う戸惑いが無いように現在の出産や育児法の知識を習得することと、実母同士のピアカウンセリング効果をあげていた（柳川,2003a;前原他,2007）。

第 3 項　産後支援における実母の母性性･世代性の意義

実母の「産後支援の動機」は、母親として祖母としての義務、孫可愛さ、当然のことであった（柳川,2002）。また、要求に応じて出来る限り手伝いたいと考えており（岡津他,2011）、実母が持つ娘への愛情に支えられてい

る。実母が支援することに何ら意味を持たずに産後支援を当然行うこととして行っていることが推察された。

実母の「産後支援の内容」は、主に家事協力支援、新生児の世話、上の子の世話であり、実母が希望している内容である不安や悩みの相談に乗るといった母性性を発揮させた援助は少なく、助言者としての役割を十分に果たしているとは言い難いことが明らかにされている（柳川,200;岡津他,2011）。

「産後支援における態度」については、実母は自分の育児体験に基づき支援を行っており、母乳育児が推奨されたことから、人工乳に対して否定的なものがいた(三田他,2009)。母親の育児方法との相違に戸惑いながらも母親に合わせる態度で（柳川,2002;塚田他,2011）、自分の育児能力を見極めたうえで母親である娘に必要なサポートを判断している（井関他,2013）。その関わり方において、食や育児観に関する言い伝えを重んじる「世代間伝承的関わりパターン」とそうでない「個人的関わりパターン」の 2 つの特徴的な関わりパターンが明らかにされた（西村他,2014）。また、実母の援助には、娘を見守る「見守るタイプ」、娘の求める役割を自認し行動に移す「役割期待合致型」、娘の希求する支援と摺り合わせず対立が起こる「対立択一型」あるいは「もめるタイプ」、相談に応じられず娘一人で考えてやってほしいと「任せるタイプ」、期待されることと知覚することに一致せず自分なりの行動をとり続ける「実母主導型」に分類できた（松下他,1992；小坂他,2015）。実母が「見守るタイプ」の場合に娘の心配事が解消でき（松下他,1992）、娘の産後 1 ヵ月間の回復と自立、新生児期の孫の健やかな成長と、実母のやりがいをもたらすことが可能である（小坂他,2015）。母親は「受容期」「保持期」「解放期」という段階的な母親役割獲得過程に従いサポート希求が変化することから、サポートの授受の不均衡および娘との不協和が生じやすい。そのため、娘が母親役割過程を辿るうえで変化する

希求に合わせた効果的な支援が必要とされる（井関他,2013）。しかし、娘の母親役割獲得過程に応じた実母の支援について明らかにした文献は見あたらなかった。

実母が「産後支援により受ける影響と対策」について、身体的側面への影響では、実母は、疲労を自覚しにくいことから、年齢的な特徴と合わせて実母をケアする必要がある。実母に生じるマイナスな心理的側面には、産後の身体回復を助けることにおける不満、育児の試行錯誤の中で生じる当惑（前原他,2014）、娘から頼りにされないことによる自己評価の低下、母親である娘が成長することで生じる寂しさや葛藤、また、育児方法を受け入れないことや助言を聞き入れない娘との衝突と不協和音（井関他,2013）がある。実母に及ぼす肯定的な心理面への影響は、娘の成長に喜びを感じ、孫から癒しを受けること、娘を育てたことや周囲との協働と支援を行えたことに対する自負心を抱くことが明らかにされ、専門的な育児方法や情緒的支援を探求し支援しながら納得をしている（前原他,2014；中村,2014）。孫との関係において QOL が高まる要因は、健康が良好であること、孫との距離が近く育児支援をすることに満足感を感じていることであった（因幡他,2012）。実母自身の発達的側面への影響は、支援することが実母自身にやりがいをもたらすこと（小坂他,2015）や、娘のニーズに合った支援をする中で祖母役割を形成し、肯定的な気分状態をもたらすことが明らかにされている（野村他,2015）。近年各地で開催されている祖父母学級については、祖母学級への参加ニーズはおよそ祖母の４割にみられ、孫がすでにいるほうが、今から孫を迎えるものよりも祖母学級に興味を持っており、希望する内容は「子育ての今と昔の比較」「祖父母の役割」「両親との関係作り」「事故の予防と対応」「母乳育児に関すること」「離乳食とおやつ」など（右田他,2010；寺坂他,2011）、乳幼児期から学童期にある孫の育児支援全般において、実母が世代性をより発揮させることを目指した

内容であった。また、祖父母学級の受講者は現在の育児への理解を深める意義の他、親として、これから親になる子どもの考えや思いを尊重し頑張りを認めること、親とは異なるオアシスとしての孫との接し方による自分の役割と存在など、祖母役割について理解を深めていた（右田他,2010）。祖母学級は、現代の育児方法に対する戸惑いや抵抗を軽減させ、両親を見守る支援態度を促進することに有益である。しかし、現在各地で開催されている祖父母学級は、祖母役割を育児のサポーター役とし、母親世代の育児を見守ることを推奨しているため、自らの育児で培われた母性性や世代性を実母が発揮させる機会が与えられないことが危惧された。また、産後早期の支援で実母に生じる寂しさや不満、当惑、自己評価の低下を軽減させるには不十分な内容であった。このように、現在の祖母学級は、実母自身の心身の健康に焦点が置かれておらず、祖母自身の QOL 向上に必ずしも結びついていないことが推察された。実母に生じる不満や寂しさを軽減させ、祖母役割の形成を促進し、実母自身の QOL 向上を目指した教育に関する文献はみあたらなかった。

「祖母性の特徴」では、祖母は母性性と父性が持つ愛の両方を併せ持ち、直観的、情緒的のみならず論理的、理性的な祖母性行動を予想している。孫の心理状態を注意深く観察しつつ、自己の内省も同時に行うことで、母親とは異なる視点で孫に対する養育行動を行っている可能性を示している（西谷他,2013）。実母が産後支援を行うことには、娘を育てたことの自負心や寛容で大らかな自分に気づくこと、娘との新たな関係を構築すること、娘の役に立てた喜びがあること、家族支援と個人的な生活とのバランスを取りながら自分らしい生き方を見出すことが明らかにされている（中村,2014）。

以上、第 2 節のまとめとして、娘の産後支援における諸問題と、実母が

母性性・世代性を発揮することの意義を述べる。

産後 1 ヵ月以内における母親である娘は、主に里帰り形態で、およそ 6～9 割りが実母から支援を受けている。父親の育児参加が促される近年においても、産後 1 ヵ月以内では、夫よりも実母の支援が重要な支援力と位置づけられることが明らかになった。さらにその傾向は、ここ 15 年間大きな変化は見られない。娘は育児の助言やねぎらい、励まし、安心感といった情緒的な支えである実母の母性性と、育児に専念できるための家事支援、睡眠時間確保のための育児の肩代わりといった実母の世代性を必要としている。

全国、地方における調査において概ね産後 1 ヵ月健診を目途に里帰りによる支援を終了させているが、なかには約 4 ヵ月と長期にわたることもある。里帰り形態での支援は、実母の示す母性性を発揮しやすく、産後の娘の心の安寧と児への関心を高め、母親としての役割を獲得することに役立つと同時に、父親と母親および子どもとの別居生活を招き、夫婦関係の悪化や父親役割の発達を阻害する問題を孕んでいる。また、産後の支援は、実母と娘との親子関係が修復される機会となる一方で、娘の依存を高め抑鬱に繋がることや、娘よりも児に関心が向けられ、娘のニーズに応じない支援であると娘にストレスをもたらすことも明らかにされた。

娘の育児観に最も影響を与えているのは実母であり、実母の育児を模倣しながら自分の育児を確立させていることから、娘は母親役割を獲得することにおいて、実母が世代性をいかに発揮させるかに影響を受けているといえる。実母の世代性においては、世代差による育児方法の相違により、実母の育児方法に 4 割というおよそ半数近くの娘が違和感を抱いている。育児法の相違に伴う戸惑いが娘に生じないように、現在の出産育児法の知識を実母が習得することが必要であることが明らかとなった。また、母親役割を獲得する過程にある母乳育児に関して、実母から具体的にどのよう

な支援を受けているかを明らかにした文献は見あたらなかった。

実母が娘の産後を支援する動機は、出産した娘の母親として当然の義務として捉え、娘に示す愛情であり、実母の持つ母性性は娘に向けられている。支援においては、娘が母親役割を獲得するための支援という重要な意味を見出していない恐れがある。支援内容については、家事支援や経済的支援が中心であり、祖母が行いたい育児相談、社会的子育て、生きる知恵を孫に与えるといった世代性を発揮させることは少なく、娘との育児方針の相違により生じる葛藤を回避している。産後支援では、実母が見守る態度をとると母親である娘の心身の回復と自立、新生児期の孫の成長の他、実母自身にやりがいをもたらすが、娘から頼りにされなければ自己評価の低下を招く。娘が自分と児に適した育児方法を見出そうと試行錯誤しているときは、実母は当惑を抱くこともある。また、娘に手助けや助言をすることで実母と娘との間で不協和音が生じ、実母が葛藤を抱くことがある。娘は母親が辿る「受容期」「保持期」「解放期」という段階的な母親役割獲得過程に従いサポート希求が変化することから、サポートの授受の不均衡および実母との不協和が生じやすいことが明らかにされた。しかしながら、母親役割獲得過程に合わせた支援について明らかにした研究は見あたらなかった。実母は娘への支援過程で、自己評価の低下や当惑、葛藤などを生じることが明らかになった。産後支援では、身体活動量が多いにも関わらず身体疲労として出現しにくく、娘の身体回復を助けることにおける不満や、支援にあたる準備における不安、娘の成長に寂寥感を抱くことが明らかになった。

産後支援においては、娘世代との子育て方針の相違による葛藤が生じなければ、有用性を感じ子育てに参加することで実母に幸福感がもたらされ、心の健康にプラスに影響する。近年、各地で実施されている祖父母学級の

受講者と未受講者との比較において、支援内容に差がみられなかったものの、受講者は今時の子育てと祖母役割について理解を深めていたことから、祖父母学級は、今時の子育てを理解することに役立っていることが明らかにされた。しかし、支援過程で実母に生じる心身への問題を軽減し、祖母役割の形成を促進するための看護を実践した研究は見あたらなかった。現行の育児支援力の強化と育児の見守りを推奨した祖母学級の有り方を見直す必要性が課題として見いだされた。祖母性は、母性愛と父性愛の特徴を併せ持ち母親とは異なる視点で養育行動をしていることが示唆されている。産後支援における祖母の生涯発達に目を向けた先行研究は見あたらなかった。

第３節　実母が母性性･世代性を発揮させることにおける課題

実母による産後支援に関する文献を検討した結果、産後支援における娘を対象とした文献に比べ、実母を対象とした文献数が約３割と少ない結果となった。このことは、先に杉井（1993 年）が必要であると述べた支援者である実母自身の心身の健康や生涯発達についての関心が薄いことを表している。これまで実母の持つ母性性・世代性は、産後の娘の心身の回復や母親役割獲得に重要な支援力とされ、それらを発揮させることが娘にどのように有益であるかに焦点が置かれてきた。その結果として、およそ 15 年間大きな変化がなく、実母自身が娘の産後支援に意味を持たずに伝統的な文化として当然のことと受け止め、産後支援が継続されてきたと考える。

確かに、産後支援において実母の持つ母性性は、「ねぎらい」「励まし」「娘の良き理解者」として表出され、娘に安心感をもたらし、抑うつ的な気持ちを軽減させている。しかし、実母が娘とその家族への愛情を示し情緒的に支えることは娘の安寧をもたらすと同時に、母親の依存を高める危険を孕んでいる。実母は娘に示す母性性をどのように発揮させながら娘の依存を軽減し自立を促し、産後支援を終了させているのかを明らかにする課題が見いだされた。一方、世代性は「身体疲労を回復させるための育児の代行」「育児の手本」として表出され、娘の母親役割の獲得を支えている。産後１ヵ月以内の娘にとって重要課題である母乳育児の確立のために、実母はどのように支援しているかを明らかにする課題も見いだされた。

次世代のために育児の知識や技術を伝達し母親の自立を促進することは、強いては実母自身の QOL の向上に繋がるが、伝達ができないと、自己評価の低下を招く恐れがある。実母が産後 1 ヵ月以内を支援するにあたり、母親の「受容期」「保持期」「解放期」という段階的な母親役割獲得過程に従いサポート希求が変化することを理解し、それに応じることが出来なければ、サポートの授受の不均衡および娘との不協和が生じやすい。娘の母

親役割獲得過程に応じて実母は世代性をどのように発揮させているかを明らかにする課題が見いだされた。

一般的には、祖母とはすなわち孫を持つことを意味していることから、育児支援全般における実母に関する先行研究は、孫から受ける影響に焦点が置かれていた。しかし、産後 1 ヵ月頃までを支援する実母は、母親がその役割を獲得する上で重要な役割を持つため、実母が支援に意味を見出さずに当然のことと受け止めて支援していることには、取り組むべき課題がある。また、支援することから生じる諸問題がある。そこで、文献検討から見いだされた研究課題として、産後支援する実母を対象に、娘への支援において、どのように母性性・世代性を発揮させ、無事に産後の支援を終了させているかその支援の特徴を明らかにしたいと考えた。最近では、実母の支援力が見直され、その支援力の強化を目指した「祖母学級」が開催されている。祖母学級の有り方については、単なる育児支援の強化を目的にするのではなく、産後支援することの意味を盛り込み、祖母世代間が交流し、実母の心身の健康と祖母役割の形成を支援することが望ましく、今後の実母への教育の有り方に対する課題が見いだされた。

娘に対する産後支援において、自らの育児を終了させた実母が祖母として、母親や孫世代、家族全体の健康と幸福の為に愛情を示し情緒的に支えることで娘が母親として育つことを助ける「母性性」と、次世代のために育児の知識や技術を伝達する「世代性」をバランスよく発揮させることは、母親である娘とその家族の発達において重要である。さらに、平均寿命が延長し祖母としての人生が 30 年に及ぶと考えるなか、祖母としての自己を快く捉えられることは、支援者である実母自身の心身の健康や生涯発達にも貢献すると考える。

以上、本章から見いだされた新たに取り組むべき課題は「実母が母性性、世代性をどのように発揮させ産後 1 ヵ月以内の娘の母親役割の獲得を支え

ているかその特徴を明らかにし、実母の心身の健康に必要な支援を明らかにすること」である。以下に、研究課題とその意義を示す。

一つには、実母が母性性・世代性をどのように発揮させ、産後 1 ヵ月以内の娘の母親役割獲得を支えているか、実母の支援プロセスを明らかにする。研究意義は、娘の母親役割獲得を促進する支援が明らかにされること、および、支援者である実母の母性性、世代性を発揮させ、実母の心身の健康を高めるために必要な看護の示唆を得られることである。

二つには、支援プロセスで明らかにされた結果に基づき、実母の心身の健康と祖母としての発達を目指した教育プログラムを考案する。さらに、その教育プログラムが、実母の支援プロセスの結果から得られた諸問題を軽減し、実母の持つ母性性と世代性がより発揮させ祖母として発達するという狙いに対し効果的であるかを実施し検証する。教育プログラムの効果が検証されれば、実母の母性性・世代性を発揮させながら母親役割獲得を促進できる支援と、実母が支援に意味を見出し、実母の健康を高める支援を社会に広めることができる。

以上、二つの研究で得られた結果から、実母の祖母としての発達について、実母が持つ母性性・世代性の視点から考察し、祖母としての発達を促すために必要な支援を明らかにすることを目指す。

第１章　引用文献

・出石万希子，高橋悟子，松尾早枝子，橋岡由奈子，中井恭子，木村知子(2014)．B 病院の産後ケア入院課題についての一考察　産後 4 か月までの母親の育児サポート状況の調査結果から．聖泉看護研究，3 巻，67-73.

・福原文彦(2006)．熟年・シニアの暮らしと生活意識データ集．生活商法センター．

・小林由希子，陳省仁(2008)．出産に関わる里帰りと養育製形成．北海道大学大学院教育学研究紀要，106，119-134.

・小林由希子(2010)．出産前後の里帰りにおける実母の援助と母子関係・母性性の発達.日本助産学会誌，24(1)，28-39.

・Mercer, R.T.(2006)．Nursing support of the process of becoming a mother．Jornal of obstetric,gynecologic,and neonatal nursing，35(5)，649-651.

・峰崎香奈，立崎理香，七海あや，尾子元英惠，長谷川恵美，相澤由佳子，小林由子，黒川由佳里，相野谷しずか，金澤成美(2016)．産後 1 カ月間の母親と祖父母の育児観の相違　祖父母への育児支援教育は必要か．栃木県母性衛生学会雑誌，とちぼ 42 号，21-29.

・水野祥子(2014)．産後早期支援における妊婦の予定と乳児を持つ母親の実態．関東学院大学看護学会誌，1(2)，33-39.

・内閣府(2011)．高齢社会白書平成 24 年度版．http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2011/zenbun/23ndf-index.htm1[2016/5/18 閲覧]

・中村敦子(2014)．娘の産後里帰りを引き受けた実母の体験．日本助産学会誌，28(2)，239-249.

・新道幸惠，和田サヨ子(1990)．母性の心理社会的側面と看護ケア．医学書院，98-122.
・新道幸惠，後藤桂子(1997)．ルヴァ・ルービン母性論：母性の主観的体験．医学書院，62-82.
・杉井潤子(1993).「祖親性」研究－「祖父母」の意義再考－．大阪市立大学児童家族相談所紀要，10，59-74.
・田渕恵（2010）．世代性（Generativity)の概念と尺度の変遷．生老病死の行動科学，15，13-20.
・塚田桃代，中西伸子（2011）．母娘世代間における育児意識の相違に対する効果的な支援について．奈良県母性衛生学会雑誌．24 号，36-39.
・柳沢昌一(1985)．E.H.エリクソンの心理社会的発達における「世代のサイクル」の視点．教育学研究，52(4)，396-406.

文献レビュー対象文献

(娘を研究対象者とした文献)

・出石万希子，高橋悟子，松尾早枝子，橋岡由奈子，中井恭子，木村知子（2014）. B 病院の産後ケア入院課題についての一考察　産後 4 か月までの母親の育児サポート状況の調査結果から. 聖泉看護研究，3 巻，67-73.
・廣千晴，崎山貴代，二村良子（2006）．実母の母乳哺育援助による母親の母乳哺育への思いの変化．日本看護学会論文集，母性看護 37 号，6-8.
・井関敦子，白井瑞子（2010）．実母からの授乳・育児支援の中で娘が体験した思いと、その思いに関係する要因，母性衛生，50（4），672-679.
・石田都乃（2012）．里帰りにおける初産婦褥婦の産後 1 ヵ月までの家族への思い．せいれい看護学会誌，3（1），19-24.
・掛水恵，坂本雅美，市川智恵，横山史奈（2009）．実母からの育児期の伝

承における娘（母親）の育児観．小児看護，第 40 回，39-41.
・小林由希子(2010)．出産前後の里帰りにおける実母の援助と母子関係・母性性の発達.日本助産学会誌，24(1)，　28-39.
・小林康江（2006）.産後 1 か月の母親が「できる」と思える子育ての体験．母性衛生，47（1），　117-124.
・久保恭子，岸田泰子，及川裕子，田村毅（2012）．出産前後の里帰りが父母関係、父性、夫婦関係に与える影響と支援方法．小児保健研究，71（3），393-398.
・前原邦江，大月恵理子，林ひろみ，井出成美，佐藤奈保，小澤治代，佐藤紀子，荒木暁子，石井邦子，森恵美（2007）．乳児をもつ家族への育児支援プログラムの開発　出生後 1～3 カ月の母子を対象とした家族支援プログラムの評価．千葉看護学会会誌，13（2），10-18.
・前原邦江，森恵美，土屋雅子，坂上明子，岩田裕子，小澤治美，青木恭子，森田亜希子，前川智子，望月良美（2015）．出産施設を退院後から産後 1 か月までに母親役割の自信が高まる要因-高年初産婦と 34 才以下初産婦を比較して-．母性衛生，56（2），264－272.
・松永佳子（2008）．産後 1 ヵ月の女性が受けたと認識しているサポートと希望するサポート．東宝大学医学日看護学科紀要，第 22 号，17-26.
・南貴子（2006）.育児初期の母親の育児支援の在り方に関する検討「産後の里帰り」経験に焦点をあてて．日本家政学会誌，57（12），807-817.
・峰崎香奈，立崎理香，七海あや，尾子元英惠，長谷川恵美，相澤由佳子，小林由子，黒川由佳里，相野谷しずか，金澤成美（2016）．産後 1 カ月間の母親と祖父母の育児観の相違　祖父母への育児支援教育は必要か．栃木県母性衛生学会雑誌，とちぼ 42 号，21-29.
・水野祥子（2014）．産後早期支援における妊婦の予定と乳児を持つ母親の実態．関東学院大学看護学会誌．1（2），33-39.

・森田せつ子（2002）.里帰り出産における夫婦の里方との関係，愛知県母性衛生学会，20，15-23.
・中沢恵美子，森恵美，坂上明子（2013）．35歳以上で初めて出産した女性の産後入院における母親としての経験.日本母性看護学会誌,13(1),17-24.
・長鶴美佐子（2006）．周産期の実母との関係性が産褥 1 ヶ月の褥婦のメンタルヘルスに及ぼす影響．母性衛生，46（4），550-559.
・大賀明子，佐藤喜美子，諏訪きぬ（2005）．周産期における生活実態からみた「里帰り出産」．母性衛生，45（4），423-431.
・榮玲子（2006）．産後 1 か月の育児協力者別にみた褥婦の乳児への愛着と母親としての意識．母性衛生，47（1），81-88.
・白井瑞子，井関敦子，久保素子，高島明美（2006）．母のサポートに対する娘（第 1 子育児早期）の認識と依存性の関連．香川母性衛生学会誌，6（1），29-36.
・島田三恵子，渡辺尚子，神谷整子他（2001）．産後 1 か月間の母子の心配事と子育てニーズに関する全国調査．小児保健研究，60（5），671-679.
・菅林直美，森恵美，石井邦子（2012）．褥婦のわが子の泣きに対する成功体験．千葉看護学会誌，18（2），1-8.
・鈴木由紀乃，小林康江（2009）．産後 4 ヵ月の母親が母親としての自信を得るプロセス．日本助産学会誌，23（2），251-260.
・塚田みちる（2015）．乳児の情動の調整における＜調整する－される＞という関係の検討　生後半年間における三世代の関わりをめぐって．神戸女子短期大学論攷，60 巻，17-31.
・鵜山愛子，久米美代子（2005）．産後 1 カ月の母親が必要としているソーシャル・サポートの検討．日本ウーマンズヘルス学会誌，4 巻，19-31.
・山口咲奈枝，遠藤由美子，小林尚美，藤田愛（2009）．産後 1 カ月の母親

の育児に対する対処行動の実態及び対処行動と育児不安、ソーシャルサポートとの関連．母性衛生，50(1)，141-147.
・柳川真理（2003a）．周産期保健指導に関する一考察．香川母性衛生学会誌，3（1），32-44.
・柳川真理（2003b）．妊娠から産後１ヵ月の援助と二者関係－実母と義母の比較を中心に－香川医科大学看護雑誌，7（1），109-118.
・渡部郁子（2009）．里帰り分娩の実態とソーシャルサポートの検討．地域看護，第 40 回，107-109.

（実母を研究対象者とした文献）

・井関敦子，南田智子，大橋一友(2013)．里帰り分娩を行った娘に対する実母の支援姿勢と支援を通じて体験した思い．母性衛生，54（1），191 - 199.
・小坂麻衣，森恵美，坂上明子(2015）.初産婦である娘をもつ実母の産後１か月間における祖母役割行動の調整過程．日本母性看護学会誌、15（1），10-17.
・前原邦江，森恵美，坂上明子，岩田裕子，前川智子，小澤治美，青木恭子（2014）．高年初産の母親の産後１か月間におけるソーシャルサポートの体験．母性衛生，55（2），369-377.
・松下キヨ子，岩澤和子（1992）．産褥 1 カ月間の褥婦の心配事と，実母の援助との関係―実母の援助態度別分析-．日本助産学会誌，6（1），31-37.
・右田温美,梅野貴恵,熊谷淳二,和田美智代（2010）．祖父母の母乳育児に対する意識に関する研究　祖父母学級受講の有無による比較．ペリネイタルケア,29(8)，808-815.
・三田奈津子，佐藤知恵，坂本薫，川副亜偉子（2009）．母乳育児にむけて

実母への介入についての検討．日本看護学会論文集．39 号，9-11.
・中村敦子（2014）娘の産後里帰りを引き受けた実母の体験．日本助産学会誌、28（2）．239－249.
・西村香織，永山くに子（2014）．産褥早期の初産婦の母乳をめぐる実母の関わりの特徴．日本助産学会誌，28（2），229-238.
・西谷正太，木田哲夫，高村恒人，篠原一之（2013）．家族関係の行動神経基盤-家族「愛」の神経基盤-分子精神医学，13（4），236-242.
・野村奈央，岡山久代（2015）．実母の育児支援に対する母親の受け止めと実母の気分状態との関連性．滋賀母性衛生学会誌，15（1）．13-19.
・岡津愛子，藤井朝代，山口美里（2011）．祖母の育児支援の実態ー妊婦が望む育児支援との比較ー．香川母性衛生学会誌，11（1），45－49.
・田幡純子，刀根洋子，鈴木祐子（2012）．育児を支援する事による祖母の生活の質．ウーマンズヘルス学会誌，11(1)，25-32.
・寺坂多栄子，斉藤祥乃，土川祥，渕元純子，正木紀代子，岡本久代（2011）．初めて妊娠した娘を持つ実母の孫育て講座に対するニーズ．滋賀母性衛生学会誌，11（1），7-11.
・塚田桃代，中西伸子（2011）．母娘世代間における育児意識の相違に対する効果的な支援について．奈良県母性衛生学会雑誌，24 号，36-39.
・柳川真理（2002）．娘の妊娠・出産に対する実母の援助行動.香川母性衛生学会誌，2(1)，50-57.

第２章　産後支援における実母の母性性･世代性の特徴

第１節　実母が娘の母親役割獲得過程を支援することの現状と課題

初めて母親となる女性はおよそ 3 から 4 ヵ月かけて、3 つの段階を経て母親役割を取得するといわれ（Mercer, R.T,2006)、女性が母親役割を取得するためには、重要他者による支援が必要とされる（新道他,1990)。わが国では、江戸時代から大幅な減少が見られずに近年においても続く里帰り文化がある（大村,1990)。里帰りによる産後 1 カ月以内の母親の主な支援者は、およそ 6 割～9 割が実母である（小林他,2008；森田,2002；出石他,2014)。母親になる女性が母親役割を獲得するうえで必要とする育児に関する情報や育児技術の習得、育児観への理解など心理的支援が得られやすい実母の支援（日高他,2013）は女性の満足感が得られ、母親役割の獲得に良い影響を及ぼす（青島他,2000)。また、産後 1 ヵ月における支援者が実母である場合は、女性の母親としての肯定的な意識は高くなる（榮,2006）ことからも、初めて母親になる女性においては、母親役割を取得する上で実母は重要な支援者と位置づけられる。しかしながら、里帰り支援においては、実母からの支援が途絶えることによる母親の不安（小林,2010）や児との別居による父親役割の発達の遅れが指摘されている（野村他,1991)。

一方、支援者である実母は、産後 1 ヵ月以内の娘を支援するにあたり、今と昔の育児の違いや、母乳育児、食事に関する不安や、支援対象者である娘との関係性におけるストレスを抱えている（三浦他,2015)。娘が出産後 1 ヵ月以内の支援は､実母にとって張合いのある肯定的なものであるが、実母の就労や家族内に要介護者がいる場合など実母自身の心身の負担となる側面もある（井関他,2015)。心身の回復途中にある褥婦が、わが子と自分に適した方法を模索し独自の役割関係を発達させるうえで親密なパートナーは、どのような支持的な人でも真似のできない方法で母親役割の獲得に貢献するとされる（都留,1991)。里帰り支援の開始から実母はどのよう

に初めて母親となる娘の母親役割獲得を支えていたか、娘を支援することから生じる不安やストレスにどう対処していたかそのプロセスを明らかにすることは、初めて母親になる女性の母親役割獲得を促進するための支援のあり方への示唆を与えるものである。さらに、現在各地で実施されるようになった祖父母教育に示唆を与えるものでもあると考える。そこで、本研究は、初めて出産した娘が母親役割獲得において特徴的段階を辿る産後1ヵ月までの期間に焦点をあて、その母親役割獲得を支える実母の支援過程を明らかにし、実母への支援の在り方の示唆を得ることを目的とした。

第２節　実母が娘の母親役割獲得を支援する母性性･世代性のプロセス

第１項　研究方法

１．研究デザイン

本研究は、娘が出産し退院後からおよそ１ヵ月間に渡り、里帰りという形態で娘の母親役割獲得を支える実母の支援のプロセスを、半構造化面接による語りから明らかにすることを目的とするため､質的帰納的研究とし、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA)を用いた。半構造化面接を里帰り先である実母宅で実施し、さらに、娘に対する半構造化面接で得られた語りから、助けになったと思う実母の支援の特徴を得た。

２．用語の定義

里帰り：他家に嫁いだ娘が出産を機に、実母宅に娘の子どもや娘の夫と共に一時的に帰ること。

母親役割獲得過程：娘が出産し育児する中で、専門家に支持された育児からわが子と自分に適した方法を見出し、母親である自分に心地良い感じを持つまでの過程のこと。

支援：母親役割獲得過程を支える援助のこと。

３．研究対象者

A 若しくは B 市で初めて出産し退院後実母宅に里帰りし、初めて祖母になった実母から支援を受けた褥婦（娘）と、その娘の産後の支援を初めて引き受け、初めて祖母になった実母の 13 組。いずれも本研究への参加の同意が得られた者とする。

４．データ収集方法

研究協力の得られた A 及び B 市の産科外来に、妊婦健診のために来院した妊婦に研究の概要を説明し、研究参加の同意を得た。同意を得られた妊婦から実母の紹介を受け、実母からの同意を得た。褥婦の里帰り期間中に

里帰り先で、娘とその実母に対し、およそ1週間間隔で2回の半構造化面接を実施した。出来る限り実母と娘が互いの語りが聞き取れないように環境調整を行った。娘の母親役割獲得過程の変化と、実母の支援がどのように変化するかを明らかにしたいと考えたため、6～7 日間隔で 2 回訪問した。インタビュー内容はインタビューガイド（添付資料 2-7，2-8）に沿って実施し、実母には背景の把握のため年齢、就労の有無、娘との同居期間を、支援については支援動機、支援内容、支援において留意していること、娘に影響を与えたと思う支援、現在の気持ちについて語りを聞いた。娘には背景把握のため年齢、既往歴、分娩時の妊娠週数、出生時の新生児の体重、出産体験に満足しているか、授乳方法、夜間の睡眠時間と疲労感を、母親役割取得状況を把握するために、前原他（2005）により信頼性・妥当性が確保されている「母親役割の自信尺度」と「母親であることの満足感尺度」を参考に、自分独自の方法で育児しているか、母親としての自分の捉え方を、その他、助かった実母の支援内容、現在の気持ちについて語りを聞いた。

５．データ収集期間

2016 年 1 月～2016 年 9 月

６．分析方法

実母へのインタビュー内容の分析方法は M-GTA の手法に沿って、以下の手順で実施した。

１）半構成化面接後 1 週間以内に逐語録を作成し、内容を確認した。

２）分析テーマを、里帰りにおいて実母が初めて母親となる娘を支援するプロセスに着目し設定した。

３）分析焦点者を、初産婦である娘が出産し退院した後の支援を、里帰りの形態で初めて行った実母とした。

４）分析ワークシートを使用し、概念を生成した。

５）理論的メモをもとに、概念の関係性を見出し、結果図、ストーリーラインを作成した。

娘へのインタビュー内容の分析は、実母から支援を受けた具体的な出来事を娘がどのように感じ取っていたかを明らかにするため、そのような場合に最も適しているとされるコード化法を選択した。

７．分析結果の信頼性

M-GTA 研究会に継続的に参加した 2 名と、質的研究の専門家である博士論文指導教授からスーパバイズを受けた。また、研究者自身が西日本 M-GTA 研究会に参加し、分析結果の信頼性の向上に努めた。

８．倫理的配慮

山口県立大学生命倫理委員会の承認（承認番号第 27－54 号）を得た後に研究を開始した。研究協力施設の責任者と研究対象者である褥婦とその実母に、研究の概要、研究参加への自己決定の権利と中止の自由、研究参加を途中で辞退しても不利益を生じないこと、プライバシーと匿名性の保持について説明し同意を得た。データは研究目的以外で使用しないこと、研究終了まで厳重に管理し、研究が終了後も可能な限り保管するが、保管が困難になった時は速やかに破棄することの保証と、結果の公表方法について説明し同意書に署名を得た。インタビューは実母と娘が互いの話が聞こえず育児が中断されず、かつ手助けを求めやすい居間で独りずつ実施した。得られたデータは、個人名を特定せずに記号若しくは番号で取り扱い、速やかに電子媒体を用いて逐語録にし、分析を行った。本論文内容に関連する利益相反事項はない。

第２項　実母の支援プロセスと諸問題

１．研究対象者の概要

実母 13 名（A～M）の年齢は 52～65（平均 57.5）歳、就労有り 9 名

（69.2%）、無職 4 名（30.8%）であった。娘の年齢は 19～37（平均 29.0）歳、娘の分娩時期は正期産が 12 名（92.3%）、早産が 1 名（7.7%）、孫の出生体重は低出生体重児が 3 名（23.1%）、相当体重児 10 名（76.9%）であった。全ての娘において、1 回目と 2 回目のインタビュー時の授乳状況に変化は見られず、完全母乳が 9 名、混合栄養が 4 名であった。実母全てに配偶者が有った。研究対象者 A、B、I を除き、娘婿は一緒に里帰りし同

表 2-1　研究対象者の背景　　n=13

研究対象者	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
実母の年齢（歳）	55～59	55～59	50～54	50～54	60～64	65～69	55～59	50～54	55～59	55～59	55～59	60～64	50～54
実母の就労	無	有	有	有	無	無	有	無	有	有	有	有	有
娘の年齢（歳）	25～29	30～34	25～29	25～29	30～34	35～39	30～34	20～24	25～29	25～29	35～39	25～29	15～19
娘の分娩時期	正期産	正期産	正期産	正期産	正期産	正期産	正期産	正期産	正期産	正期産	早産	正期産	正期産
孫の低出生体重	有	無	無	無	無	無	無	無	無	有	有	無	無
娘の授乳方法	混合	混合	完全母乳	完全母乳	完全母乳	混合	完全母乳	完全母乳	完全母乳	完全母乳	混合	完全母乳	完全母乳
配偶者(祖父)の有無	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
娘婿の訪問	月末	月末	同居	週末	週末	週末	同居	同居	月末	週末	週末	週末	同居

居しているか、若しくは週末に娘の実家を訪れていた（表 2-1）。インタビュー1 回目の実母 1 人当たりの平均支援日数は 13.4 日間、インタビュー2 回目の実母 1 人当たりの平均支援日数は 19.4 日間であった。1 組あたりのインタビュー時間は 139.8±32.96 分であった。

2．実母への半構成化面接の分析結果

里帰りにおいて実母が初めて母親となる娘を支援するプロセスを分析した結果、4 つのカテゴリーと 10 つのサブカテゴリー、35 の概念が抽出された。カテゴリーを【】、サブカテゴリーを≪≫、概念を＜＞で示す。

カテゴリー【娘中心に関わる】は、4 つの概念＜娘の接し方への戸惑い

＞＜娘が求める要求を察する＞＜知人からの育児技術に関する情報取集＞から抽出されたサブカテゴリー≪心身の疲労を回復させる役割≫と、4 つの概念＜ポジティブな思考に向けさせる＞＜不安を払拭するための大丈夫という声かけ＞＜娘への諭し＞＜娘の性格を踏まえた関わり＞から抽出されたサブカテゴリー≪娘の不安な気持ちに対する理解≫から抽出された。カテゴリー【娘と孫に関わる】は、3 つの概念＜孫の反応の翻訳＞＜娘の育児に関する戸惑い＞＜今時の育児方法への理解＞から抽出されたサブカテゴリー≪娘と孫を対にして見る≫と、5 つの概念＜自分の育児経験を思い出す＞＜母から受けた支援を娘に繋ぐ＞＜実体験に基づき手本を示す＞＜自己を顧みずに無心に助ける＞＜自分なりの考えの助言＞から抽出されたサブカテゴリー≪自分の育児の再現≫と、5 つの概念＜娘と一緒に試行錯誤しながら見出す育児方法＞＜娘の育児方法を尊重＞＜上手く育児する娘の見守り＞＜母親らしくなった娘への褒め言葉＞＜母親らしくなった娘への信頼＞から抽出されたサブカテゴリー≪娘独自の育児を見出すための手助け≫から抽出された。カテゴリー【祖母役割の自覚】は、3 つの概念＜自己の健康不安＞＜無理しない支え＞＜夫との連携＞から抽出されたサブカテゴリー≪家族間の連携≫と、4 つの概念＜祖母役割としての無力感＞＜孫への愛おしさ＞＜娘親子を支援することの楽しみ＞＜母娘関係を考える＞から抽出されたサブカテゴリー≪祖母になる実感≫から抽出された。カテゴリー【娘家族の自立への支援】は、2 つの概念＜育児の裏方役に徹する＞＜育児に関する注意＞から抽出されたサブカテゴリー≪娘の自立に向けた準備≫と、2 つの概念＜娘婿の育児参加を促す＞＜娘婿の父親としての成長の認知＞から抽出されたサブカテゴリー≪娘婿の父親役割を促す≫、および 3 つの概念＜里帰り終了後の娘の生活をイメージする＞＜里帰り終了による寂寥感＞＜逃げ場の提供＞から抽出されたサブカテゴリー≪娘の自立と依存のバランスをとる≫から抽出された（表 2-2）。

３．ストーリーライン

分析の結果得られた中村（2018）による結果図（図 2-1）とストーリーラインを実母の語りの代表的な具体例「　」を添えながら以下に示す。

研究結果から明らかになった里帰りにおいて実母が初めて母親となる娘の母親役割獲得過程を支援するプロセスは、里帰りという形態により娘と同居することで娘と同一化（対象のもつ考えや感情・行動・属性を取り入れ､同様の傾向を示すようになる心理的過程)することから始まっていた。

実母の支援は､【娘に中心に関わる】ことにおいて*「いろんな人にこんな時どうしていたと色々聞いて」*＜知人からの育児技術に関する情報収集＞から始まり、支援の準備を整えていた。*「考えて行動するという感じではなくもう体が動いている」*と＜娘が求める要求を察する＞ことと､*「最初の頃に、睡眠不足で、いらいらして、鬱っぽくなりかけたことが1日あって、ごめんもう私駄目って言ったことが1回有りまして、わかった、それじゃあ、2～3時間ちょっと寝なさいと、3時間ぐらい寝たら体力も回復するかと思い」*分娩による娘の≪心身の疲労を回復させる役割≫を引き受けていた。*「子育てってそんなに神経質になるのが一番いけないと言いますよね。授乳は3時間って言われたからそのようにしなければいけないとイライラしたり、良くないのだけれど、すごく私はわかるんです。それでいいんだよって言い」*≪娘の不安な気持ちに対する理解≫を示し､*「母乳だけにさせたいから朝昼晩汁物を作り食物に気をつけて、できたらミルクはやめたいから、食べさせるものに気をつけていますよね」*と＜母乳分泌促進に向けた支援＞を行っていた。≪娘の不安な気持ちに対する理解≫をするがゆえ*「大丈夫かなという日もあるけど､大丈夫よって言葉を極力かけるように､それがすごく安心感になる」*ように＜不安を払拭するための大丈夫という声かけ＞や*「娘の性格を私が見てきているからこの子にはこうしてやると*

表 2-2　実母が行う母親役割を獲得するための支援

カテゴリー (4)	サブカテゴリー (10)	概念名 (35)	定義
娘中心に関わる	心身の疲労を回復させる役割	娘の接し方への戸惑い	イライラする娘への接し方に戸惑うこと
		娘が求める要求を察する	娘の様子を観察し、娘が何を望んでいるかを察知して、自然と行動に移すこと
		知人からの育児技術に関する情報収集	里帰りを引き受けるにあたり、事前にまたはその時々に、支援に関する情報を知人やインターネットなどの周囲から得ること
		母乳分泌促進に向けた支援	母乳に良いと思う食事や乳房マッサージを積極的に取り入れて、母乳分泌が促進するように支援すること
	娘の不安な気持ちに対する理解	ポジティブな思考に向けさせる	不安やネガティブな思考を払拭し、あえてポジティブな考え方、捉え方を娘に話す
		不安を払拭するための大丈夫という声かけ	不安がる娘を安心させる目的で、娘の育児方法で大丈夫だという肯定的なフィードバックを行うこと
		娘への諭し	育児とはそういうものだと、叱るような言い方ではなく諭すように言い聞かせること
		娘の性格を踏まえた関わり	幼いころから知っている娘の性格に合わせて関わること
娘と孫に関わる	娘と孫を対にして見る	孫の反応の翻訳	孫の反応を読み取り、その意味を娘に伝え共有すること
		娘の育児に関する戸惑い	自分の育児と異なる娘の接し方に戸惑うこと
		今時の育児方法への理解	娘の様子を見て、自分の子育てとの違いに戸惑う時には、病院や助産院に相談し、娘から病院で言われたことを聞きだし、専門家に言われたことを重視し納得すること
	自分の育児の再現	自分の育児経験を思い出す	娘と孫と共に生活するうちに、自分の里帰り中の育児体験を思い出すこと
		母から受けた支援を娘に繋ぐ	自分が親にして貰った支援を思い出し、受けた支援を同じように娘に繋ぐこと
		実体験に基づき手本を示す	孫を上手く世話することができない娘に代わって、自分の体験から得た育児技術の手本を示すこと
		自己を顧みずに無心に助ける	娘夫婦と孫の為に、大変さを顧みずに没入して動くこと
		自分なりの考えの助言	娘と孫の様子を常に観察し、その都度自分なりの考えを助言すること
	娘独自の育児を見出すための手助け	娘と一緒に試行錯誤しながら見出す育児方法	娘と一緒に試行錯誤しながら、娘と孫に最も良いと思われる育児方法を見出すこと
		娘の育児方法を尊重	実母が言いたいことを抑えて、娘に従い、娘の育児方法や考えを尊重すること
		上手く育児する娘の見守り	徐々に育児に慣れ、健康に成長する孫の様子を見て、育児する娘に手を出さずに傍で見守ること
		母親らしくなった娘への褒め言葉	娘が育児に慣れ、孫の啼泣の理由がわかるようになり、愛情を持って孫に接し、母親らしく成長していることを認め褒めること
		母親らしくなった娘への信頼	娘の様子に安心し、今後も母親役をこなしていくだろうという信頼を抱くこと
祖母役割の自覚	家族間の連携	自己の健康不安	自己の健康について不安を感じること
		無理しない支え	里帰りの支援を全うするために、自分の健康を崩さずに無理をせずに、出来る範囲で支援をすること
		夫との連携	夫と協力しながら娘と孫の手助けをすること
	祖母になる実感	祖母役割としての無力感	娘の力になっていないと感じることから、自分が娘の母親として失格あるいは駄目な母親であると感じること
		孫への愛おしさ	孫を愛おしく可愛いと思う気持ちを持つこと
		娘親子を支援することの楽しみ	娘と孫を支援することに楽しさを感じること
		母娘関係を考える	体験を通して母娘関係について考えること
娘家族の自立への支援	娘の自立に向けた準備	育児の裏方役に徹する	娘の母親らしい様子に安心し、母親としての娘を信頼し、育児の裏方役に回ること
		育児に関する注意	育児に関する揺るがない自分の考えをきっぱりと娘に注意すること
	娘婿の父親役割を促す	娘婿の育児参加を促す	育児協力する娘婿の様子を見て微笑ましく感じ、娘の手助けを娘婿に任せること
		娘婿の父親としての成長の認知	娘婿が父親らしく成長していると認めること
	娘の自立と依存のバランスをとる	里帰り終了後の娘の生活をイメージする	娘が自宅に戻ったときの生活をイメージすること
		里帰り終了による寂寥感	里帰り終了後を想像し、寂しさと虚しさが生じること
		逃げ場の提供	自宅に戻った後の娘にストレスが生じた時の逃げ場として、実母宅に帰ってきて良いと伝えること

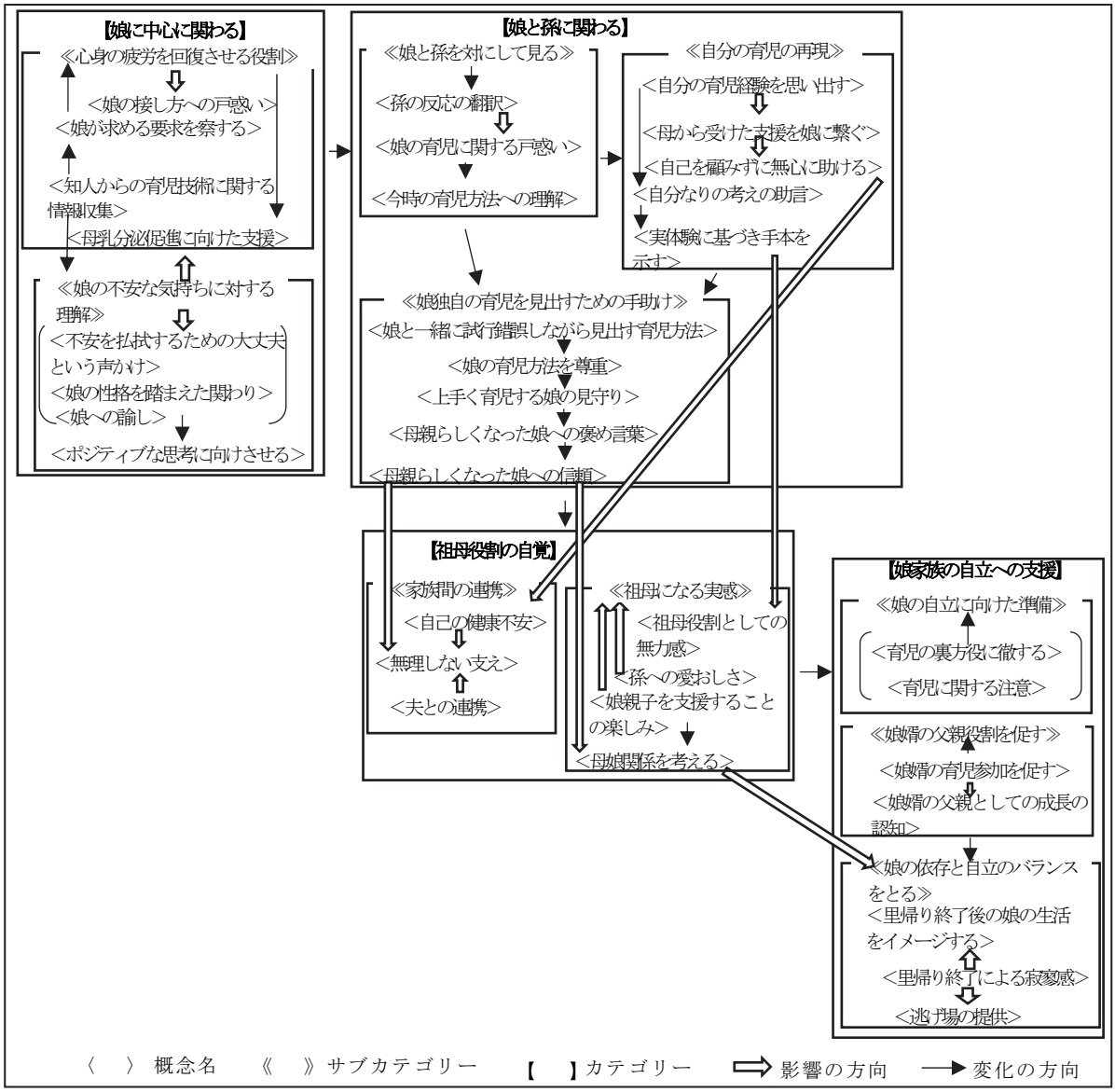

図2-1　里帰りにおいて実母が初めて母親となる娘の母親役割獲得過程を支援するプロセスの結果図

※中村敦子(2018).里帰りにおいて実母が初めて母親となる娘の母親役割獲得過程を支援するプロセス.母性衛生,59(1).p48 引用

いいかなと」<娘の性格を踏まえた関わり>をし、時には「*あなたの子だから仕方ないよ、この子もだんだん成長していくんだから、まだ見やすいよ*」と<娘への諭し>を伝え「*ポジティブに考えなさいよと声かけて、良い事は言うようにして不安がるようなことは言わないように*」<ポジティブな思考に向けさせる>関わりをしていた。このように≪娘の不安な気持ちに対する理解≫を示すことは「*特に上手におっぱいを飲ませているので、無理をしない程度にということはなんとなく伝えているかな*」と<母乳分

泌促進に向けた支援＞に影響していた。実母は娘の≪心身の疲労を回復させる役割≫を引き受けることで*「私も戸惑う、ここはこうじゃないって言うと、いいのよここはこれでって、イライラもしていますし」*＜娘の接し方への戸惑い＞を生じていた。

実母は【娘と孫に関わる】ようになり*「私の中では娘と孫が常にセット。娘の方に重きがありそこに子どもがぶら下がっている感じで二人を見ながら」*≪娘と孫を対にして見る≫ことで*「孫の顔の表情が変わる度に話していますね。なんとなくこれは甘え泣きよねとか」「口がすごく張っているからミルクが欲しいんじゃない」*と＜孫の反応の翻訳＞を娘に伝えたが*「今の育児に対して疑問ですよね」*と＜娘の育児に関する戸惑い＞が生じたため*「助産師に聞いて私も新たにそうなんだってわかって」*＜今時の育児方法への理解＞に努めていた。≪娘と孫を対にして見る≫うちに*「昔を思い出して自分が小守歌を歌っていたのですが同じことをしている」*と＜自分の育児体験を思い出す＞。*「思い出してきますね。あー、こういうのもして貰ったなと。だから自分が母にして貰ったようにやって貰った分はしてやりたいと、親が私に、私が親に、皆こういう風にして、あー、有り難いなと思いますね。感謝ですよね」*＜母から受けた支援を娘に繋ぐ＞ために＜自己を顧みずに無心に助ける＞姿があった。また、*「自分がどうやって子育てしたんだろうと思い出して、揺らしてにこうしたら寝ますからね。私は昔と同じことをしているんだと」*＜自分の育児体験を思い出す＞。すると、*「もう少し起こしてみたらいいんじゃあないと言っている」*し*「私はこうしたよって言っています」*と＜自分なりの考えの助言＞をし*「あやすのも、こうやったら気持ちいいねって、赤ちゃんに話しかけていると、ママが聞いていて、今度自分がする時には、私が言っているのと同じように言う。私がどうやるのかを見せて私がやっているのを見て、見よう見まね」*できるように＜実体験に基づき手本を示す＞ことで≪自分の育児の再現≫をし

ていた。≪自分の育児の再現≫と＜今時の育児方法への理解＞をもとに、*「赤ちゃんがそれまでは3時間でいい感じでいけるんじゃないって二人で言っていたのですがリズムが狂っちゃって」「娘と一緒に四苦八苦しながら、一緒にしんどいっていって試行錯誤の状態を繰り返して」「個人差があるからこれでいいのかなあと思いながらやっているところです」*と＜娘と一緒に試行錯誤しながら見出す育児方法＞で≪娘独自の育児を見出すための手助け≫をし、次第に*「この子にはこの子のやり方があるだろう。あの子の中で決めたこうするよをそうじゃなくてとあれこれ言うと、狂っちゃう、方向性が、せっかく整っていっていることが、決めてることにはい、従いますって感じ」*と＜娘の育児方法を尊重＞する。手出しをせずに*「見守るだけでお母さんらしくなったなと思うようになり、で、言わないようになり今は何を要求しているのかが少しずつ分かってきたというか」*＜上手く育児する娘の見守り＞から*「褒めて頑張ったねって言いながら」*＜母親らしくなった娘への褒め言葉＞をかけ*「私がいなくても大丈夫いう感じ。お母さんになったこの子を信頼できるというか、すごいなというかだんだん親になっていくんだなあと、口を出すというよりは安心ですね。すごいですよね」*と＜母親らしくなった娘への信頼＞をしていた。これらの過程は≪娘独自の育児を見出すための手助け≫として位置付けられた。

実母は次第に【祖母役割の自覚】をするようになる。＜母から受けた支援を娘に繋ぐ＞ため*「最初は全部時間が許す限り全部やってやりたかった。フォローしてやりたかった。他人には感謝の報酬を期待するかも知れませんが娘には私が頑張らなくてどうするみたいな。こんなにしんどいのにまだ動いている」*と＜自己を顧みずに無心に助ける＞が、＜母親らしくなった娘への信頼＞を抱く、あるいは*「里帰り中の休みが欲しいです」*と＜自己の健康不安＞を生じると、*「今、主人と協力してやっている感じです」*と＜夫との連携＞をし、*「一番私が気をつけていることは睡眠不足にならない*

事です。私が日々元気でいないと」と思い＜無理しない支え＞方をして≪家族間の連携≫を取っていた。また、「*孫の為なら何でもできそうな気がしてすごく豊かな気持ち*」と＜孫への愛おしさ＞や「*楽しいですよね、ご飯作っていても娘がいるとレパートリーや量が増え*」＜娘親子を支援する楽しみ＞が生まれ、「*やっと母親らしくなってきたなと嬉しいですね。張合いとかいうよりもこうやって母と娘って繋がりは密になっていくし*」「*そこがその親子関係だったんだろうなって*」と＜母親らしくなった娘への信頼＞を抱くことで＜母娘関係を考える＞ようになり「*この子もですが私もおばあちゃんになっていくんだ*」と≪祖母になる実感≫をした。実母は≪自分の育児の再現≫が出来ないと「*何もしてあげられない。何にもできんポンコツばあちゃんだ。*」「*娘の母親として充分なことをしてやれなかった失格だった*」と＜祖母役割としての無力感＞を抱いていた。

里帰り終了が間近になると【娘家族の自立への支援】を意識する。≪娘の自立に向けた準備≫をし「*ただ楽にできるようにサポートに回るぐらいで手取り足取りしていない。困った時はあれですけど、なんとなくフォロ―しているだけみたいな感じです。とにかく私がフォローしてやらなきゃというえらい張り切っていた気がします。だんだんと落ち着いてくると、今度はなんだかこう引いていますね、私自身。私も仕事があるしねとか、夜、必死で寝ないって言っていた時に一緒になって、遅くまで起きていましたけど、だんだんじゃあお母さん明日すごく忙しいから、じゃあここで終わりみたいな感じでやっているかも知れません*」と＜育児の裏方役に徹する＞が「*こういう事やめなさいって絶対ダメよという感じで言っています*」＜育児に関する注意＞はしていた。さらに「*パパがタオルを持って待っています。沐浴から上がってきたら私もちょっと拭いてでもすぐに逃げますよね。二人に任せて*」＜娘婿の育児参加を促す＞ことで≪娘の婿の父親役割を促す≫、その結果「*お父さん（娘婿）上手だねっていうともまん*

ざらじゃない顔をして俺がやらないとと彼なりに一生懸命にフォローしようとしているので、お婿さんとこの子（孫）を見て家族になっていくんだなと、そのサポートも続けられたらいいなあと。最初は旦那さんもひっくるめてイメージしていなかったけど確かに変わってきています」と＜娘婿の父親としての成長を認知＞していた。里帰りが「*終わりとなると私鬱になるんじゃないかと*」「*私も寂しいのでしょっちゅうこっちに帰ってくるって言っていました*」「*パパも来ているし抱きたいけど抱けない。正直言って寂しい*」と実母に寂寥感が生じた。＜里帰り終了による寂寥感＞は「*最初の頃は家に帰る頃のことはとても考えられなかったけど、だんだん自宅に帰ってからのイメージが浮かぶようになった*」と＜里帰り終了後の娘の生活をイメージする＞ことに影響し「*ストレスが溜まったらここに帰って来て行き来しながら繰り返していくしかないかと*」＜逃げ場の提供＞を与えていた。実母は≪娘の依存と自立のバランスをとる≫ことで里帰りの支援を終了させようとしていた。

実母の支援プロセスは、母親役割獲得過程にある娘と娘家族との同居生活から開始し、別居生活へと向う現象特性を持ち、実母の視野は娘中心から娘親子、自分の家族、娘婿を含む家族へと拡大していた。実母は【娘に中心に関わる】こと【娘と孫に関わる】ことにおいて＜自己を顧みずに無心に助ける＞姿から、祖母として【娘家族の自立への支援】をし＜無理しない支え＞方へと変化させていた。＜母親らしくなった娘への信頼＞と＜母娘関係を考える＞概念を中心に実母の支援は大きく二つに変化していた。

第３項　娘が実母に期待する母性性・世代性の比較

実母から支援を受けた娘の半構造化面接内容を分析した結果、娘が実母に期待する支援として 12 の概念（概念を＜＞で示す）が抽出された。母親役割を獲得するうえで助けになった実母の支援として、＜睡眠不足の解消に

よる心身の回復＞＜心身の健康状態を察する＞＜育児に専念するための日常生活全般の支援＞＜日常生活を営むための育児の代行＞＜自分の育児方法を承認し実行できるためのバックアップ＞＜自分の育児に対する全面的な承認から生じる見守り＞＜試行錯誤し新生児に応じた育児方法を一緒に見出す＞＜新生児の表情を読み取り我が子に適した育児方法の手本を示す＞＜自分の育児方法で大丈夫だと安心させる声かけ＞＜精神的に楽にいられる環境の提供＞＜育児方法の選択肢を広げられるような助言の仕方＞＜自立に向けて支援の手を徐々に緩める＞が見いだされた（表 2-3）。

表2-3　里帰り中の娘が母親役割を獲得するうえで助けになったと思う実母の支援

概念名	定義
睡眠不足の解消による心身の回復	自分の健康面を心配し、夜間の睡眠不足を解消できるように、新生児の世話を交代してくれること
心身の健康状態を察する	自分のことを気に掛けてくれて、言葉にしなくても自分の気持ちを察して支援してくれること
育児に専念するための日常生活全般の支援	育児に集中できるように、家事全般を引き受けてくれること
日常生活を営むための育児の代行	育児を変ってくれて、育児で疎かになる自分の日常生活を支えてくれること
自分の育児方法を承認し実行できるための バックアップ	自分が行いたい育児を知り、その育児方法を認めてくれて、実施できるように協力してくれること
自分の育児に対する全面的な承認から生じる見守り	実母の育児方法や考えを押し付けず、自分の育児を否定せずに尊重し、口出しせずに見ているだけで干渉されないぐらいの適度な距離感で接してくれること
試行錯誤し新生児に応じた育児方法を一緒に見出す	育児に戸惑いながら試行錯誤し、新生児に応じた育児方法を一緒に見出してくれること
新生児の表情を読み取り我が子に適した育児方法の手本を示す	新生児の表情を読み取りその意味を伝え新生児に適した育児を判断し、育児の手本を示してくれること
自分の育児方法で大丈夫だと安心させる声かけ	育児で不安が生じた時に、新生児の表情を読み取り、今の状態が大丈夫だと安心させてくれること
精神的に楽にいられる環境の提供	気を遣わずに言いたいことが言える関係により、居心地のよい環境を作ってくれること
育児方法の選択肢を広げられるような助言の仕方	押し付けた言い方ではなく、選択肢を広げるための１つの情報として助言をしてくれること。
自立に向けて支援の手を徐々に緩める	徐々に自立できるように、計画的に支援の手を離してくれること

これらの概念名を、実母の支援プロセスから抽出された概念名、サブカテゴリーと比較検討した。娘が助かったと認識し、実母に期待する支援＜睡眠不足の解消による心身の回復＞と＜日常生活を営むための育児の代行＞に対し、実母は≪心身の疲労を回復させる役割≫を行っていた。娘の＜心身の健康状態を察する＞要求に応え、実母は＜娘が求める要求を察する＞支援を行っていた。娘の求める＜自分の育児方法を承認し実行できるためのバックアップ＞に対しては、＜娘の育児方法を尊重＞し、≪娘独自の育児を見出すための手助け≫を行っていた。娘が助かったと認識した＜自分の育児に対する全面的な承認から生じる見守り＞に対し、実母は＜母親らしくなった娘への信頼＞を示し、＜上手く育児する娘の見守り＞を行っていた。娘が助かったと思う＜思考錯誤し新生児に応じた育児方法を一緒に見出す＞支援は、＜娘と一緒に試行錯誤しながら見出す育児方法＞として概念名に見いだされている。その他、＜新生児の表情を読み取りわが子に適した育児方法の手本を示す＞支援に対し、実母は＜孫の反応の翻訳＞を行っていた。＜自分の育児方法で大丈夫だと安心させる声かけ＞」に対しては、＜不安を払拭するための大丈夫という声かけ＞を行っていた。＜精神的に楽にいられる環境の提供＞に対し、＜ポジティブな思考に向けさせる＞や＜娘の性格を踏まえた関わり＞で応じていた。＜育児方法の選択肢を広げられるような助言の仕方＞に助けられており、実母からは＜自分なりの考えの助言＞が見いだされている。＜自立に向けて支援の手を徐々に緩める＞に対しては、＜娘の自立に向けた準備＞を行い＜育児の裏方に徹する＞ことで対応していた。このように、母親となる娘が実母に期待する支援 12 全ての概念は、実母の半構成化面接から抽出された支援と類似していた（表 2-4）。

表 2-4　娘が実母に期待する支援に類似する実母の支援プロセスから抽出された概念

娘が**助けになったと思う実母の支援**の概念名	類似する実母の支援プロセスから抽出された概念名＜＞・サブカテゴリー≪≫
睡眠不足の解消による心身の回復	≪心身の疲労を回復させる役割≫
心身の健康状態を察する	＜娘が求める要求を察する＞
育児に専念するための日常生活全般の支援	≪心身の疲労を回復させる役割≫
日常生活を営むための育児の代行	＜実体験に基づき手本を示す＞
自分の育児方法を承認し実行できるためのバックアップ	＜娘の育児方法を尊重＞
	≪娘独自の育児を見出すための手助け≫
自分の育児に対する全面的な承認から生じる見守り	＜母親らしくなった娘への信頼＞
	＜上手く育児する娘の見守り＞
試行錯誤し新生児に応じた育児方法を一緒に見出す	＜娘と一緒に試行錯誤しながら見出す育児方法＞
新生児の表情を読み取り我が子に適した育児方法の手本を示す	＜孫の反応の翻訳＞
自分の育児方法で大丈夫だと安心させる声かけ	＜不安を払拭するための大丈夫という声かけ＞
精神的に楽にいられる環境の提供	＜ポジティブな思考に向けさせる＞
	＜娘の性格を踏まえた関わり＞
育児方法の選択肢を広げられるような助言の仕方	＜自分なりの考えの助言＞
自立に向けて支援の手を徐々に緩める	＜娘の自立に向けた準備＞
	＜育児の裏方役に徹する＞

第３節　実母の母性性･世代性の変化

娘の産後における実母の支援過程は、娘の母親として自己を顧みず無心に支援をする時期と､娘の支援を通じて自己を見つめ､無理をせずに支え、娘家族の自立を支援する時期に大きく変化していた。また、娘が母親役割を獲得する過程で希求する支援に合わせて、実母の支援が変化する過程を辿ることが明らかにされた。

第１項　自己を顧みずに無心に娘と孫に関わる時期

鵜山らは産後 1 ヵ月の母親が必要とするソーシャルサポートの一つに、乳房管理法に対する助言をあげている（鵜山他,2005)。混合人工乳は母親役割の自信の低さと関連し（前原他,2005)、母乳育児が確立することは母親としての自信を持つ重要な鍵である（前原他,2015)。娘が産後の特徴的な心理状態を示す里帰り初期において、実母が育児に関する口出しをすると*「私も戸惑う、ここはこうじゃないって言うと、いいのよここはこれでって」*と語られたことから、娘との関わり方に戸惑うことになる。実母は娘の言動を引き受ける姿勢で接していた。娘を安寧に過ごさせ、娘の心身を分娩による疲労から回復させることは母乳分泌に影響を与えない為の配慮であった。娘の気持ちを荒立てないために娘の性格に合わせて関わっていたことは、母娘関係特有の関わり方であり、本研究において新たに見いだされた結果であった。娘が期待する支援に見いだされた＜自分の育児方法を承認し実行できるためのバックアップ＞に対し、実母は、母乳育児が確立するために、母乳分泌量や孫の体重増加については言葉にせず、心身の回復と安寧な気持ちで過ごせる環境作りと、母乳に良い食事を支援していた。第１章の文献検討から見いだされた新たに取り組むべき課題の一つである「実母による母乳育児確立に向けた支援」が明らかにされた。ルービン（1987/新道幸惠他訳,2007）が、食べ物を入手し調理し与えることは、与える人の愛情を示すと述べているように、実母が娘の母乳分泌を促すた

めの特別な食事を提供することは、娘への愛情であり、実母の母性性の表れであると考えられた。

実母が戸惑いながら娘の母親として自己を顧みずに無心に助ける姿は娘に伝わり、娘がわが子へ愛情を注ぎ込む力の糧となる（新道他,1990）。気持ちが通じ合う人の存在は、初産婦の育児適応に影響を与える要因とされる（田中,2007）ように、娘の不安な気持ちを理解し、娘の育児方法を尊重し見守ることは、最良の理解者であると娘に認知され育児適応を支えていたと考える。この無心に助ける行動の原動力は、*「自分が母にして貰ったようにやって貰った分はしてやりたい」*と語られたことから、実母もまた助けられた経験を持っていたことが推察された。氏家ら（2011）は、孫育てに関わる祖母世代は、自らのパーソナリティ発達を完結させたいと意識しているのではなく、心底孫が可愛いと思い子どもの力になりたいと感じているだけであると述べているが、力になりたい思いは娘にとって有益な資源となり、娘が母親役割を獲得していくことで*「この子もですが、私もおばあちゃんになっていくんだ」*と語られたように、実母もまたその体験を通じて自身の育児期の関わりとは異なる支持的な祖母役割へと変化させたと考えられた。

実母は、娘と孫の母子相互作用を俯瞰し、娘が読み取れない微妙な孫の反応の意味を解釈し伝えていた。娘が母親役割を獲得する過程で、これまでの専門家から指導を受けた型どおり方法では上手くいかず、児は泣きのピークである生後 1～2 ヵ月へと向かう（Ronald G,1990；北野,2013）。この時期実母は、今時の育児に関する知識と経験に基づく育児を再現させ、娘と一緒に試行錯誤しながら娘と児に適した方法を見出していく。実母の持つ世代性を発揮させ、育児方法を一緒に工夫することは、産後 1 ヵ月の母親が必要としているソーシャルサポートの一つである（前原他,2015）が、本研究では共に試行錯誤していたことが明らかになった。娘が独自の

育児方法を見出そうとするこの時期は、里帰り開始時期とは異なり、実母の助言や手本を示す行動が娘に受け入れられ助けとなっていた。助けにより娘が母親らしくなることで祖母役割を実感し、助けにならなければ実母に無力感をもたらすと考えられた。

娘は、実母が示す児の反応の翻訳を助けにしながら微妙な児の反応を読みとれるようになると、育児に対し自信を持つようになる。実母は、上手く育児する娘を見守り娘に褒め言葉をかけていた。育児技術や方法を認めることもまた産後１ヵ月の母親が必要としているソーシャルサポートの一つであり（鵜山,2005)、褒め言葉がさらに娘に自信を持たせ、実母は母親らしい娘を信頼するようになる。

近年各地で開催されている「祖父母学級」では、祖母は子育てのサポーター役になることを推奨している（社団法人日本助産師会,2010）が、娘の状態に応じて支援を変える必要が示唆された。また、実母には戸惑いへの支援が必要であり、今時の子育ての情報提供や沐浴などの育児支援力を高める「祖父母学級」の意義が明らかにされた。その他、母乳や娘の接し方に関した内容が必要であると考えられた。

第２項　無理せずに支え娘家族の自立を支援する時期

祖母になることの因子に健康不安と自己実現の困難がある（久保他,2011）とされ、里帰り形態での支援には、従来の生活から娘家族との同居生活へと一時的な修正を必要とし、就労を持つ実母は昼夜を問わない支援との両立に苦しむ。実母は健康不安を生じていたことから産後支援休暇が取れることが望ましいと思われた。無心に助ける一方で無理をせずに夫と連携することは、娘との適度な距離感を生みだしていたと考えられた。*「私がいなくても大丈夫いう感じ。すごいですよね」*と＜母親らしくなった娘への信頼＞を抱くことは*「母と娘は密になっていくし」*と母娘関係が

深まる＜母娘関係を考える＞機会となり＜自己を顧みずに無心に助ける＞手助けから＜無理しない助け＞への移行に繋がっていたと考えられる。大賀ら（2005）が警鐘するように、里帰り形態は、実母が娘を「母親」としてではなく「娘」として接する危険があり娘の母親役割獲得を阻害しかねない。実母が娘を母親として信頼することが自立への鍵であると考えられた。

里帰りが終了に近づくと、支援を徐々に緩め裏方役に徹し娘家族の自立を考えるようになる。この時期、娘との適度な距離を取らなければ娘婿が父親役割を獲得することを阻害しかねない。里帰り中は娘との親密性が高まり孫から癒しを得られ（大賀他,2005)、里帰り終了頃は実母に寂寥感が生じやすい。寂寥感が自立支援に勝ると、自宅に戻った娘家族が自立して生活するイメージを持ちにくく、娘が実家に逃げ込むことを歓迎する恐れがある。里帰りの問題点に母娘間葛藤がある（野村他,1991）とされるが、実母が娘家族の自立を喜びとして捉えられるような支援が必要である。娘を母親として信頼し、お互いに自立した関係であることは、娘が家事と育児を両立させる姿をイメージさせ、一時的な避難場所としての逃げ場を提供することとなる。娘が母親役割獲得過程で子どもに没頭する気持ちと他者に頼る被援助性の感覚を拡大させていく（加藤,2007）ためには、この依存と自立のバランスが重要となる。実母には、支援過程で生じる無力感、寂寥感への支援が必要であると考えられた。

以上から、本研究において、里帰り中の娘の母親役割取得過程を支援することにおける五つの注目すべき知見が得られた。一つ目は、祖母の眼差しが、「娘」個人と「娘と孫」の親子を行き来しつつ、「自己」「自分の夫婦」を見つめ、更に娘婿を含めた「娘家族全体」へと視野を拡大させながら支援過程が進むこと、二つ目に、実母にしかできない、娘の元来の性格を踏

まえた関わり方をしていること、三つ目に、母乳育児が確立するために、母乳分泌量や孫の体重増加については言葉にせず、心身の回復と安寧な気持ちで過ごせる環境作りと、母乳に良い食事を支援していること。四つ目に、専門家から指導を受けた育児方法が、娘親子に適合しなくなった時は、娘と一緒に試行錯誤しながら、娘親子に適した育児方法を見出す役割を果たしていること、五つ目に、里帰り終了間近には、娘に逃げ場を提供し、自立と依存のバランスをとっていることである。

本研究の限界は、娘と娘婿、夫と良好な関係にあった実母に限られていたため、娘の産後 1 ヵ月を支援する全ての実母に適応することには限界がある。

第４節　実母の母性性･世代性を発揮させるための教育

実母は里帰りした娘の支援が開始すると、娘と孫、娘婿、実母の夫や同居中の子どもといった家族との関わりが生じるが、娘を中心に関わっていた。娘を分娩による心身の疲労から回復させた後は、娘と孫に関わり、孫の反応の意味を翻訳し娘に伝え、娘が独自の育児を見出せるために自分の育児を再現させ、母親から受けた支援を娘に繋ごうとしていた。これらの過程では、実母は自己を顧みずに無心に娘を助けていた。実母の年齢はおよそ８割が 50 歳代であり、就労を持つものが７割りであった。実母が就労と支援を両立させながら自己を顧みず無心に助けることで心身への負担を生じ、健康不安を抱えながら支援している現状が明らかになった。産後支援休暇の獲得や健康支援などの実母に対する支援が必要であると考えられた。また、出産した病院を退院し、里帰りを開始した娘は産後５日頃であり、マタニティブルーズという産後の特有な心理状態にある。実母は、いらいらする娘との接し方に戸惑いを生じることがある。その他、今時の娘の育児方法と､実母の経験した育児方法との違いにより生じる戸惑いや、娘の役に立つことができないと、無力感が生じることがある。これらの実母に生じる諸問題への対応が必要である。実母は、娘の母乳分泌が促進されるために、積極的に食事の支援をしている。そのため、母乳分泌に関する情報提供が必要である。支援過程において、次第に娘を母親らしくなったと感じられると、娘を母親として信頼するようになる。母親らしくなった娘を信頼すると、母娘関係について考えるようになる。次第に実母は娘との距離をとり祖母役割を自覚し、娘家族が自立するように無理をしない支え方へと変化させる。しかし、里帰り終了間近に生じる実母の寂寥感が娘の自立を阻害する恐れがあり、寂寥感への支援が必要である。それらを踏まえて、今後、実母を対象とした支援に取り組むことが課題として見いだされた。

第２章　引用文献

・青島恵美子，林ひろみ，森恵美(2000)．母親役割獲得過程に影響する要因の文献的考察．神奈川母性衛生学会，3(1)，44.

・出石万希子，高橋悟子，松尾早枝子，橋岡由奈子，中井恭子，木村知子(2014)．B 病院の産後ケア入院課題についての一考察　産後 4 か月までの母親の育児サポート状況の調査結果から．聖泉看護研，3，67-73.

・日高佳子，尾崎志穂，水野弥生，山口智美，山本美由紀（2013)．里帰り分娩における育児技術獲得過程に御影響する要因の検討．母性衛生，54(3)，258.

・井関敦子，大橋一友(2015)．実母が感じる娘の里帰り分娩に対する負担感と実母の精神的健康との関連．日本助産学会誌，28(3)，438．2)新道幸惠，和田サヨ子(1990)．母性の心理社会的側面と看護ケア．東京，医学書院，98-122.

・加藤道代(2007)．子育て期の母親における「被援助性」とサポートシステムの変化(2)．東北大学大学院教育学研究加研究年報，55，243-270.

・北野啓太郎（2013)．赤ちゃんの泣きのピークは生後 2 ヶ月目。泣き止まないときの対処法と、やってはいけない激しい揺さぶり．https://papayaru.com/akachan-yusaburare-shoukougun-youtube/ 閲覧 2018．2．17.

・小林由希子(2008)．陳省仁．出産に関わる里帰りと養育性形成．北海道大学大学院教育学研究院紀要，106，119-134.

・小林由希子(2010)．出産前後の里帰りにおける実母の援助と母子関係・母性性の発達．日本助産学会誌，24(1)，28-39.

・久保恭子，刀根洋子（2011)．祖母性の因子構造．母性衛生，51（4)，601-608.

・前原邦江，森恵美(2005)．産褥期における母親役割の自信尺度と母親であることの満足感尺度の開発．千葉大学看護学部紀要，27，9-18.
・前原邦江，森恵美，土屋雅子，坂上明子，岩田裕子，小澤治美，青木恭子，森田亜希子，前川智子，望月良美(2015)．出産施設を退院後から産後１か月までに母親役割の自信が高まる要因_高年初産婦と 34 才以下初産婦を比較して_．母性衛生，56(2)，264-272.
・Mercer, R.T.(2006). Nursing support of the process of becoming a mother. Jornal of obstetric, gynecologic, and neonatal nursing. 35(5), 649-651.
・野村雪光，平岡友良，吉田秀昭，木村久美子(1991)．里帰り分娩の最近の動向 Stogaeri delivery．周産期医学，21，691-694.
・森田せつこ(2002)．里帰り出産における夫婦の里方との関係， 愛知県母性衛生学会，20， 15-23.
・中村敦子(2014)．娘の産後里帰りを引き受けた実母の体験．日本助産学会誌，28(2)，239-249.
・中村敦子(2018)．里帰りにおいて実母が初めて母親となる娘の母親役割獲得過程を支援するプロセス．母性衛生，59（1），46-53.
・三浦恵衣子，遠藤和子(2015)．里帰り先の実母が抱える不安の実態調査．母性衛生，56(3)，280．3)大村清(1990)．里帰り分娩－社会的事項を中心に．周産期医学，20，503-508.
・大賀明子，佐藤喜美子，諏訪きぬ(2005)．周産期における生活実態からみた「里帰り出産」．母性衛生，45（4），423-431.
・Ronald,G.Barr(1990). The Normal Crying Curve;What Do We Really Know?. Developmental Medicine and Child Neurology. 32(4) , 356-362.
・ルヴァ・ルービン（1984）／新道幸惠，後藤桂子訳（2007）．ルヴァ・ル

ービン母性論：母性の主観的体験．医学書院．78-82，149-164．
・榮玲子(2006)．産後1か月の育児協力者別にみた褥婦の乳児への愛着と母親としての意識．母性衛生，47(1)，81-88．
・社団法人日本助産師会編(2010)．はじめて孫をむかえる人のための「おまごBOOKミニ」．4-5．
・田中和子(2007)．産後1カ月の母親に関する育児適応に影響を与える要因の検討．日本助産学会誌，21(2)，71-76．
・都留伸子監訳(1991)，看護理論家とその業績/新道幸惠訳，ラモナT.マーサー　母親役割の達成．東京，医学書院，480-481．
・氏家達夫，高濱裕子(2011)．親子関係の生涯発達心理学．風間書房，14-126．
・鵜山愛子，久米美代子(2005)．産後1カ月の母親が必要としているソーシャル・サポートの検討．日本ウーマンズヘルス学会誌，4，19-31．

第３章　娘の産後を支援する実母の母性性･世代性の発達を促すための教育プログラムの検討

第１節　実母を対象とした教育プログラムの現状と課題

我が国においては、江戸時代から見られる里帰り文化が、今なお現代において継承され、その主な支援者は出産した女性の実母である。初めて母親になる女性は重要他者の支援を受け、母親役割を獲得するとされる（新道他,1990)。実母には、孫育てとしての祖母役割以外に、娘の重要なキーパーソンとして娘が母親役割を獲得出来るように支援する役割を担っている。第２章により、実母が娘の産後を支援する過程において自己を顧みずに無心に助ける時期から無理せずに支え自立を支援する時期へと変化がみられた。娘や孫世代、家族全体の健康と幸福の為に愛情を示し娘の情緒的側面を支え、母親として育つことを助けるという実母の持つ母性性は、娘の要求を察し、不安な気持ちに対する理解として表れ、娘の心身の疲労を回復させる役割を果たしていた。次第に上手く育児する娘を見守り、母親らしくなった娘に褒め言葉をかける。母親らしくなった娘を信頼すると、無理しないように支え、孫への愛おしさを深め、娘親子を支援する楽しみを持つ。里帰りによる支援が終了する頃には、娘の依存と自立のバランスを取るようになり、里帰り終了後の娘に逃げ場を提供していた。次世代のために育児の知識や技術を伝達するという実母の持つ世代性は、支援を開始した頃は娘の育児を見守っていたが、徐々に自分の育児を再現させ、自分なりの考えを助言し、娘と一緒に試行錯誤し娘独自の育児を見出す手助けを行う。娘が母親らしくなると、家族間の連携をとり、無理しない支え方へと変化させ、母娘関係を考え始め、育児の裏方役に徹し、娘婿の父親役割を促し、娘家族の自立を支援する。娘の母親役割を獲得する過程に合わせて変化させながら､実母の世代性を変化させることが明らかになった。

その支援過程において、実母は、産褥早期の特有な心理状態にある娘の

接し方や娘の育児に戸惑い、支援力不足による無力感や健康に対する不安、支援終了間際には寂寥感が生じることが明らかとなった。娘の接し方に戸惑うことは娘との関係性に緊張感をもたらす恐れがあり、育児方法に対する戸惑いや支援力不足は、実母が世代性を発揮させることを躊躇させ自己肯定感を低下させる恐れがある。また、支援終了後に実母に生じる寂寥感は、娘の自立を阻害するに留まらず、実母に鬱的な気分をもたらす恐れがある。

近年の育児においては、祖母世代が育児していた頃とは様々な点で異なり、親世代と祖母世代間で育児方法に相違が生じている。そこで、支援を受ける親世代との育児上のトラブルを回避するために、祖母世代が今時の育児について理解することを助け（石井他,2008)、孫育てに関わる祖母世代が育児の脇役として親世代の親役割を妨げずに支援することを目的に、各地で「祖父母学級」が開催されている。この祖父母学級は、昔とは異なる今時の育児や、マタニティブルーズという産後の特徴的な心理状態と身体の回復過程について理解を促し、実母が娘世代のサポーター役割として育児を見守ることを推奨している。実母の育児支援力を強化することを狙いとしてプログラムされているものである（表 3-1)。それにより、産後の有力な支援源として位置付けられている実母に生じる今時の育児に対する戸惑いや娘と実母の意見の相違を回避することに効果がみられている。しかし、従来から行われているプログラムは、支援を受ける母親世代の立場から構成されており、支援者である実母の心身の健康や生涯発達の視点から構成されたものではない。祖父母学級の有り方に関する先行研究では、祖父母同士のピアカウンセリングが必要である（柳川,2003）ことや、親世代との関係作りについて理解できること（寺坂他,2011）が、今後の祖父母学級の課題として明らかにされているものの、産褥 1 ヵ月以内の主たる支援者である実母に生じる第 2 章で明らかにされた諸問題を軽減するための

教育プログラムは先行研究では見あたらなかった。

表 3-1 従来の実母教育プログラムのシラバス

時期	娘の妊娠後期～娘の退院まで（里帰り開始前）		
対象者	娘の産後 1 ヵ月の支援を予定している実母とその家族		
方法	講義・演習　120 分（休憩 10 分）		
一般目標（GIO）育児支援力が向上する			
到達目標（SBO）		内容	方法・留意点
本プログラムの目標が理解できる。		本プログラムの目標の説明 自己紹介	導入　5分
Ⅰ認知領域	1.産後 1 ヶ月の身体的・心理的・社会的特徴の理解ができる。 2.今時の育児と産後の生活の理解ができる。	1）産後の心身の回復過程 2）マタニティブルーズと産後うつの見分け方 1）昔と異なる今時の育児 2）昔と異なる産後の生活 3）新生児の睡眠レベルの判断	講義　20 分 パンフレット使用
Ⅱ情意領域	1.祖母役割について理解できる。	1）育児の見守り役である祖母役割とは 2）祖母として関わるうえでの留意点	講義　20 分
Ⅲ精神運動領域	1.今時の育児ができる。	1）清潔（沐浴、おむつ交換、臍処置） 2）あやし方（抱き方、排気等）	演習　60 分 モデル提示・実施
支援について具体的にイメージできる		1）産後 1 ヶ月支援の具体的なイメージをする	まとめ・質疑応答 5 分
評価方法	自記式質問紙 支援を引き受けることへの不安が軽減される。（認知領域） 戸惑いを持たずに娘と関わることができた。（認知領域） 戸惑いを持たずに娘の育児の支援をすることができた。（認知領域） 娘が母親らしくなったと思うことができた。（情意領域） 娘の自立を喜びとして捉えることができた。（情意領域） 祖母になった自分を肯定的に捉えることができた。（情意領域） 祖母になった自己について新たな発見をした。（情意領域） 自分と家族との関係性を深めることができた。（情意領域） 娘婿の育児参加が期待できた。（情意領域） 娘の育児の役に立つことができた。（精神運動領域） 自分の健康に対して不安がなく支援できた。（精神運動領域）		

そこで、実母の視点に立ち、従来のプログラムを見直すこととした。従来のプログラム内容である今時の育児に加え、母親となる娘の母親役割の獲得を助け、本研究の第 2 章で明らかにされた、支援者である実母に生じる戸惑いや無力感、寂寥感などのマイナスな感情の軽減につとめ、健康体操を取り入れた。また、娘の母親役割獲得過程を理解し、実母の持つ「母性性」「世代性」を母親役割獲得過程に合わせて発揮させることを推奨し、実母が娘の自立を助けることの大切さを強調した。さらに、実母自身が祖母として発達するために、実母自身が受けた支援を思い出しながら、良き

祖母としてどのような関わりをしたらよいかを考えてもらい、世代間や祖母同士の交流も取り入れた（表 3-2）。

表 3-2 新たな実母教育プログラムのシラバス

時期	娘の妊娠後期～娘の退院まで（里帰り開始前）		
対象者	娘の産後 1 ヵ月の支援を予定している実母とその家族		
方法	講義・演習　120 分（休憩 10 分）		
一般目標（GIO）娘の母親役割獲得に向けた支援を通じて、実母自身が自己の母性性、世代性の深まりに気づくことができる。			
到達目標（SBO）		内容	方法・留意点
本プログラムの目標が理解できる。		本プログラムの目標の説明と自己紹介	導入　5分
Ⅰ認知領域	1. 自分の産後1ヶ月までの経験を想起できる。 2. 産後1ヶ月の身体的・心理的・社会的特徴の理解ができる。 3. 娘の母親役割獲得過程と娘が希求する支援を理解できる。 4. 今時の育児と産後の生活の理解ができる。 5. 母乳育児支援について理解できる。 6. 里帰り終了時に生じやすい実母の心身の変化を理解できる。	1）自分が娘を出産し、産後1ヶ月頃までをどのように過ごしてきたかを思い出す。 2）自分の産後1カ月までの育児を思い出す。 3）産後1ヶ月に母親から受けた支援について思い出す。 1）産後の心身の回復過程 2）マタニティブルーズと産後うつの見分け方 1）母親役割獲得過程とは 2）母親役割獲得過程により異なる娘の支援ニーズ（娘の実母に対する依存から自立へ） 1）昔と異なる今時の育児 2）昔と異なる産後の生活 3）新生児の睡眠レベルの判断 1）母乳分泌機序 2）母乳に良い食事 1）肩こり、腰痛、腱鞘炎などの身体的疲労や不眠と里帰り終了による寂寥感	自分の経験を思い出し，娘の支援について考える機会をつくる。5分 講義　25 分 パンフレット使用
Ⅱ情意領域	1. 祖母役割について考えることができる。 2. 母親父親役割獲得を支えるためのコミュニケーションが取れる。	1）祖母役割について考える 2）祖母としての自己像を描く 1）母親役割獲得を促進するコミュニケーション (1)娘の不安な気持ちへの共感 (2)周囲の人（夫）との協同 (3)娘との適度な距離 2）娘婿の父親役割獲得への支援	ロールプレイング 5分 娘、娘婿役：実母 実母役：研究者 グループ討議 10 分
Ⅲ精神運動領域	1.今時の育児ができる。 2.里帰り支援により生じる心身のストレスへの対策が取れる。	1）清潔（沐浴、おむつ交換、臍処置） 2）あやし方（抱き方、排気等） 1）肩こり、腰痛体操、不眠対策、メンタルヘルス	演習　55 分 モデル提示・実施
支援について具体的にイメージできる		1）産後1ヶ月支援の具体的なイメージをする	まとめ･質疑応答5分
評価方法	自記式質問紙 支援を引き受けることへの不安が軽減される。（認知領域） 戸惑いを持たずに娘と関わることができた。（認知領域） 戸惑いを持たずに娘の育児の支援をすることができた。（認知領域） 娘が母親らしくなったと思うことができた。（情意領域） 娘の自立を喜びとして捉えることができた。（情意領域） 祖母になった自分を肯定的に捉えることができた。（情意領域） 祖母になった自己について新たな発見をした。（情意領域） 自分と家族との関係性を深めることができた。（情意領域） 娘婿の育児参加が期待できた。（情意領域） 娘の育児の役に立つことができた。（精神運動領域） 自分の健康に対して不安がなく支援できた。（精神運動領域）		

従来のプログラムに修正を加えた箇所

実母が産褥１ヵ月以内の支援を行うことは、娘や孫、家族全体の健康と幸福の為に愛情を示し娘の情緒面を支えることで母親として育つことを助ける「母性性」を発揮する機会となり、また、次の世代のために育児の知識や技術を伝達する「世代性」を発揮する機会となる。実母が「母性性」と「世代性」を発揮することは、母親の母親役割の獲得を支えるに留まらず、母娘関係を考える機会となり、母親として成長した娘を自立した１人の大人として捉え、娘の成長に役立てた幸福感が得られる。産後１ヵ月を過ぎてなお、娘家族の逃げ場としての重要な役割意識を持つことは、実母自身の健康と幸福に繋がると考えられた。

第３章の研究目的は、新たに作成した実母教育プログラムが従来のプログラムと比較して、有益であるかを検証することである。研究者らが作成した新たな実母教育プログラムの効果が実証され多くの現場で実用化されることで、支援者である実母が「母性性」「世代性」を発揮させ、実母自身の健康維持に貢献できる可能性がある。さらに、実母が情緒的な関わりならびに次世代を育てる知識と技術を娘家族のために発揮させることで、娘の母親役割獲得を促進し娘家族全体の健康と幸福に繋がることが期待される。

第２節　実母の母性性･世代性の発達を促した教育プログラムの実践と評価

第１項　研究方法

研究協力が得られた病院の母親学級指導室で、実母を対象とした従来プログラムおよび新プログラムを実施し、本研究への参加の同意を得られた実母を対象に、プログラムの受講前、直後、褥婦の産後およそ１ヵ月頃の計３回、無記名自己記入式質問紙による前向き調査研究を実施した。

従来プログラムは、近年、各地で開催されているプログラムと同様、産後１ヵ月の褥婦と支援者である祖母との間における育児方法の統一を目指し､祖母世代の育児支援力を強化する目的で考案されたプログラムである。導入５分、祖母役割、昔と異なる今時の育児と産後の生活、新生児の特徴についての講義 40 分、沐浴演習 60 分、質疑応答５分、休憩 10 分の合計 120 分で構成されている。新プログラムは、実母の立場から考案されたプログラムであり、褥婦の母親役割獲得を促進し、実母自身に生じる戸惑いや無力感、健康不安、寂寥感が軽減され、自己の母性性、世代性を深めるためのプログラムである。新プログラムの概要は、従来のプログラムに加え、自己の産褥期の想起と母親役割獲得過程に合わせた支援についておよび母乳育児について加えた内容とし、合計 120 分で構成した。

研究対象者は、母児共に経過に健康上の問題がなく経過している妊娠後期（およそ妊娠 37 週以降）妊婦（娘）の実母、もしくは、出産し入院中の褥婦（娘）を、退院後から約１ヶ月の間支援する予定の実母で、研究者が実施する従来プログラムを受講する目的で来院した実母（以下 A 群とする)、または新プログラムを受講する目的で来院した実母（以下 B 群とする）で、本研究の説明（添付資料 3-2）を行い参加の同意が得られた方とした。2 群間の比較に必要なサンプル数 20～30 を目標に、A 群および B 群各 30 名程度、計約 60 名を予定人数とした。データ収集法は、研究協力（添付資料 3-1）の得られた広島及び岩国市内の病院の母親学級指導室で研究

者がA群とB群の参加者数に偏りが無いように交互に開催した。プログラム開催前後に無記名自記式質問紙（基本属性、受講前と受講直後用）への回答と回収箱に投函していただき、さらに、褥婦の1ヵ月健診頃に回答した自記式質問紙（1ヵ月後用）を封筒に入れて1ヵ月健診で受診した産科外来へ提出してもらった。

基本属性は、研究対象者の支援における母性性と世代性に影響を及ぼすと考えられた実母の年齢、職業、配偶者の有無、支援対象、支援回数、支援の形態から構成した（添付資料3-3)。母性性と世代性の発達に関する質問項目は、本研究で母性性と定義づけた「娘や孫世代、家族全体の健康と幸福のために愛情を示し娘が母親として育つこと」と、世代性と定義づけた「次世代のために育児の知識や技術を伝達すること」を、第2章第2節「実母が娘の母親役割獲得過程を支援する母性性・世代性のプロセス」で抽出された概念に照合させ作成した。母性性の発達に関する質問項目は、実母に生じるとされた娘の接し方への戸惑いや寂寥感といった情緒的側面の諸問題を尋ねる内容と、孫への愛おしさや娘親子を支援する楽しみといった愛情を示す概念、娘が母親らしくなったと感じることや母娘関係を考えるなどの、娘やその家族との情緒的関わりを示す7つの項目から構成した。世代性の発達に関する質問項目は、育児支援における戸惑いや祖母役割としての無力感、健康不安といった育児の知識や技術を発揮することにおいて生じる諸問題を尋ねる内容、周囲との育児協力、支援の継続意思など育児の知識や技術を示す6つの項目から構成した。

具体的には、母性性の発達に関する質問を「1.戸惑わずに娘と接することができると思う」「2.娘と楽しい時間が持てると思う」「3.孫と楽しい時間が持てると思う」「4.娘は母親らしくなるだろうと思う」「5.娘が自宅に戻ることが寂しい」「6.1人の大人として娘と接していけると思う」「7.祖母である自分を快く思うだろう」の7項目、世代性の発達に関する質問を

「8.戸惑わずに育児を手伝えると思う」「9.娘が母親らしく成長することに役立てると思う」「10.必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う」「11.周囲の人と育児協力することができると思う」「12.今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う」「13.自分の健康に不安がなく支援が出来ると思う」の 6 項目、全 13 問から構成し、「非常にあてはまる 4 点」「ややあてはまる 3 点」「ややあてはまらない 2 点」「全くあてはまらない 1 点」の 4 件法を用いた。受講前と受講直後は支援開始前の気持ちを尋ねた（添付資料 3-4)。産後 1 ヵ月用は、受講前と同じ全 13 問を支援後に尋ねた（添付資料 3-5)。データ収集期間は、2017 年 11 月から 2018 年 5 月である。

分析方法は、基本属性は単純集計し A、B 群の基本属性の比較には χ^2 検定を用いた。母性性の発達に関する質問 7 項目（寂寥感を問う質問項目を逆転項目とした)、世代性の発達に関する質問 6 項目の正規性の確認には Shapiro-Wilk の検定により確認した。A、B 群其々における受講前と直後及び受講前と産後 1 ヵ月の各質問項目の比較には Wilcoxon の符号順位和検定を用いた。A、B 群間の受講前（以下前とする）および受講直後（以下直後とする）、産後 1 ヵ月（以下 1 ヵ月後とする）の各質問項目の比較には Mann-Whitney の U 検定を用いた。各項目間の相関は Spearman の相関係数を用いて解析した。自由記載内容は、類似する意味内容を分類し、カテゴリー化した。分析には統計ソフト IBM SPSS version24 for windows を用いた。有意水準を 5%とした。

倫理的配慮は、本研究は山口県立大学生命倫理委員会の承認（承認番号第 29-17 号）を得た後に実施した。A 若しくは B 市内の 3 病院の病院長と看護部長、病棟師長に研究の概要を文書（添付資料 3-1）および口頭で、病院内の母親学級指導室の場所を従来と新プログラムの開催場所として提供していただくこと、研究対象者を募集すること、病院内で調査を実施することについて説明し承認を得た。さらに、1 ヵ月後の記入後の質問紙の

回収についても同意を得た。退院後から産後１ヵ月の褥婦（娘）を支援する予定で、従来プログラムまたは新プログラムを受講の目的で来院した実母に、プログラム受講前に、本研究の概要と研究課題名、研究の目的と意義、研究参加の任意性（研究に協力しなくても不利益を受けないこと）個人情報の保護（匿名化の方法)、得られたデータの利用範囲、研究成果の公表、質問紙の回収方法、問い合わせ先について口頭と文書で説明した。質問紙の投函または提出をもって、研究参加の同意を得たものとした。実母へのプライバシーの保護のために、自己記入式質問紙への回答の際は、他者と距離をとった環境で回答できるように整えた。データ解析には番号を設定して、完全に匿名化された電子データのみを用いた。本研究で得られたデータは研究以外には使用せず、データの保管と廃棄については、回収した自記式質問紙は研究責任者の研究室内の施錠可能な棚の中に保管し、電子化したデータファイルにはパスワード保護をした。データは研究終了後も可能な限り保管するが、保管が困難になった場合は、質問紙はシュレッダーにかけ、電子データは適正に消去することとした。本研究における利益相反はない。

第２項　従来プログラムと新プログラムの受講前後の分析から得た母性性･世代性の結果

１．従来プログラムと新プログラムの受講前後の比較から得られた結果

従来プログラムは７回実施し、受講者は実母 25 名、義母５名、妊婦 20 名、妊婦の夫１名、実父１名、妊婦の姉妹２名の合計 48 名であった。実母と妊婦である娘が一緒に参加した母娘は 16 組であった。研究対象者 25 名のうち１ヵ月後の回答は 18 名、回数率 72.0％であった。A 群 25 名の年齢は 45～66 歳（平均 57.96±5.37 歳)、年齢幅はおよそ 20 歳であった。就労形態は正規雇用５名（20.0％)、パートタイム勤務が 14 名（56.0％)、専業主婦６名（24.0％)、配偶者を有する者は 22 名（88.0％)、里帰りによ

る支援形態は 22 名（88.0%）であった。今回初めて支援するものは 17 名（68.0%）であった。

新プログラムは 5 回実施し、受講者は実母 31 名、義母 3 名、妊婦 19 名、妊婦の夫 3 名、実父 2 名の合計 58 名であった。実母と妊婦である娘が一緒に参加した母娘は 18 組であった。研究対象者 31 名のうち 1 ヵ月後の回答は 17 名、回収率 54.8%であった。B 群 31 名の年齢は 49～67 歳（平均 58.71±4.83 歳）、就労形態は正規雇用 9 名（29.0%）、パートタイム勤務が 9 名（29.0%）、専業主婦は 13 名（42.0%）、配偶者を有する者は 27 名（87.1%）、里帰りによる支援形態は 27 名（87.1%）であった。今回初めて支援するものは 24 名（77.4%）であった。A、B 群の年齢、就労形態、配偶者の有無、里帰りの有無、支援回数に有意差はみられなかった（表 3-3）。

表 3-3　研究対象者の属性とその比較　　n=56

	年齢		就労形態			配偶者		里帰り		支援回数	
	年齢	Mean±SD	正規雇用(%)	パート(%)	専業主婦(%)	有(%)	無(%)	有(%)	無(%)	初(%)	2回以上(%)
A群 n=25	45～66	57.96±5.37	5(20)	14(56)	6(24)	22(88)	2(8)	22(88)	3(12)	17(68)	8(32)
B群 n=31	49～67	58.71±4.83	9(19)	9(29)	13(42)	27(87)	4(13)	28(90)	2(10)	24(77)	7(23)
p値		.585 ns			.122 ns		.590 ns		.493 ns		.722 ns

＊p＜.05　＊＊p＜.001

A 群は、娘と参加した者が 18 名（72.0%）、娘婿と一緒に参加した者が 1 名（4.0%）あった。B 群は、娘と参加した者が 19 名（61.3%）、娘婿と一緒に参加した者が 3 名（9.7%）であった。

A、B 群共に 8 割以上が受講前に娘との接し方や育児を手伝うことにおいて戸惑わずにできると思うに対し、「非常にあてはまる」若しくは「ややあてはまる」と回答した。支援終了頃の寂寥感については、A、B 群共に 7 割以上が「非常にあてはまる」若しくは「ややあてはまる」と回答した。無力感と対比した娘が母親として成長することに役立てると思うについては、

共に約 9 割が「非常にあてはまる」若しくは「ややあてはまる」と回答した。また、健康不安がなく支援できると思うについては、A 群は 8 割、B 群では約 7 割が「非常にあてはまる」若しくは「ややあてはまる」と回答した（表 3-4,3-7）。第

表 3-4　従来プログラム受講者（A 群）の受講前質問項目の記述統計　n=25

		質問項目 ※逆転項目	4 人（%）	3 人（%）	2 人（%）	1 人（%）
母性性	1	戸惑わずに娘と接することができると思う	13(52.0)	9(36.0)	2(8.0)	1(4.0)
	2	娘と楽しい時間が持てると思う	14(56.0)	10(40.0)	1(4.0)	0(0.0)
	3	孫と楽しい時間が持てると思う	17(68.0)	6(24.0)	2(8.0)	0(0.0)
	4	娘は母親らしくなるだろうと思う	12(48.0)	10(40.0)	3(12.0)	0(0.0)
	5	娘が自宅に戻ることが寂しいと思うだろう※	6(26.1)	10(43.5)	6(26.1)	1(4.3)
	6	1 人の大人として娘と接していけると思う	11(44.0)	12(48.0)	2(8.0)	0(0.0)
	7	祖母である自分を快く思うだろう	9(36.0)	11(44.0)	5(20.0)	0(0.0)
世代性	8	戸惑わずに育児を手伝えると思う	8(33.3)	12(50.0)	3(12.5)	1(4.2)
	9	娘が母親らしく成長することに役に立てると思う	5(20.0)	17(68.0)	3(12.0)	0(0.0)
	10	必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う	2(8.0)	19(76.0)	4(16.0)	0(0.0)
	11	周囲の人と育児協力することができると思う	10(40.0)	14(56.0)	1(4.0)	0(0.0)
	12	今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	14(56.0)	9(36.0)	2(8.0)	0(0.0)
	13	自分の健康に対して不安がなく支援できると思う	8(32.0)	12(48.0)	5(20.0)	0(0.0)

※4.非常にあてはまる 3.ややあてはまる 2.ややあてはまらない 1.全くあてはまらない

表 3-5　従来プログラム受講者（A 群）の受講直後質問項目の記述統計　n=25

		質問項目 ※逆転項目	4 人（%）	3 人（%）	2 人（%）	1 人（%）
母性性	1	戸惑わずに娘と接することができると思う	15(62.5)	9(37.5)	0(0.0)	0(0.0)
	2	娘と楽しい時間が持てると思う	16(66.7)	7(29.2)	1(4.2)	0(0.0)
	3	孫と楽しい時間が持てると思う	18(75.0)	5(20.8)	1(4.2)	0(0.0)
	4	娘は母親らしくなるだろうと思う	16(66.7)	8(33.3)	0(0.0)	0(0.0)
	5	娘が自宅に戻ることが寂しいと思うだろう※	1(4.6)	3(13.6)	7(31.8)	11(50.0)
	6	1 人の大人として娘と接していけると思う	17(77.2)	7(29.1)	0(0.0)	0(0.0)
	7	祖母である自分を快く思うだろう	12(50.0)	11(45.8)	1(4.2)	0(0.0)
世代性	8	戸惑わずに育児を手伝えると思う	13(54.1)	9(37.5)	2(8.3)	0(0.0)
	9	娘が母親らしく成長することに役に立てると思う	13(54.1)	10(41.7)	1(4.2)	0(0.0)
	10	必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う	8(33.3)	13(54.1)	3(12.5)	0(0.0)
	11	周囲の人と育児協力することができると思う	12(50.0)	11(45.8)	1(4.2)	0(0.0)
	12	今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	18(75.0)	6(25.0)	0(0.0)	0(0.0)
	13	自分の健康に対して不安がなく支援できると思う	7(29.2)	14(58.3)	3(12.5)	0(0.0)

※4.非常にあてはまる 3.ややあてはまる 2.ややあてはまらない 1.全くあてはまらない

A、B 群間における前の質問 13 項目全てに有意差は認められなかった（表 3-10）ことから、前の A 及び B 群は同じ特性を持っていたことが確認された。

表 3-6　従来プログラム受講者（A 群）の 1 ヵ月後質問項目の記述統計　　n=18

		質問項目 ※逆転項目	4 人 (%)	3 人 (%)	2 人 (%)	1 人 (%)
母性性	1	戸惑わずに娘と接することができた	11(61.1)	7(38.9)	0(0.0)	0(0.0)
	2	娘と楽しい時間が持てた	13(72.2)	5(27.8)	0(0.0)	0(0.0)
	3	孫と楽しい時間が持てた	14(77.8)	4(22.2)	0(0.0)	0(0.0)
	4	娘は母親らしくなったと思う	13(77.8)	5(27.8)	0(0.0)	0(0.0)
	5	娘が自宅に戻ることが寂しい※	1(5.6)	2(11.1)	9(50.0)	6(33.3)
	6	1 人の大人として娘と接していけると思う	13(72.2)	5(27.8)	0(0.0)	0(0.0)
	7	祖母である自分を快く思えた	8(44.4)	8(44.4)	2(11.1)	0(0.0)
世代性	8	戸惑わずに育児を手伝えた	11(61.1)	7(38.9)	0(0.0)	0(0.0)
	9	娘が母親らしく成長することに役に立てたと思う	10(55.6)	7(38.9)	1(5.6)	0(0.0)
	10	必要に応じて育児の知識と技術を伝達できた	4(22.2)	13(77.8)	1(5.6)	0(0.0)
	11	周囲の人と育児協力することができた	7(41.2)	10(58.8)	0(0.0)	0(0.0)
	12	今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	13(72.2)	4(22.2)	1(5.6)	0(0.0)
	13	自分の健康に対して不安がなく支援できた	6(33.3)	9(50.0)	3(16.7)	0(0.0)

※4.非常にあてはまる 3.ややあてはまる 2.ややあてはまらない 1.全くあてはまらない

表 3-7　新プログラム受講者（B 群）の受講前質問項目の記述統計　　n=31

		質問項目 ※逆転項目	4 人 (%)	3 人 (%)	2 人 (%)	1 人 (%)
母性性	1	戸惑わずに娘と接することができると思う	21(67.7)	8(25.8)	2(6.5)	0(0.0)
	2	娘と楽しい時間が持てると思う	16(51.6)	13(41.9)	2(6.5)	0(0.0)
	3	孫と楽しい時間が持てると思う	14(46.7)	14(46.7)	2(6.7)	0(0.0)
	4	娘は母親らしくなるだろうと思う	15(50.0)	14(46.7)	1(3.3)	0(0.0)
	5	娘が自宅に戻ることが寂しいと思うだろう※	6(19.4)	16(51.6)	7(22.6)	2(6.5)
	6	1 人の大人として娘と接していけると思う	14(45.2)	16(51.6)	2(3.2)	0(0.0)
	7	祖母である自分を快く思うだろう	8(25.8)	18(58.1)	5(16.1)	0(0.0)
世代性	8	戸惑わずに育児を手伝えると思う	13(41.9)	13(41.9)	5(16.1)	0(0.0)
	9	娘が母親らしく成長することに役に立てると思う	9(30.0)	18(60.0)	3(10.0)	0(0.0)
	10	必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う	8(25.8)	18(58.1)	4(12.9)	1(3.2)
	11	周囲の人と育児協力することができると思う	13(41.9)	15(48.4)	3(9.7)	0(0.0)
	12	今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	18(58.1)	11(35.5)	2(6.5)	0(0.0)
	13	自分の健康に対して不安がなく支援できると思う	4(12.9)	19(61.3)	7(22.6)	1(3.2)

※4.非常にあてはまる 3.ややあてはまる 2.ややあてはまらない 1.全くあてはまらない

A、B 群の質問 13 項目の前および直後の気持ちの変化について分析した。その結果、A、B 群の前と直後の比較において、共通して有意差が認められた項目は、母性性に関する「6.1 人の大人として娘と接していけると思う」A 群 $p<.035$、B 群 $p<.033$ と、世代性に関する「9.娘が母親らしく成長することに役立てると思う」A 群 $p<.003$、B 群 $p<.001$、「10. 必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う」A 群 $p<.034$、B 群 $p<.011$、「11.周囲の人と育児協力することができると思う」A 群 $p<.025$、B 群 $p<.017$ であった。（表 3-11）。A、B 群共に受講直後において、娘を 1 人

表 3-8　新プログラム受講者（B 群）の直後質問項目の記述統計　　n=31

		質問項目 ※逆転項目	4 人 (%)	3 人 (%)	2 人 (%)	1 人 (%)
母性性	1	戸惑わずに娘と接することができると思う	21(67.7)	9(29.0)	1(3.2)	0(0.0)
	2	娘と楽しい時間が持てると思う	22(71.0)	9(29.0)	1(3.2)	0(0.0)
	3	孫と楽しい時間が持てると思う	23(74.2)	8(25.8)	0(0.0)	0(0.0)
	4	娘は母親らしくなるだろうと思う	20(64.5)	11(35.5)	0(0.0)	0(0.0)
	5	娘が自宅に戻ることが寂しいと思うだろう※	3(9.7)	3(9.7)	13(41.9)	12(38.7)
	6	1 人の大人として娘と接していけると思う	21(67.7)	10(32.3)	0(0.0)	0(0.0)
	7	祖母である自分を快く思うだろう	13(41.9)	15(48.4)	3(9.7)	0(0.0)
世代性	8	戸惑わずに育児を手伝えると思う	14(45.2)	16(51.6)	1(3.2)	0(0.0)
	9	娘が母親らしく成長することに役に立てると思う	19(63.3)	10(33.3)	1(3.3)	0(0.0)
	10	必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う	18(58.1)	12(38.7)	1(3.2)	0(0.0)
	11	周囲の人と育児協力することができると思う	18(58.1)	12(38.7)	1(3.2)	0(0.0)
	12	今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	23(74.2)	8(25.8)	0(0.0)	0(0.0)
	13	自分の健康に対して不安がなく支援できると思う	8(25.8)	18(58.1)	5(16.1)	0(0.0)

※4.非常にあてはまる 3.ややあてはまる 2.ややあてはまらない 1.全くあてはまらない

表 3-9　新プログラム受講者（B 群）の 1 ヵ月後質問項目の記述統計　　n=17

		質問項目 ※逆転項目	4 人 (%)	3 人 (%)	2 人 (%)	1 人 (%)
母性性	1	戸惑わずに娘と接することができた	13(76.4)	4(5.9)	0(0.0)	0(0.0)
	2	娘と楽しい時間が持てた	11(70.9)	5(29.4)	1(5.9)	0(0.0)
	3	孫と楽しい時間が持てた	11(70.9)	6(35.3)	0(0.0)	0(0.0)
	4	娘は母親らしくなったと思う	15(88.2)	2(11.8)	0(0.0)	0(0.0)
	5	娘が自宅に戻ることが寂しい※	1(5.9)	2(11.8)	11(70.9)	3(17.6)
	6	1 人の大人として娘と接していけると思う	10(58.8)	6(35.3)	1(5.9)	0(0.0)
	7	祖母である自分を快く思えた	8(50.0)	6(37.5)	2(12.5)	0(0.0)
世代性	8	戸惑わずに育児を手伝えた	10(58.8)	4(23.5)	2(11.8)	1(5.9)
	9	娘が母親らしく成長することに役に立てたと思う	8(47.1)	7(41.2)	2(11.8)	0(0.0)
	10	必要に応じて育児の知識と技術を伝達できた	5(29.4)	9(52.9)	3(17.6)	0(0.0)
	11	周囲の人と育児協力することができた	8(47.1)	7(41.2)	2(11.8)	0(0.0)
	12	今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	13(76.5)	4(23.5)	0(0.0)	0(0.0)
	13	自分の健康に対して不安がなく支援できた	5(29.4)	10(58.8)	1(5.9)	1(5.9)

※4.非常にあてはまる 3.ややあてはまる 2.ややあてはまらない 1.全くあてはまらない

の大人として捉えて接しようとする母性性と、今時の育児を理解し周囲の人と協力しながら必要に応じて育児の知識と技術を伝達し、娘が母親らしく成長することに役立てるという世代性を示す気持ちが高まったことが明らかにされた。

前と直後における変化の比較において、A 群にのみ有意差が認められた項目は、母性性に関する項目である「4.娘が母親らしくなるだろうと思う」$p<.038$、「7.祖母である自分を快く思うだろう」$p<.033$、と世代性に関す

表 3-10　従来と新プログラム受講前における気持ちの比較

		質問項目 ※逆転項目	A群 n=25	B群 n=31	p 値	
母性性	1	戸惑わずに娘と接することができると思う	3.36±0.81	3.61±0.62	.215	ns
	2	娘と楽しい時間が持てると思う	3.52±0.59	3.45±0.62	.702	ns
	3	孫と楽しい時間が持てると思う	3.60±0.65	3.40±0.62	.241	ns
	4	娘は母親らしくなるだろうと思う	3.36±0.70	3.47±0.57	.657	ns
	5	娘が自宅に戻ることが寂しいと思うだろう※	2.09±0.85	2.16±0.82	.770	ns
	6	1 人の大人として娘と接していけると思う	3.16±0.75	3.42±0.56	.788	ns
	7	祖母である自分を快く思うだろう	3.16±0.75	3.10±0.65	.690	ns
世代性	8	戸惑わずに育児を手伝えると思う	3.13±0.80	3.26±0.73	.574	ns
	9	娘が母親らしく成長することに役に立てると思う	3.08±0.57	3.10±0.83	.439	ns
	10	必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う	2.92±0.49	3.06±0.73	.275	ns
	11	周囲の人と育児協力することができると思う	3.36±0.57	3.32±0.65	.777	ns
	12	今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	3.48±0.65	3.52±0.63	.851	ns
	13	自分の健康に対して不安がなく支援できると思う	3.12±0.73	2.84±0.69	.690	ns

＊p＜.05　＊＊p＜.001

る項目である「12.今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う」p＜.034であった（表 3-11）。前と 1 ヵ月後の変化の比較では、A 群のみに有意差

表 3-11　従来・新プログラム受講前と直後における気持ちの変化

		質問項目 （※逆転項目　調整済み）	A 群 n=25 前	A 群 n=25 直後	A 群 p 値		B 群 n=31 前	B 群 n=31 直後	B 群 p 値	
母性性	1	戸惑わずに娘と接することができると思う	3.36±0.81	3.63±0.49	.058	ns	3.61±0.62	3.65±0.55	.705	ns
	2	娘と楽しい時間が持てると思う	3.52±0.59	3.63±0.58	.180	ns	3.45±0.62	3.71±0.46	.046	＊
	3	孫と楽しい時間が持てると思う	3.60±0.65	3.71±0.55	.317	ns	3.40±0.62	3.74±0.44	.004	＊＊
	4	娘は母親らしくなるだろうと思う	3.36±0.70	3.67±0.48	.038	＊	3.47±0.57	3.65±0.49	.096	ns
	5	娘が自宅に戻ることが寂しいと思うだろう※	2.09±0.85	1.73±0.88	.083	ns	2.16±0.82	1.90±0.94	.021	＊
	6	1 人の大人として娘と接していけると思う	3.16±0.75	3.71±0.46	.035	＊	3.42±0.56	3.68±0.48	.033	＊
	7	祖母である自分を快く思うだろう	3.16±0.75	3.46±0.59	.033	＊	3.10±0.65	3.32±0.65	.052	ns
世代性	8	戸惑わずに育児を手伝えると思う	3.13±0.80	3.46±0.66	.080	ns	3.26±0.73	3.42±0.56	.197	ns
	9	娘が母親らしく成長することに役に立てると思う	3.08±0.57	3.50±0.59	.003	＊＊	3.10±0.83	3.60±0.56	.001	＊
	10	必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う	2.92±0.49	3.21±0.66	.034	＊	3.06±0.73	3.32±0.60	.011	＊
	11	周囲の人と育児協力することができると思う	3.36±0.57	3.46±0.59	.025	＊	3.32±0.65	3.55±0.57	.017	＊
	12	今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	3.48±0.65	3.75±0.44	.034	＊	3.52±0.63	3.74±0.44	.137	ns
	13	自分の健康に対して不安がなく支援できると思う	3.12±0.73	3.17±0.64	.705	ns	2.84±0.69	3.10±0.65	.033	＊

＊p＜.05　＊＊p＜.001

が認められた項目は、「4.娘は母親らしくなったと思う」p＜.020 であった（表 3-12）。従来プログラムは、新プログラムと比較して、母性性の発達において娘が母親らしくなるだろう期待と祖母であることを快く思う気持ちを高め、世代性において娘家族の支援を今後も継続したい気持ちを高め、産後 1 ヵ月頃には、娘が母親らしくなったと思えるプログラムであることが明らかになった。

前と直後における変化の比較において、B 群にのみ有意差が認められた項目は、母性性に関する「2.娘と楽しい時間が持てると思う」p＜.046、「3.孫と楽しい時間が持てると思う」p＜.004、世代性に関する「13.自分の健康に対して不安がなく支援できると思う」p＜.033 において有意に高まったことが明らかにされた。しかし、母性性に関する「5.娘が自宅に戻ることが寂しいと思うだろう」p＜.021 においては有意に寂しい気持ちを高めることが明らかにされた（表 3-11）。また、前と 1 ヵ月後の変化の比較において、B 群のみに母性性に関する「7.祖母である自分を快く思えた」p＜.025 に有意差が認められた（表 3-12）。新プログラムは従来プログラムと同様に無力感を軽減し、知識と技術を伝達できる気持ちを高める他、新プログラムの狙いである健康不安を軽減し、母性性に関する娘や孫との楽しい時間を持てる期待の高まりを示した。しかし、新プログラムの狙いである支援における戸惑いについては従来プログラム同様に軽減されなかった。寂寥感についてはむしろ高める結果となった。新プログラムは従来プログラムと比較し、母性性に関する娘や孫との楽しい時間を持てる期待を高め、祖母である自分を肯定的に捉えることができるプログラムであるが、里帰り終了頃の寂寥感を高めることが明らかにされた。また、世代性に関する支援中の自分の健康に対する不安について軽減されることが明らかにされた。

A 群と B 群の前と直後の個々の気持ちの変化の差においては、母性性に関する項目「3.孫と楽しい時間が持てると思う」p＜.027 において B 群が A 群よりも有意に高まりを認めた。1 ヵ月後の気持ちの変化の差については、各質問項目において変化の差に有意差はみられなかった。（表 3-13）。新プログラムは従来プログラムに比べ、より孫と楽しい時間が持てると思う気持ちへと変化させるプログラムであることが明らかにされた。

表 3-12　従来・新プログラム受講前と１カ月後における気持ちの変化

質問項目（※逆転項目　調整済み）			A群 n=25 前	A群 n=18 1ヵ月後	p 値		B群 n=31 前	B群 n=17 1ヵ月後	p 値	
母性性	1	戸惑わずに娘と接することができた	3.36±0.81	3.61±0.50	.096	ns	3.16±0.62	3.76±0.44	.705	ns
	2	娘と楽しい時間が持てた	3.52±0.59	3.72±0.46	.180	ns	3.45±0.62	3.59±0.62	1.000	ns
	3	孫と楽しい時間が持てた	3.60±0.65	3.78±0.43	.317	ns	3.40±0.62	3.65±0.49	.527	ns
	4	娘は母親らしくなったと思う	3.36±0.70	3.72±0.64	.020	＊	3.47±0.57	3.88±0.33	.052	ns
	5	娘が自宅に戻ることが寂しい※	2.09±0.85	1.89±0.83	.271	ns	2.16±0.82	2.06±0.75	.414	ns
	6	1人の大人として娘と接していけると思う	3.16±0.75	3.72±0.46	.084	ns	3.42±0.56	3.53±0.62	1.000	ns
	7	祖母である自分を快く思えた	3.16±0.75	3.33±0.69	.405	ns	3.10±0.65	3.38±0.72	.025	＊
世代性	8	戸惑わずに育児を手伝えた	3.13±0.80	3.61±0.50	.053	ns	3.26±0.73	3.35±0.93	.660	ns
	9	娘が母親らしく成長することに役に立てた	3.08±0.57	3.50±0.62	.058	ns	3.10±0.83	3.35±0.70	.480	ns
	10	必要に応じて育児の知識と技術を伝達できた	2.92±0.49	3.17±0.51	.257	ns	3.06±0.73	3.12±0.70	.739	ns
	11	周囲の人と育児協力することができた	3.36±0.57	3.41±0.51	.414	ns	3.32±0.65	3.35±0.70	.589	ns
	12	今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	3.48±0.65	3.67±0.59	.589	ns	3.52±0.63	3.76±0.44	.157	ns
	13	自分の健康に対して不安がなく支援できた	3.12±0.73	3.69±0.44	.782	ns	2.84±0.69	3.12±0.78	.414	ns

＊p＜.05　＊＊p＜.001

A、B群共に、前、直後、1ヵ月の比較において有意差は見られなかったものの、寂寥感を除く全ての項目において、それらの得点は受講前に比べ、直後、1ヵ月後共に高まった。

表 3-13　従来と新プログラム受講前と直後、受講前と1ヵ月後の個々の気持ちの変化の差

質問項目（※逆転項目　調整済み）			直後－前 A群の差の平均 n=25	直後－前 B群の差の平均 n=31	p 値		1ヵ月後－前 A群の差の平均 n=18	1ヵ月後－前 B群の差の平均 n=17	p 値	
母性性	1	戸惑わずに娘と接することができると思う	0.29	0.03	.105	ns	0.33	0.06	.144	ns
	2	娘と楽しい時間が持てると思う	0.13	0.32	.148	ns	0.17	0.00	.397	ns
	3	孫と楽しい時間が持てると思う	0.13	0.43	.027	＊	0.17	0.19	.935	ns
	4	娘は母親らしくなるだろうと思う	0.33	0.17	.642	ns	0.39	0.41	.768	ns
	5	娘が自宅に戻ることが寂しいと思うだろう※	－0.27	－0.23	.779	ns	0.00	0.18	.598	ns
	6	1人の大人として娘と接していけると思う	0.33	0.23	.660	ns	0.33	0.00	.396	ns
	7	祖母である自分を快く思うだろう	0.38	0.26	.743	ns	0.17	0.38	.380	ns
世代性	8	戸惑わずに育児を手伝えると思う	0.30	0.16	.329	ns	0.41	0.12	.411	ns
	9	娘が母親らしく成長することに役に立てると思う	0.42	0.16	.751	ns	0.33	0.12	.446	ns
	10	必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う	0.29	0.53	.612	ns	0.17	0.00	.420	ns
	11	周囲の人と育児協力することができると思う	0.13	0.23	.655	ns	0.06	0.06	.812	ns
	12	今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	0.29	0.19	.601	ns	0.11	0.29	.403	ns
	13	自分の健康に対して不安がなく支援できると思う	0.33	0.26	.743	ns	0.06	0.18	.518	ns

＊p＜.05　＊＊p＜.001

自由記載内容において、A群の前の自由記載内容は「親から言われてきたことを重んじる」「産後のスマホ使用への戸惑い」「昔と異なる今時の育児への関心」「昔と異なることへの不安」「時代にあった育児支援をしてい

きたい」「精一杯支援したい気持ち」「娘が楽しく育児することを期待する」「家族の協力が得られないことへの不安」であった。娘が楽しく育児できるように、娘の支援を精一杯したいと思うが、昔とは異なる今時の育児方法に不安を抱き、受講により解消したいと考えていることが伺えた。直後は「沐浴がとても勉強になった」「不安なことを直接聞けて安心した」「昔の良さを娘に伝えたい」「楽しく育児を手伝いたい」「見守りながら支援したい」「将来息子が夫として手伝うように伝えたい」「勉強になり楽しかった」「分かりやすかった」の記述がみられた。具体的な育児方法を知ることで、支援に対する不安を軽減し、見守りながら支援する態度をイメージしたことが伺えた。また、息子の将来に活かしたいと考えている内容がみられた。1ヵ月後では、「最初は戸惑いながら支援した」「落ち着いて支援出来た」「娘の育児にイライラせずに見守ることができた」「昔と異なることを考えながら支援した」「娘の頑張りをみることができた」「娘が母親らしくなったと実感した」「親子三代の楽しい時間が持てた」「娘婿と親しくなることができた」「自分の健康にも気遣いながら支援した」「これからも家族として支援していきたい」「実家での環境を整えることができた」「祖母学級の内容が大変役立った」が記述された。娘の育児に苛立ちを生じずに見守りながら支援することができ、自分自身の健康に気をつけながら支援できたことが伺えた。

B群の前の自由記載では、「不安とワクワク感が共存した気持ち」「参加出来て良かった」という記述内容がみられ、支援することに対する期待が伺えた。直後では、「思っていたよりも難しいけれど大変勉強になった」「昔と異なる育児を知ることが出来て良かった」「驚くことばかりだった」「声かけひとつで違うと思った」「赤ちゃんを育てることが楽しくてたまらない」「家族皆で頑張りたい」「有意義な時間だった」「クイズ方式で楽しかった」「同じ立場の人と話しが出来て良かった」がみられた。産後の支援が簡単

ではないと捉え、娘への言葉かけにより娘が変化することを認識し、娘の接し方を具体的にイメージしたことが伺えた。また、「自分の時に感謝を伝えていなかった分介護を一生懸命したい」「何か温かな気持ちを貰い嬉しく思った」と、現在の親子関係に繋げていることが伺える記述がみられた。教室の運営については、同じ立場である実母同士で話が出来たことを評価していた。1ヵ月後では「昔と異なることで戸惑うことが多かった」「昔から親が伝えてきたことは間違いがないことがわかった」「教室に参加して昔との違いを知って良かった」と、昔と異なる育児に戸惑うこともあったが、昔の育児も間違いではないと思えたことや、「沐浴の方法が大変役立った」「家族全員でサポートできた」「娘と一緒に参加出来て楽しい時間だった」「祖母学級に参加して娘と孫と楽しい時間が持てた」「孫の成長を楽しみに思う」と娘や孫との楽しい時間が持てたことが伺えた。また、「娘が育児に頑張っている姿をみることができた」と、娘が母親役割を獲得する過程を見ることができた。「娘にこれからの長い育児を頑張って欲しい」「娘が母親になるための心の成長に必要な力添え、距離感を考えることができた」「手伝いをやり過ぎないように考えた」と、娘の自立を考えながら支援したことが伺えた。その他「仕事を休めなかったので十分支えられず申し訳なかった」「必要時には手助けが可能」「祖母学級は必要だと思った」「祖母学級を定期的に継続してほしい」という記述がみられ、実母には産後支援休暇や実母教育が必要であることが明らかになった。

２．母性性と世代性に関する質問項目間の関連から得られた結果

A、B 群の前、直後、1ヵ月後における母性性・世代性に関する 13 項目間の相関について分析した。

A、B 群共に、受講直後において 1%水準で相関が有意に確認されたものは、「1.戸惑わずに娘と接することができると思う」と「2.娘と楽しい時間

が持てると思う」A 群 r=.731、B 群 r=.633「10.必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う」A 群 r=.645、B 群 r=.499、「2.娘と楽しい時間が持てると思う」と「3.孫と楽しい時間が持てると思う」A 群 r=.835、B 群 r=.597「4.娘は母親らしくなるだろうと思う」A 群 r=.635、B 群 r=.565「8.戸惑わずに育児を手伝えると思う」A 群 r=.578、B 群 r=.470「9.娘が母親らしく成長することに役立てると思う」A 群 r=.636、B 群 r=.547「10.必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う」A 群 r=.536、B 群 r=.577「11.周囲の人と育児協力することができると思う」A 群 r=.741、B 群 r=.625「12.今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う」A 群 r=.632、B 群 r=.530 であった。また、「3.孫と楽しい時間が持てると思う」と「4.娘は母親らしくなるだろうと思う」A 群 r=.617、B 群 r=.487「8.戸惑わずに育児を手伝えると思う」A 群 r=.617、B 群 r=.568「9.娘が母親らしく成長することに役立てると思う」A 群 r=.672、B 群 r=.801、「4.娘は母親らしくなるだろうと思う」と「8.戸惑わずに育児を手伝えると思う」A 群 r=.553、B 群 r=.558、「6.1 人の大人として娘と接していけると思う」と「12.今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う」A 群 r=.688、B 群 r=.471、「8.戸惑わずに育児を手伝えると思う」と「10.必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う」A 群 r=.745、B 群 r=.537、「9.娘が母親らしく成長することに役立てると思う」と「10.必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う」A 群 r=.719、B 群 r=.522「11.周囲の人と育児協力することができると思う」A 群 r=.781、B 群 r=.626、「10.必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う」と「11.周囲の人と育児協力することができると思う」A 群 r=.650、B 群 r=.601、「11.周囲の人と育児協力することができると思う」と「12.今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う」A 群 r=.614、B 群 r=.487 であった（表 3-15,3-18）。1 ヵ月後においては、共に「6.1 人の大人として娘と接していけると思う」と「7.祖母で

ある自分を快く思うだろう」A 群 r=.658、B 群 r=.626 であった。(表 3-16, 3-19)。

従来と新プログラムに共通した内容である産褥期にある娘の心身の特徴と今時の育児を理解することで、産後支援で生じる諸問題と祖母である自分を快く思うことがどのように関連し合うのかを確認した。A、B 群の直後に共通して関連がみられたものは、戸惑わずに娘と接することができる気持ちが高い程、娘と楽しい時間が持てる気持ち、世代性に関する必要に応じて育児の知識と技術を伝達できる気持ちが高まった。戸惑わずに育児を手伝える気持ちが高い程、娘や孫と楽しい時間が持てる気持ち、娘が母親らしくなる期が高まった。寂寥感と関連があるものは見られなかった。役に立てる気持ちが高い程、娘や孫と楽しい時間が持てる気持ち、必要に応じて知識と技術を伝達できる気持ち、周囲と育児協力できる気持ちが高まった。健康不安および祖母としての自己を快く思うことについては、共通して関連がみられた項目はなかった。(表 3-15,3-18)。1 ヵ月後においては、A、B 群ともに祖母であることを快く思う気持ちが高まるほど、娘を 1 人の大人として接していけると思う気持ちが高まりを示した（表 3-16,3-19)。

B 群の受講直後にはみられず、A 群の受講直後にのみ 1%水準で相関が有意に確認されたものは、「1.戸惑わずに娘と接することができると思う」と「3.孫と楽しい時間が持てると思う」r=.741「4.娘は母親らしくなるだろうと思う」r=.730「6.1 人の大人として娘と接していけると思う」r=.639「8.戸惑わずに育児を手伝えると思う」r=.847「9.娘が母親らしく成長することに役立てると思う」r=.843「11.周囲の人と育児協力することができると思う」r=.619「12.今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う」r=.547、「2.娘と楽しい時間が持てると思う」と「5.娘が自宅に戻ることが寂しい

表 3-14　従来プログラム受講（A 群）前の各項目間の相関（r）　n=25

質問項目 従来プログラム受講前	母性性							世代性					
	1. 戸惑わずに娘と接することができると思う	2. 娘と楽しい時間が持てると思う	3. 孫と楽しい時間が持てると思う	4. 娘が母親らしくなるだろうと思う	5. 娘が自宅に戻ることが寂しいと思うだろう	6. 1人の大人として娘と接していけると思う	7. 祖母である自分を快うだろう	8. 戸惑わずに育児を手伝えると思う	9. 娘が母親らしく成長することに役立ると思う	10. 必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う	11. 周囲の人と育児協力することができると思う	12. 今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	13. 自分の健康に対して不安がなく支援できると思う
母性性 1. 戸惑わずに娘と接することができると思う	1												
母性性 2. 娘と楽しい時間が持てると思う	.784**	1											
母性性 3. 孫と楽しい時間が持てると思う	.561**	.442*	1										
母性性 4. 娘が母親らしくなるだろうと思う	.360	.420*	.308	1									
母性性 5. 娘が自宅に戻ることが寂しいと思うだろう	-.113	-.297	-.338	-.456*	1								
母性性 6. 1人の大人として娘と接していけると思う	.293	.366	.452*	.146	-.250	1							
母性性 7. 祖母である自分を快く思うだろう	.437*	.554**	.513**	.177	-.052	.099	1						
世代性 8. 戸惑わずに育児を手伝えると思う	.697**	.523**	.606**	.429*	-.374	.377	.491*	1					
世代性 9. 娘が母親らしく成長することに役立ると思う	.559**	.592**	.422*	.507**	-.422*	.495*	.363	.810**	1				
世代性 10. 必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う	.150	.238	.265	.246	-.215	.347	.493*	.546**	.609**	1			
世代性 11. 周囲の人と育児協力することができると思う	.541**	.510**	.384	.456*	-.187	.302	.368	.670**	.585**	.536**	1		
世代性 12. 今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	.466*	.573**	.466*	.230	-.179	.667**	.471*	.421*	.448*	.377	.363	1	
世代性 13. 自分の健康に対して不安がなく支援できると思う	.409*	.420*	.369	.160	-.177	.358	.627**	.438*	.400*	.495*	.436*	.452*	1

※r= spearmanの相関係数　**p<.0.01,　*p<.0.05　逆転項目調整済

表 3-15　従来プログラム受講（A 群）直後の各項目間の相関（r）　n=25

質問項目 従来プログラム受講直後	母性性							世代性					
	1. 戸惑わずに娘と接することができると思う	2. 娘と楽しい時間が持てると思う	3. 孫と楽しい時間が持てると思う	4. 娘が母親らしくなるだろうと思う	5. 娘が自宅に戻ることが寂しいと思うだろう	6. 1人の大人として娘と接していけると思う	7. 祖母である自分を快うだろう	8. 戸惑わずに育児を手伝えると思う	9. 娘が母親らしく成長することに役立ると思う	10. 必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う	11. 周囲の人と育児協力することができると思う	12. 今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	13. 自分の健康に対して不安がなく支援できると思う
母性性 1. 戸惑わずに娘と接することができると思う	1												
母性性 2. 娘と楽しい時間が持てると思う	.731**	1											
母性性 3. 孫と楽しい時間が持てると思う	.741**	.835**	1										
母性性 4. 娘が母親らしくなるだろうと思う	.730**	.635**	.617**	1									
母性性 5. 娘が自宅に戻ることが寂しいと思うだろう	-.471*	-.566**	-.413	-.193	1								
母性性 6. 1人の大人として娘と接していけると思う	.639**	.538**	.693**	.713**	-.298	1							
母性性 7. 祖母である自分を快く思うだろう	.296	.426*	.457*	.390	-.078	.667**	1						
世代性 8. 戸惑わずに育児を手伝えると思う	.847**	.578**	.617**	.553**	-.457*	.656**	.424*	1					
世代性 9. 娘が母親らしく成長することに役立ると思う	.843**	.636**	.672**	.611**	-.422	.717**	.484*	.844**	1				
世代性 10. 必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う	.645**	.536**	.499*	.513*	-.387	.495*	.385	.745**	.719**	1			
世代性 11. 周囲の人と育児協力することができると思う	.619**	.741**	.630**	.557**	-.341	.667**	.558**	.564**	.781**	.650**	1		
世代性 12. 今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	.547**	.632**	.783**	.408*	-.456*	.688**	.433*	.602**	.657**	.481*	.614**	1	
世代性 13. 自分の健康に対して不安がなく支援できると思う	.374	.243	.349	.355	-.169	.338	.572**	.449*	.569**	.330	.327	.323	1

※r= spearmanの相関係数　**p<.0.01,　*p<.0.05　逆転項目調整済

表 3-16　従来プログラム受講群（A 群）出産 1 ヵ月後の各項目間の相関（r）

n=18

質問項目 従来プログラム受講群産ヵ月後	母性性							世代性					
	1. 戸惑わずに娘と接することができた	2. 娘と楽しい時間が持てた	3. 孫と楽しい時間が持てた	4. 娘は母親らしくなったと思う	5. 娘が自宅に戻ることが寂しい	6. 1人の大人として娘と接していけると思う	7. 祖母である自分を快く思えた	8. 戸惑わずに育児を手伝えた	9. 娘が母親らしく成長することに役立てたと思う	10. 必要に応じて育児の知識と技術を伝達できた	11. 周囲の人と育児協力することができた	12. 今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	13. 自分の健康に対して不安がなく支援できた
母性性													
1. 戸惑わずに娘と接することができた	1												
2. 娘と楽しい時間が持てた	.777**	1											
3. 孫と楽しい時間が持てると思う	.670**	.862**	1										
4. 娘は母親らしくなったと思う	.523*	.723**	.862**	1									
5. 娘が自宅に戻ることが寂しい	-.072	.000	-.169	.000	1								
6. 1人の大人として娘と接していけると思う	.777**	.446	.564*	.446	-.196	1							
7. 祖母である自分を快く思えた	.749**	.526*	.482*	.316	-.434	.658**	1						
世代性													
8. 戸惑わずに育児を手伝えた	.299	.014	.122	.014	-.384	.523*	.363	1					
9. 娘が母親らしく成長することに役立てたと思う	.463	.381	.279	.150	-.103	.490*	.478*	.250	1				
10. 必要に応じて育児の知識と技術を伝達できた	.491*	.229	.197	-.031	-.433	.442	.458	.491*	.586*	1			
11. 周囲の人と育児協力することができた	-.132	-.247	-.099	.015	-.462	.182	.040	.618**	.331	.413	1		
12. 今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	.463	.397	.230	.137	-.011	.397	.638**	.224	.429	.113	-.031	1	
13. 自分の健康に対して不安がなく支援できた	.360	.157	.338	.353	-.353	.510*	.619**	.360	.081	-.080	.081	.348	1

※r= spearmanの相関係数　**p<.0.01,　*p<.0.05　逆転項目調整済

表 3-17　新プログラム受講（B 群）前の各項目間の相関（r）

n=31

質問項目 新プログラム受講前	母性性							世代性					
	1. 戸惑わずに娘と接することができると思う	2. 娘と楽しい時間が持てると思う	3. 孫と楽しい時間が持てると思う	4. 娘は母親らしくなるだろうと思う	5. 娘が自宅に戻ることが寂しいと思うだろう	6. 1人の大人として娘と接していけると思う	7. 祖母である自分を快うだろう	8. 戸惑わずに育児を手伝えると思う	9. 娘が母親らしく成長することに役立ると思う	10. 必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う	11. 周囲の人と育児協力することができると思う	12. 今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	13. 自分の健康に対して不安がなく支援できると思う
母性性													
1. 戸惑わずに娘と接することができると思う	1												
2. 娘と楽しい時間が持てると思う	.742**	1											
3. 孫と楽しい時間が持てると思う	.556**	.631**	1										
4. 娘は母親らしくなるだろうと思う	.269	.256	.692**	1									
5. 娘が自宅に戻ることが寂しいと思うだろう	-.093	-.125	.003	-.147	1								
6. 1人の大人として娘と接していけると思う	.390*	.225	.371*	.423*	-.271	1							
7. 祖母である自分を快く思うだろう	.334	.234	.246	.251	.001	.221	1						
世代性													
8. 戸惑わずに育児を手伝えると思う	.588**	.596**	.677**	.556**	-.026	.174	.479**	1					
9. 娘が母親らしく成長することに役立てると思う	.475**	.509**	.533**	.596**	-.137	.307	.605**	.791**	1				
10. 必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う	.347	.521**	.538**	.265	-.069	.108	.521**	.699**	.716**	1			
11. 周囲の人と育児協力することができると思う	.396*	.393*	.412*	.361	.046	.068	.571**	.715**	.731**	.836**	1		
12. 今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	.237	.138	.283	.325	-.019	.274	.360*	.346	.317	.143	.168	1	
13. 自分の健康に対して不安がなく支援できると思う	.538**	.548**	.497**	.223	.092	.192	.542**	.519**	.615**	.622**	.554**	.234	1

※r= spearmanの相関係数　**p<.0.01,　*p<.0.05　逆転項目調整済

表 3-18　新プログラム受講（B 群）直後の各項目間の相関（r）

n=31

質問項目 新プログラム受講直後	母性性 1. 戸惑わずに娘と接することができると思う	2. 娘と楽しい時間が持てると思う	3. 孫と楽しい時間が持てると思う	4. 娘は母親らしくなるだろうと思う	5. 娘が自宅に戻ることが寂しいと思うだろう	6. 1人の大人として娘と接していけると思う	7. 祖母である自分を快うだろう	世代性 8. 戸惑わずに育児を手伝えると思う	9. 娘が母親らしく成長することに役立ると思う	10. 必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う	11. 周囲の人と育児協力することができると思う	12. 今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	13. 自分の健康に対して不安がなく支援できると思う
母性性 1. 戸惑わずに娘と接することができると思う	1												
母性性 2. 娘と楽しい時間が持てると思う	.633**	1											
母性性 3. 孫と楽しい時間が持てると思う	.354	.597**	1										
母性性 4. 娘は母親らしくなるだろうと思う	.370*	.565**	.487**	1									
母性性 5. 娘が自宅に戻ることが寂しいと思うだろう	.088	-.017	.230	-.049	1								
母性性 6. 1人の大人として娘と接していけると思う	.426*	.319	.224	-.079	-.108	1							
母性性 7. 祖母である自分を快く思うだろう	.063	.432*	.320	.259	-.129	.385*	1						
世代性 8. 戸惑わずに育児を手伝えると思う	.386*	.470**	.568**	.558**	.117	.176	.342	1					
世代性 9. 娘が母親らしく成長することに役立てると思う	.378*	.574**	.801**	.441*	.194	.170	.397*	.446*	1				
世代性 10. 必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う	.499**	.577**	.463**	.385*	.075	.394*	.474**	.537**	.522**	1			
世代性 11. 周囲の人と育児協力することができると思う	.295	.625**	.424*	.349	-.081	.223	.444*	.195	.626**	.601**	1		
世代性 12. 今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	.341	.530**	.435*	.268	-.017	.471**	.353	.335	.429*	.446*	.487**	1	
世代性 13. 自分の健康に対して不安がなく支援できると思う	.226	.121	.326	.128	.186	.218	.324	.361*	.336	.475**	.250	.108	1

※r= spearmanの相関係数　**p<.0.01,　*p<.0.05　逆転項目調整済

表 3-19　新プログラム受講群（B 群）出産 1 ヵ月後の各項目間の相関（r）

n=17

質問項目 新プログラム受講群出産ヵ月後	母性性 1. 戸惑わずに娘と接することができた	2. 娘と楽しい時間が持てた	3. 孫と楽しい時間が持てた	4. 娘は母親らしくなったと思う	5. 娘が自宅に戻ることが寂しい	6. 1人の大人として娘と接していけると思う	7. 祖母である自分を快く思えた	世代性 8. 戸惑わずに育児を手伝えた	9. 娘が母親らしく成長することに役立てたと思う	10. 必要に応じて育児の知識と技術を伝達できた	11. 周囲の人と育児協力することができた	12. 今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	13. 自分の健康に対して不安がなく支援できた
母性性 1. 戸惑わずに娘と接することができた	1												
母性性 2. 娘と楽しい時間が持てた	.505*	1											
母性性 3. 孫と楽しい時間が持てると思う	.171	.419	1										
母性性 4. 娘は母親らしくなったと思う	.228	.222	.112	1									
母性性 5. 娘が自宅に戻ることが寂しい	.143	.546*	.524*	.504*	1								
母性性 6. 1人の大人として娘と接していけると思う	.440	.435	-.145	.043	.236	1							
母性性 7. 祖母である自分を快く思えた	.411	.500*	-.048	.427	.618*	.626**	1						
世代性 8. 戸惑わずに育児を手伝えた	.639**	.525*	.326	.421	.557*	.315	.602*	1					
世代性 9. 娘が母親らしく成長することに役立てたと思う	.187	-.005	-.539*	.430	.269	.454	.654**	.235	1				
世代性 10. 必要に応じて育児の知識と技術を伝達できた	.499*	.505*	.138	.329	.577*	.201	.494	.758**	.499*	1			
世代性 11. 周囲の人と育児協力することができた	.280	.529*	.000	-.061	.490*	.714**	.508*	.518*	.340	.477	1		
世代性 12. 今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う	.019	.135	.171	-.203	.143	.586*	.103	.000	-.093	-.094	.373	1	
世代性 13. 自分の健康に対して不安がなく支援できた	.317	.389	-.267	.352	.314	.426	.602*	.447	.739**	.696**	.475	-.117	1

※r= spearmanの相関係数　**p<.0.01,　*p<.0.05　逆転項目調整済

と思うだろう」r=.-566「6.1人の大人として娘と接していけると思う」r=.538、「3.孫と楽しい時間が持てると思う」と「6.1人の大人として娘と接していけると思う」r=.693「11. 周囲の人と育児協力することができると思う」r=.630「12.今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う」r=.783、「4. 娘は母親らしくなるだろうと思う」と「6.1人の大人として娘と接していけると思う」r=.713「7.祖母である自分を快く思うだろう」r=.611「11.周囲の人と育児協力することができると思う」r=.557、「6.1人の大人として娘と接していけると思う」と「7.祖母である自分を快く思うだろう」r=.667「8.戸惑わずに育児を手伝えると思う」r=.656「9.娘が母親らしく成長することに役立てると思う」r=.717「11.周囲の人と育児協力することができると思う」r=.667、「7.祖母である自分を快く思うだろう」と「11.周囲の人と育児協力することができると思う」r=.558「13.自分の健康に不安がなく支援が出来ると思う」r=.572「8.戸惑わずに育児を手伝えると思う」と「9.娘が母親らしく成長することに役立てると思う」r=.844「11.周囲の人と育児協力することができると思う」r=.564「12.今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う」r=.602、「9.娘が母親らしく成長することに役立てると思う」と「12.今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う」r=.657「13.自分の健康に不安がなく支援が出来ると思う」r=.569であった（表 3-14,3-17)。また、1ヵ月後において、B群にはみられず、A群にのみ 1%水準で有意に相関が認められたものは、「1.戸惑わずに娘と接することができると思う」と「2.娘と楽しい時間が持てると思う」r=.777「3.孫と楽しい時間が持てると思う」r=.670「6.1人の大人として娘と接していけると思う」r=.777「7.祖母である自分を快く思うだろう」r=.749、「2.娘と楽しい時間が持てると思う」と「3.孫と楽しい時間が持てると思う」r=.862「4.娘は母親らしくなるだろうと思う」r=.723、「3.孫と楽しい時間が持てると思う」と「4.娘は母親らしくなるだろうと思う」r=.862、「7.祖母である自分を快く思うだろう」と「12.今後も娘家族の力

添えをしていきたいと思う」r=.638「13.自分の健康に対して不安がなく支援できると思う」r=619.「8.戸惑わずに育児を手伝えると思う」と「11.周囲の人と育児協力することができると思う」r=.618であった(表 3-16,3-19)。A 群は、娘と戸惑わずに接することができる気持ちが高い程、孫と楽しい時間が持てる気持ち、娘が母親らしくなるだろう気持ちや大人として娘と接していけるだろう気持ち、周囲と協力し戸惑わずに育児を手伝え、娘が母親らしく成長することに役立てる気持ちが高まり、娘家族の支援を継続したい気持ちが高まることが明らかになった。寂寥感は娘と楽しい時間を持てるだろう気持ちが高い程高まる結果となった。娘の役に立てると思えること、すなわち無力感との関連がみられたものは、戸惑わずに娘と関われる気持ちの他、娘が母親らしくなるだろう気持ち、1 人の大人として接していける気持ち、戸惑わずに育児を手伝える気持ち、今後も娘家族の力添えをしていきたい気持ち、さらに自分の健康に対して不安がないことであった。世代性に関する戸惑わずに育児を手伝える気持ちと関連がみられたものは、周囲の人と協力しながら今後も支援を継続したい気持ちであった。祖母としての自分を快く思えることと関連がみられたものは、周囲と協力できる気持ちと自分の健康に不安がないことであった。その他、孫と楽しい時間を持てる気持ちは、1 人の大人として接していける気持ちおよびと関連がみられた。

A 群において、前、直後、1 ヵ月後まで持続して相関関係を示したものは「1.戸惑わずに娘と接することができると思う」と「2.娘と楽しい時間を持てると思う」「3.孫と楽しい時間が持てると思う」、「7.祖母である自分を快く思うだろう」と「13.自分の健康に不安がなく支援が出来ると思う」、「8.戸惑わずに育児を手伝えると思う」と「11.周囲の人と育児協力することができると思う」であった（表 3-14,3-15,3-16)。

従来プログラムは、戸惑わずに娘と接することができる程、娘と楽しい時間が持てる期待を高め、孫とも同様に楽しい時間が持てる気持ちを高め

ることが明らかになった。また、祖母である自分を快く思う気持ちが高い程、自分の健康不安がなく、戸惑わずに育児を手伝える気持ちが高い程、周囲と育児協力できる気持ちは高まり、その関連が出産1か月後も持続されるプログラムであることが明らかにされた。

A群の直後にはみられず、B群の直後においてのみ関連がみられたものは、「3.孫と楽しい時間が持てると思う」と「10.必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う」r=.463、「7.祖母である自分を快く思うだろう」と「10.必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う」r=.474、「10.必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う」と「13.自分の健康に対して不安がなく支援できると思う」r=.475 であった(表 3-15,3-18)。また、1ヵ月後において、A群にはみられず、B群にのみ1％水準で有意に相関が認められたものは、「1.戸惑わずに娘と接することができると思う」と「8.戸惑わずに育児を手伝えると思う」r=.639、「6.1人の大人として娘と接していけると思う」と「11.周囲の人と育児協力することができると思う」r=.714、「7.祖母である自分を快く思えた」と「9.娘が母親らしく成長することに役立てた」r=.654、「8.戸惑わずに育児を手伝えた」と「10.必要に応じて育児の知識と技術を伝達できた」r=.758、「9.娘が母親らしく成長することに役立てた」と「13. 自分の健康に不安がなく支援できた」r=.739、「10.必要に応じて育児の知識と技術を伝達できた」と「13.自分の健康に不安がなく支援できた」r=.696 であった（表 3-16,3-19)。

B群において、前、直後、1ヵ月と持続して1%水準で有意に正の相関を示したのは、「8.戸惑わずに育児を手伝えると思う」と「10. 必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う」、「10.必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う」と「13.自分の健康に不安がなく支援が出来ると思う」であった（表 3-17,3-18,3-19)。

以上のことから、新プログラムでは、戸惑わずに娘と接することができる程、戸惑わずに育児を手伝える気持が高まった。また、戸惑わずに育児

を手伝えると思う程、必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う気持ちが高まった。娘が母親らしく成長することに役立てる気持ちが高い程、祖母である自分を快く思う気持ちがや健康不安なく支援できる気持ち、必要に応じて知識と技術を伝達できた思いが高まった。健康不安なく支援できる気持ちが高まる程、必要に応じて育児の知識と技術を伝達できる気持ちが高まりを示した。育児の知識と技術を伝達できる気持ちが高い程、自分の健康に不安がなく支援ができる気持ちの高まりが持続することが明らかになった。また、祖母である自分を快く思う程、必要に応じて育児の知識と技術を伝達できる気持ちが高まることが明らかになった。その他、新プログラムは、孫と楽しい時間が持てると思う程、必要に応じて育児の知識と技術を伝達できる気持ちが高まり、1人の大人として娘と接していけると思う程、周囲の人と協力できたと思いが高まった。新プログラムが狙いとする寂寥感と関連が認められたものはみられなかった。

第３節　実母の母性性･世代性を発達させるプログラムの特徴

第１項　実母に向けた教育プログラムの効果

A、B 群の研究対象者の年齢は更年期に差し掛かる 50 歳頃から 60 歳代にわたっていた。また、正規雇用若しくはパートの形態で就労を持つものが A 群ではおよそ 7 割、B 群ではおよそ 5 割であった。健康不安は年齢的なことに加え､就労と支援の両立が要因となっていることが推察された。初めて産後を支援するものは A 群ではおよそ 7 割、B 群ではおよそ 8 割みられ、初めて支援するものに受講希望が多いことが伺えた。また、支援形態は里帰りによるものが A、B 群ともにおよそ 9 割にみられ、先行研究で明らかにされた里帰りの動向（大賀他,2005；水野他,2014）と概ね一致していた。近年においても、娘が実家における実母の支援を期待していることが推察された。

A、B 群共に母性性及び世代性に関する項目が有意に高まりを示したものと、A、B 群共通して母性性と世代性に関する項目間に有意に関連を示したものが認められた。また、A、B 群其々に特有に有意に高まりを示したもの、各項目間に関連を示したものが確認された。従来および新プログラム共通内容である産褥期の娘の心身と今時の育児を理解することは共通の結果をもたらし､従来プログラムで育児の脇役として見守る態度で関わることを伝えることは、A 群のみに認められた結果と考え、新プログラムに追加された娘の母親役割獲得過程に応じた支援方法と実母自身の健康内容は B 群にのみ認められた結果をもたらしたと考え､其々考察する。

１.産褥期の心身の特徴と今時の育児を理解することによる母性性・世代性の発達

従来プログラムと新プログラムは、ともに母性性の発揮において、産褥期の娘の心身の理解を促し、娘に対し否定的な言葉をかけず、肯定的に接することと、世代性の発揮において、昔と異なる今時の育児を理解することを狙っている。両群ともに受講直後は、母性性に関する質問項目である

１人の大人として娘と接することにおいて有意に気持ちの高まりがみられた。米国の先行研究では初妊婦は妊娠を契機に実母との対等な関係を形成する（Martell,1990）と報告されているが、わが国の妊娠中の母娘関係は実母との立場・関係の維持を望む気持ちが存在しており，必ずしも対等な関係性へと直線的な高まりは示されなかった（岡山,2006）。しかし、娘を１人の大人として接していける思いが A、B 群共に受講直後では有意に、1ヵ月後では有意差はみられないものの高まりを示したことから、実母が産後の支援を通じて娘を大人として捉え、産後において娘と対等な関係をもたらす機会となることが示唆された。

両群共通して受講直後には、1人の大人として娘と接することができる気持ちが高まる程、支援継続への意欲が高まりを示したことから、娘との大人同士の関係を築けることが支援の継続の鍵となることが考えられた。先行研究によると里帰り形態は、母親になろうとする娘が実母にとっての娘に戻ることで母親役割獲得する上で危険を孕んでいると指摘していること（大賀他,2005）や、娘と実母との絆・情緒的な結びつきを強め、実母への依存性を高め里帰りが長引くことを危惧しているが（長鶴,2006）、これらの先行研究とは異なり、娘が母親として成長せずに実母と情緒的な結びつきを強め依存的であると実母の負担感が高まり、むしろ支援継続意欲が低下することが推察された。両群共通して 1ヵ月後においては、娘を１人の大人として接していける気持ちが高まり、これまでの母娘関係とは異なる新たな大人同士の関係性を築ける程、実母は祖母であることを快く思う気持ちが高まることが明らかにされた。娘の産後支援を機会に、実母と娘関係に変化をもたらし、祖母になったことを快く捉えられることができれば、実母の心理に良い影響をもたらすことが期待された。

また、両群ともに、世代性に関する質問項目である娘が母親らしく成長することに役立てること、育児の知識と技術を伝達できること、周囲の人と協力できることにおいて気持ちの高まりがみられた。周囲の人と協力で

きる気持ちが高まる程、娘が母親らしく成長することに役立てる気持ちが高まり、娘家族の支援を継続する気持ちが高まりを見せたことから、両プログラムに共通の狙いである昔とは異なる今時の育児を理解することは、育児の知識と技術を伝達する世代性を発揮させやすく、その結果として、娘の役に立てる気持ちを高めたと考えられた。周囲の人と協力できることは、娘との一対一の関係を緩和し、支援における負担感が緩和され、支援継続の意欲を高めると考えられる。娘が母親らしく成長することに役立てる気持ちと周囲と協力することに関連がみられた結果は、本論文第２章で、娘が母親らしくなったと捉えることが夫と連携し周囲と協力する支援態度に影響するという結果と一致した。

また、戸惑わずに育児を手伝えると思う気持ちは、A、B 群ともに受講による有意差は認められなかったものの高まりが認められた。戸惑わずに育児を手伝える気持ちが高まる程、娘が母親らしくなるだろう期待が高まることから、今時の育児を理解することの新たな意義が見いだされた。戸惑わずに育児を手伝える気持ちが高い程、戸惑わずに娘と接することができる気持ちが高まったことから、育児に対する戸惑いが娘に関わるうえでの戸惑いと関連していることが明らかになった。娘が母親らしく成長することに役立てる気持ちが高まる程、周囲と育児協力できる気持ちが高まり、周囲と協力することができる気持ちが高まる程、娘家族の支援の継続意欲が高まることも明らかになった。これらのことから、実母が祖母として自己を快く捉えるには、自分の持つ世代性を戸惑わずに発揮させ、娘が母親として成長する過程を側で見届け、娘を１人の大人として接していける思いが持てることが必要であると考えられた。

その他 A、B 群ともに受講直後における各項目間の関連では、戸惑わずに娘と接することができる思いが高い程、必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う気持ちが高まりを示した。産後の心理状態を理解し、普段とは異なる娘の反応に戸惑わずに娘と接することができることが、世

代性に関する実母の持つ世代性を発揮させることに繋がると考えられた。また、娘と楽しい時間を過ごせる期待が持てる程、孫との楽しい時間を持てる期待や娘が母親らしくなるだろう期待が高まりを示し、支援を楽しみに受け止められることが期待できた。娘と楽しい時間を過ごせる期待が高い程、戸惑わずに育児を手伝い、必要に応じて育児の知識と技術を伝達できるという世代性を発揮させることを高め、娘の成長に役立てる気持ちが高まることから、教育プログラムの狙いとしている無力感の軽減に役立つことが示唆された。孫との楽しい時間を想像できる程、戸惑わずに育児を手伝うことができる気持ちを高め、娘と孫を見守るに留まらず、必要に応じて自分の持つ知識と技術を伝達させ、役立つことができる期待と、母性性を示す娘が母親らしくなる期待が高まることが考えられた。

自由記載からは、沐浴演習によりスキントラブルが無く過ごせたことが示され役立ったことが明らかにされた。島田ら（2006）が産後 1 ヵ月間の母親の主な気がかりに児のスキントラブルが 34%と最も上位に挙げていることと一致した。その他、仕事との両立に困難さを感じていることが明らかにされた。実母には産後支援休暇が必要であることが示唆された。A、B 群ともに支援 1 ヵ月後において、昔の育児も間違いではないと思えていた。このことから、実母教育プログラムにおいて、昔と異なる今時の育児の理解を伝えることと同時に、実母の育児体験が間違いでは無いことも伝えていく必要があり、娘との意見の相違を緩和するために、実母と娘が一緒に受講することが望ましいと考えられた。

従来、新プログラムともに母性性においては、娘を大人として捉えた関わりを促し、世代性においては、必要に応じて育児の知識と技術を伝達し周囲の人と協力して支援することで娘が母親らしく成長することに役立てる気持ちを高めるプログラムであることが明らかになった。さらに、実母が娘と楽しい時間を期待する程、孫との楽しい時間や娘の母親としての成長をイメージさせ、その母性性は高まり、戸惑わずに周囲と協力しなが

ら必要時に育児の知識技術を伝達し、娘が母親として成長することに役立てるといった世代性もまた高まることから、母性性と世代性が関連していることが明らかになった。

2.娘の母親役割獲得に合わせた支援を理解することによる母性性・世代性の発達

従来プログラムでは、祖母役割を育児のサポーター役と位置づけ、娘の育児を戸惑わずに見守ることを狙いとしている。A群の直後にのみ、母性性に関する質問項目の娘が母親らしくなるだろうと思う気持ちと祖母である自分を快く思う気持ち、および娘家族の支援を継続したいという気持ちが有意に高まった。また、A群の直後では、娘が母親らしくなるだろう気持ちと、実母が娘を1人の大人として接することができる気持ち、娘が母親らしく成長することに役立てる気持ち、周囲と協力できる気持ちに関連がみられた。見守りに徹することを推奨する従来プログラムは、娘との距離をとり周囲と協力しながら娘の母親としての成長を支え、その結果として娘が母親らしくなることをイメージさせたと考えられた。娘との親密な関わりが持てず、娘との楽しい時間が持てる気持ちに繋がらなかったと考える。

世代性に関する質問項目の戸惑わずに育児を手伝える気持ちに有意な高まりはみられなかった。しかし、質問項目間の関連を分析した結果、戸惑わずに育児を手伝える気持ちが高い程、直後と1ヵ月後ともに周囲の人と協力できる気持ちが高まったことから、実母が家族と協力しながら育児支援ができる程、育児支援における戸惑いが軽減されることが示唆された。今後も支援を継続したい気持ちの高まりは、娘を母親として自立することを妨げる危険を孕んでいるが、娘を1人の大人として捉えることと関連がみられたことは、前述と同様に先行研究とは異なる結果であった。

従来プログラム受講前の自由記載から、実母の心配事には、今の育児が昔とは異なることや、産後のスマホ使用の是非に関すること、および家族

の協力が得られない不安がみられた。近年における児童虐待に関して、実母は娘が子どもを虐待せずに育児出来ることを願っていることが伺えた。

受講直後の自由記載からは、実母が支援にあたり、娘が楽しく育児できるように精一杯娘を支援したいこと、時代に沿った育児を支援したい反面、昔の良さも伝えていきたいと考えていることが明らかになり、これまでの経験から得た世代性を娘の産後支援で発揮させる意欲がみられた。見守りに徹することを推奨することは、実母のこのような意欲を低下させ、心理的な影響を及ぼすことが危惧された。今時の育児とは異なる娘の育児を始めは戸惑ったが落ち着いて見守ることができたという記載から、見守りを中心に関わっていたことが伺えた。実母が自己を顧みずに無心に支援するこの時期は、娘独自の育児を見出す手助けを必要としていることから、見守りに徹することは、娘と実母双方のニーズに合致していないのではないかと考える。従来プログラムでは、実母は娘を見守り、娘が育児経験を通じて母親らしくなることを期待し、その過程をみることが祖母としての喜びであると捉え、支援を継続したい気持ちを高めるプログラムであると考えられた。その他、自由記載から、自分の健康を気遣いながら支援したことや、娘婿との関係性を深めたことが明らかにされた。

新プログラムは、従来プログラムに加え、支援中に生じる娘との関わりと育児の戸惑い、無力感、寂寥感、健康不安を軽減し、娘の育児を見守るに留まらず、娘の母親役割獲得過程に対応させながら、必要時に助言が育児技術を実践することを狙いとしている。新プログラムを受講した B 群の直後では、従来プログラムを受講した A 群と比較して、娘や孫と楽しい時間を持てる気持ちが高まった。産後 1 ヵ月と受講前の気持ちの変化の差においては、孫と楽しい時間が持てた気持ちが B 群では有意に高まった。新プログラムでは、祖母役割が見守りに留まらず、娘の母親役割獲得過程に応じて助言や育児を手伝う必要性を伝えていることから、自分の

これまでの育児経験を活かし実母の持つ世代性を発揮させることで、娘や孫との楽しい時間を共有することをイメージし、実際に支援後においても孫との楽しい時間を持つことができたと考える。

新道ら（1990）が実母の持つ愛情が母親に注がれることで、母親が児へと愛情を注ぎ込むことができると述べているように、実母が娘とともに過ごす時間を楽しいものとして捉えられることは、娘との関係性において安定した関係性をもたらし、娘が安寧な気持ちで我が子と関わり愛情を注ぐことが期待される。また、B 群の直後において、孫と楽しい時間が持てる思いが有意に高まったことは、久保ら（2011）が、祖母になることの特徴の一つに、辛いことがあるとき孫のことを思うと気持ちが慰められるといった因子を見出していることと一致した。また、本論文の第 2 章で実母の母性性が、娘中心から娘と孫を対にして向けられ視野が拡大していくことが明らかにされたことから、本研究において実母の関心が孫に向けられた結果は、実母の母性性が発達を見せたことを示している。新プログラムは、娘の出産前から祖母としての発達を促すことができるプログラムであると考えられた。また、B 群では、実母自身の健康に対して不安が無く支援できると思う気持ちが有意に高まった。肩こりや腰痛体操を取り入れ、実母自身の健康に留意することを伝えたことで、健康不安が軽減されたことが考えられたため、今後も取り入れることが望ましい内容である。健康不安が無いことと、必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思うことに関連がみられたことから、世代性を発揮するには健康に自信があることが必要であると考えられた。新プログラムが狙いとした寂寥感については、受講直後はむしろ寂寥感を有意に高めた結果となった。娘や孫と楽しい時間を持てることをイメージすることで、支援終了後の寂寥感を高めたことが推察された。

産後 1 ヵ月後において、B 群では A 群にみられなかった祖母であることを快く思えた気持ちが有意に高まりをみせた。母親役割獲得過程に合わ

せて実母の持つ母性性を発揮させ、娘は孫、その家族に愛情を注ぐ体験は、祖母であることを快く思うことに繋がると考えられた。1ヵ月後において、祖母である自分を快く思うことと有意に関連がみられた項目は、娘が母親らしく成長することに役立てることができたことであった。娘の母親役割獲得過程を支えることができたという実感が、祖母であることを快く捉えることができる要因であることが示唆された。

B群の受講前の自由記載から、不安と楽しみの共存した気持ちで支援に臨んでいることが明らかになった。受講後は、娘への声かけひとつで娘の心身の状態が左右され、産後の支援が簡単ではないと捉え、自分の関わりが娘に影響すると感じ、娘への言葉かけを具体的にイメージしたことが伺えた。また、新プログラムでは、自分の産後1ヵ月間の自分が受けた支援を想起することを促した。その結果、過去に受けた支援への感謝を生起させ、現在の介護にあたるうえでの自分の親子関係に繋げ、現在の親の介護を一生懸命にしたいという気持ちが生じていた。温かな気持ちを引き出したという記述から、親から受けた支援を親の介護の中で返す気持ちが持てることは、介護するものの心理的な負担の軽減に繋がることが考えられた。また、家族で協力したことや、娘との距離間を考え、支援し過ぎ無いことを意識して支援できたことは、娘の自立を妨げることなく支援が出来たことが推察された。教室の持ち方については、同じ立場である実母同士で話ができたこと、娘と一緒に参加しできたことを評価していた。その為、実母教育の実施にあたっては、娘やその家族と一緒に受講できるように整え、実母同士の交流が持てる環境づくりが必要であることがわかった。また、自由記載から、実母教育プログラムが世代性を発揮させるうえで大変役立つものであり、継続して欲しいという要望がみられた。その他、仕事との両立に困難さを感じていることが明らかにされたことから実母には産後支援休暇が必要であることが明らかにされた。

以上、従来と新プログラムを受講した各群の特徴的な結果から、従来プログラムに娘の母親役割獲得に合わせた支援と実母自身の健康を追加した新プログラムを受講することで、娘に寄せられた関心が、孫、さらに実母自身へと関心が寄せられたことが明らかになった。新プログラムは娘の育児支援強化を目的とした従来プログラムとは異なり、実母が持つ母性性世代性を発揮させることで娘の役に立てる気持ちを高め、無力感の軽減を図るに留まらず、娘や孫との楽しい時間を持てる楽しみを高め、支援後に祖母である自分を快く思えた体験へと繋げることができた。新プログラムは健康不安を軽減することにも役立ち、実母自身に向けられた教育プログラムであったことが明らかにされた。

第２項　産後を支援する実母を対象とした教育プログラムの課題

新プログラムの狙いとする娘との関わりや育児支援における戸惑い、寂寥感については新プログラム受講直後、1ヵ月後ともに、受講前と比較し軽減することができなかった。

戸惑わずに娘と関わることができる気持ちは、受講直後の必要に応じて育児の知識と技術を伝達できることと関連が認められ、1ヵ月後においては戸惑わずに育児を手伝えたことと関連が認められたこと、および、昔の育児も決して間違いでは無かったと思えていた。このことから、今時の育児の理解を促し知識と技術の伝達ができる自信を高めることと合わせて、昔から変わらず普遍的なことがあることを伝える必要があると考えられた。変化したことについては、視聴覚教材やモデルを用いることで、より理解が高まることが期待された。娘と実母との間で、育児に対する意見の相違が生じないために、また、実母と娘の良好な関係性が築けるように、一緒に教室に参加することが望ましいと考えられた。

寂寥感については、新プログラムではむしろ高める結果となった。娘や孫との楽しい時間をイメージすることで寂寥感を高めることが推察され

た。寂寥感が高まることと支援の継続とに関連がみられなかったことから、寂寥感を抱くことを否定的に捉えず自然な感情であると捉え、寂寥感が生じやすい時期に実母同士の交流の場を設けピアな仲間作りにより、その寂寥感を肯定的に受け止められるよう支援することが望ましいと考えられた。

今回の実母教育においては、従来および新プログラムともに継続を期待する記述がみられたことから、期待に応じて改善しながら実母教育プログラムを継続していくことが必要であることが明らかになった。

以上から、新たに作成した実母教育プログラムの、従来と変わらず認められた有用性と新たな有用性、および実母教育プログラムを通じた母性性・世代性の発達に向けた支援は以下の通りである。

１．従来と同様に新プログラムは、母性性の表れである「娘を１人の大人として捉えて接する気持ち」を高めることができる。新プログラムは実母の娘への関わり方次第で娘が母親らしく成長するという役割意識を持ち、具体的な娘との接し方について考えることができるプログラムである。娘を大人として捉えられることと、祖母としての自己を快く思える気持ちが関連していたことから、祖母であることを肯定的に捉えられるためには、娘が母親として成長できるように支援することが重要であり、プログラムに娘も一緒に参加することが推奨される。娘を大人として捉えられることが、実母の支援継続意思と関連することは、本研究の新たな知見であった。

２．新プログラムは従来プログラムとは異なり、母性性の表れである娘や孫との楽しい時間を持てる気持ちを高め、祖母であることを快く思う気持ちを高めるプログラムである。新プログラムでは、戸惑わずに必要に応じて育児の知識と技術を伝達しようとする世代性が高まる程、娘との楽しい時間が持てる気持ちが高まることから、娘との良好な関係性を促すには、

娘の母親役割獲得過程に応じて世代性が発揮できるように支援することが望ましい。娘が母親として成長することに役立てた思いを持てることで、祖母としての自分を快く思う気持ちが高まることから、実母の持つ世代性を発揮させる機会を持つことは祖母としての発達に重要である。娘の役に立てたという有用感が持てることは、健康不安の軽減と関連することから、娘の母親らしい成長がみられた後は、周囲と協力して支援し健康不安を軽減させることも必要である。また、健康体操を取り入れ、健康不安が軽減されることで、必要に応じて育児の知識と技術を伝達し、娘が母親として成長することに役立てるという世代性を高めることができる。

３．新プログラムでは実母に生じる戸惑いと寂寥感は軽減できない。戸惑わずに娘と関わることと、娘や孫と楽しい時間が持てることや戸惑わずに育児支援ができることには関連があることから、娘との良好な関係性を築くには、娘や孫との楽しい時間を持ち、戸惑わずに育児支援ができることが必要である。また、戸惑わずに育児支援ができることは、育児知識技術を伝達できることや周囲の人と育児協力できることと関連があることから、育児の知識技術を習得することは重要であり、周囲も育児を手伝えることが必要である。娘と楽しい時間が持てることと関連のある寂寥感を軽減するためには、支援終了頃に教室を開くことが望ましい。

なお、本研究における研究対象者は、受講直後と産後 1 ヵ月において「娘は母親らしくなるだろうと思う」あるいは「娘は母親らしくなったと思う」の質問に、「全くあてはまらない」「ややあてはまらない」と回答した者はいなかった（表 3-5，3-6，3-8，3-9）。受講後の全ての実母が、娘は母親らしくなるだろう期待を持つか、母親らしくなったと感じられた実母であったことから、本研究結果を、娘が母親らしく成長することができなかった実母を含めた実母全体にあてはめることには限界がある。

里帰り形態は、娘が妻という役割を放棄し、娘に戻ってしまうことが懸念され、母親という新しい役割移行の上でマイナス要因となる可能性がある。その為、里帰り期間が 4 ヵ月に及ぶこともあると報告されている（大賀他,2005）。このように、娘の母親役割獲得が阻害される場合には、里帰り期間が延長するか、若しくは娘の実母への依存が高まり、娘夫婦の関係性に悪影響を及ぼし産後クライスを助長しかねないことから、娘が母親らしく成長するように支援することが重要である。

第３章　引用文献

・石井邦子，井出成美，佐藤紀子（2008）．家族員の育児対処能力向上のための孫育児支援プログラムの有用性と課題．千葉看会誌，14（1），107－114.

・久保恭子，及川裕子，刀根洋子(2011).祖母性の因子構造．母性衛生,51（4），601-608

・Martell，L．K.（1990）．The mother－daughter relationship during daughter’s first pregnancy：the transition experience．Holistic Nursing Practice．4（3），47-55.

・長鶴美佐子（2006）．周産期の実母との関係性が産褥１ヶ月の褥婦のメンタルヘルスに及ぼす影響．母性衛生，46（4），550-559.

・岡山久代(2006).妊娠期における初妊婦と実母の関係性の発達的変化．母性衛生，47（2），455 - 463.

・大賀明子，佐藤喜美子，諏訪きぬ（2005）．周産期における生活実態からみた「里帰り出産」．母性衛生，45（4），423－431.

・島田三恵子，杉本充弘，縣俊彦，新田紀枝，関和男，大橋一友，村上睦子，中根直子，神谷整子，戸田律子，盛山幸子（2006）．産後１カ月間の母子の心配事と子育て支援のニーズおよび育児環境に関する全国調査 -「健やか親子 21」　5年後の初経産別，職業の有無による比較検討－．小児保健研究，65（6），752－762.

・新道幸惠，和田サヨ子(1990)．母性の心理社会的側面と看護ケア．医学書院，98-122.

・寺坂多栄子,斉藤祥乃,土川祥,渕元純子,正木紀代子,岡本久代(2011)．初めて妊娠した娘を持つ実母の孫育て講座に対するニーズ.滋賀母性衛生学会誌，11（1），7-11.

・柳川真理（2003）．周産期保健指導に関する一考察．香川母性衛生学会

誌，３（1），32-44.

第４章　産後を支援する実母の母性性･世代性および祖母としての発達

本章では、第２章で明らかにされた「産後を支援する実母の母性性と世代性が変化しながら経過する」ことと、第３章で明らかにされた「母性性と世代性が関連している」ことを踏まえて、母性性・世代性の軌跡を可視化することを試みる。さらにそれらの軌跡を辿りながら、祖母としての発達とその発達を促す支援について考察する。

第１節　実母の母性性･世代性の変化と軌跡および祖母としての発達

内閣府は（2014)、60～64 歳の女性が楽しみにしていることは、仲間と集まりおしゃべりをすることや旅行、ショッピングなどが、子や孫に関わることよりも上位を占めていると発表した。このような個人を大切にする現代においてなお、日本特有の里帰り文化が継承され、実母は産後の女性の重要な支援者とされている。その現状をどう捉えるべきだろうか。更年期・閉経を迎える実母年代の女性は内分泌の変動と、子どもの巣立ちという社会文化的要素の変動が重なり、母親役割の喪失と喪失作業の失敗、アイデンティティの混乱から空の巣症候群が生じるとされる（岡本, 2010)。就職や結婚により自宅から一旦離れた娘が､出産後に孫と共に実母の家で暮らす里帰りは、母親役割を喪失した中高年女性が再び役割を取り戻し、娘を育てた経験から得た育児支援力を発揮させ､娘から頼られる喜びを得ることができる（井関, 2013）。また、かつて子どもであった娘が母親として成長する過程を見ることで、娘に対する愛着を深め、自分の子育てに間違いがなかったと自負心を持つことにもなる（中村, 2014）。このように、娘の産後を支援することは、実母に心の豊かさをもたらす。しかし、里帰り形態による実母の支援は､娘の依存が高まりやすく（長鶴,2006)、4 ヵ月以上の長期にわたり里帰りが継続されることもあり（森田, 2002)、実母が支援の手を緩めることができなければ、久保ら（2008）が述べるように、その先の育児支援において、実母に重荷や健康不安を生じることが危惧される。あるいは、小林（2010）が述べるように、里帰り中の実母の

言葉や態度によって娘との関係性が悪化し、新たな親子間の葛藤を引き起こすこともある。江戸時代から継承される里帰りによる実母の産後支援を、実母が当然行うべき支援として捉え（小林他,2008）、何ら意味を持たずに支援し（柳川,2002）、娘に依存され実母の意思と関係なく強制された支援であると、実母に負担感や重荷をもたらしかねない。実母が娘の産後をすることには、娘が母親として成長することを助けることと、実母自身の心身の健康と生涯発達において意味があることを理解して取り組むことが必要である。

本研究では、娘の産後を支援することにおいて、実母の持つ母性性と世代性をどのように発揮させながら、実母が祖母としての発達を遂げるかを明らかにしたいと考え研究に取り組んだ。その結果、実母は自身の持つ母性性と世代性を変化させながら、またそれらの母性性、世代性を関連させながら、娘の支援過程で発揮させていることが明らかになった。支援過程において、実母が娘の成長を感じることができる程、実母は娘家族の支援の継続意欲を高め、祖母としての自己を肯定的に捉えることも明らかにされた。母親として自立した娘の一時的な逃げ場として支援するのであれば、喪失感を生じた実母に育児の担い手としての役割を復活させ、実母の心の健康に繋がると考えた。このように、祖母としての人生のスタートを切るにあたり、祖母として発達するには、娘の産後 1 ヵ月をどう支援するかにかかっている。

実母が娘の産後支援を通して、これまでの娘の母親としての人生から、祖母として娘や孫、娘婿のために役立てることができることと、個としての楽しみを持てることをバランスよく取りながら人生を送ることは、2017 年の女性の平均寿命が 87.26 歳と発表され（厚生労働統計協会，2017）、およそ 30 年の子どもを産み育てる人生よりも長期にわたる祖母としての人生を豊かに生きる上で重要な課題とされ（服部，2010；岡本，2010）、実母にとって、娘の産後 1 ヵ月支援は娘の母親であることの総

仕上げでもある（陳，2000）。里帰り支援は、実母が祖母としての人生をよりよく生き抜くことに貢献すると考える。

本節では、実母の母性性、世代性の変化とその軌跡と、祖母としての発達について述べる。第２章の研究により、娘の産後１ヵ月頃までにおける実母の支援過程において、その支援態度は娘の母親として自己を顧みず無心に愛情を注ぐ時期から、無理をせずに支え、娘家族の自立を支援する時期へと大きく変化していたことが明らかにされた。支援開始頃の実母の眼差しは、かつて娘の母親であった時のように、自分の子どもである娘個人に向けられているが、娘の心身の回復がみられると次第に娘と孫を対にして見るようになり、娘親子の母子相互作用を俯瞰している点は興味深いことであった。次第に実母の視野は自分と夫へ、さらに娘婿を含めた娘家族と実母自身の家族全体へと拡大させていた。氏家ら（2011）は、親子関係における行動を、温かさや配慮などの関与と、規律にもとづく躾や制約、結果責任の追及といった構造化の２つの次元で特徴づけている。研究者は氏家らのいう親子関係における行動は母性性に特徴づけられるものとして考えた。本論文第２章で明らかにされた実母の支援プロセスと第３章で明らかにされた実母の母性性と世代性の経過及びその軌跡、祖母としての発達を図 4-1 にまとめた。実母の母性性の中でも氏家らが述べる温かさや配慮を示す関与の経過を【】内に青字で、躾や制約といった構造化の経過を【】内に黒字で、世代性の経過を『』、影響し合う母性性と世代性を、祖母としての発達を、支援態度と時期を↔、支援態度が変化する状況要因をで示す。

実母の母性性は、支援開始頃は【娘が求める要求を察し】【娘の不安な気持ちに対する理解】といった関与が強く表れ、躾や制約を特徴づける構造化がみられなかった。しかし、家族全体へと視野が拡大すると、【育児に関する注意】や【娘の依存と自立のバランスをとる】といった構造化と

受け取れる母性性が強く表れていた。

一方、実母の支援開始頃の世代性は、直接的な育児の知識、技術の伝達を行わず、『知人からの育児技術に関する情報収集』に始まり、娘の日常生活を支える家事を中心に支援する。孫が新生児特有の泣きのピークへと向かい、娘がこれまでの育児方法では上手くいかなくなると、徐々に『娘と一緒に試行錯誤しながら見出す育児方法』や『自分なりの考えの助言』、『実体験に基づき手本を示す』など、自分の育児を再現させて世代性を発揮する。支援が終了する頃には、『育児の裏方役に徹する』態度へとその世代性は家族全体の幸福のために変化する。実母の直接的な支援から見守るという世代性の変容は祖父母世代に特徴的にみられることから（深瀬他,2010）、世代性は発達し続けると捉えられた。さらに、実母の世代性の表れである『知人からの育児技術に関する情報収集』が母性性の表れである【娘が求める要求を察する】ことに影響し、母性性の表れである【娘親子を支援することの楽しみ】が、世代性の表れである『自分なりの考えの助言』や『実体験に基づき手本を示す』ことに、同様に【逃げ場の提供】が『娘婿の父親役割を促す』ことに影響しているなど、母性性と世代性は影響し合っていた。

実母が母性性、世代性を発達させながら娘を支援する過程で、その支援態度は自己を顧みずに無心に助ける時期から無理せずに支え自立を支援する時期へと変化した。この変化をもたらす状況要因には、娘の成長を実感すること、および娘との関係性を再構築することが挙げられた。このように娘の産後を支援する実母は、母性性・世代性を変化させ互いに影響させながら徐々に発達する軌跡を辿り、娘の母親から娘家族の祖母へと発達を遂げていくと考えられた（図 4-1）。

以上、実母の母性性と世代性の変化を述べた。そこで、実母の母性性と世代性が変化することの意味を考え、祖母としての発達について考察する。

母性性について玉谷（1985）は、その本質は、相手の身になって感じる

能力、他の人の必要とするものを直観的に把握すること、そしていつでも準備し控えていること、自分自身の運命と同様に他の人の運命を大切にすることと述べ、「支える」「育てる」「実らせる」善き母性と、「つかむ」「誘い込む」「のみこむ」悪しき母性の二面性を同時に持ち合わせるとしている（図 4-2）。氏家ら（2011）が提唱した関与と構造化と玉谷（1985）の述べる母性の二面性を踏まえて、実母が娘に母性性・世代性を変化、関連させながら産後 1 か月を支援することで、祖母としてどのように発達するかを考察する。

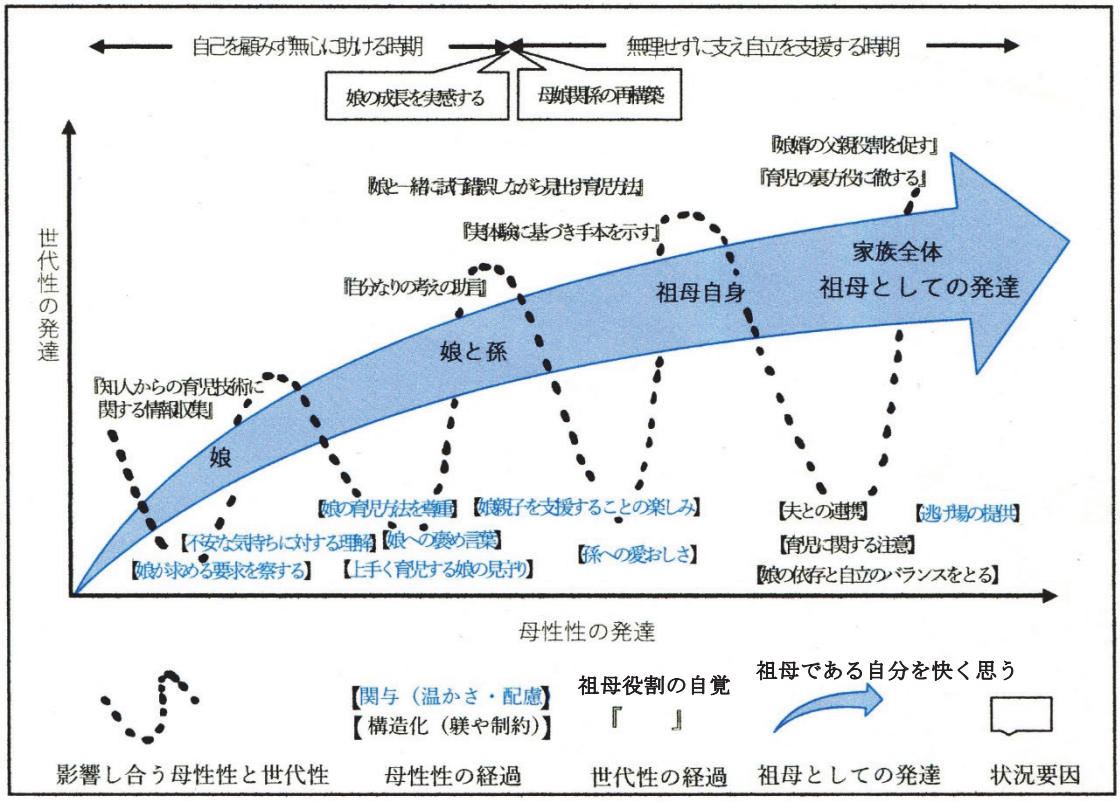

図 4-1　実母の母性性・世代性の経過と軌跡および祖母としての発達の構造図

支援開始頃の実母は、娘の甘えを全て受け入れ癒しを与え、自己を顧みずに無心に娘を助けていた。その母性性は玉谷が示す「包含する」（図 4-2）に似ている。娘が言葉で要求せずとも、実母が娘の要求を察し行動に

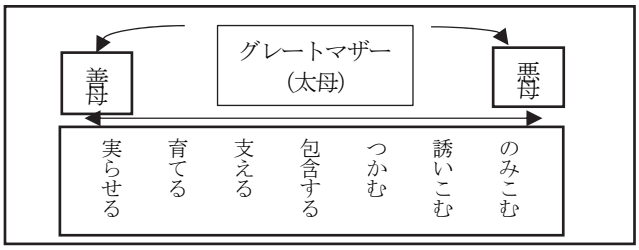

図 4-2　母性性の二面性　※玉谷直美（1985）女性の心の成熟.創元社.p80 による

移せることは、すなわち娘に関心を寄せ、配慮を示しているといえる。この時期の実母は、躾や規律を示す構造化よりも温かさや配慮を示す関与が強く表れていた。新道ら（1990）は、娘が児に愛情を注ぐためには重要他者からの温かな支援が必要であり、支援者である実母が娘よりも孫に関心が向いていると、娘が実母の支援を否定的に認識すると述べている。このことから、支援開始頃に娘に最も関心を寄せて、娘の甘えや気持ちを受け入れ、娘を尊重し、温かく見守るという実母の母性性なくしては、娘は児に関心を向け、母親として成長することができない。また、そのような実母の関わり方が産後において親子間で起こりやすい強い緊張や葛藤（小林,2010）を回避し、娘の産後の心身の回復を促し、娘の育児への集中を助け、母親役割を獲得することを支えている。実母が自己を顧みず無心に助けるこの時期の実母の母性性によって娘が母親として成長することができる。実母が娘に関与を強く示し続ける関りは、母親がわが子に示す関与と構造化の 2 つの次元から構成される関わり方とは異なる。祖母が孫に関わるときの関わり方（氏家他,2011）と類似している。過去に母親として娘に対し、長期にわたり関与だけ示すことがあっただろうか。わが子でありながら関与のみを示し続ける実母の産後の娘に対する関わり方には興味深いものがある。

実母の温かな関わりは娘との関係性のみならず、現在の後期高齢者となり介護している自分の母親との関係性にも影響を与えていた。実母は娘を無心に助ける中で、実母は過去の自分の産後で同じように実母から助けられたことを思い出す。その温かな記憶が自分の母親を介護する上で、恩返しする気持ちを引き出し、母親の介護に対する負担感が軽減されていた。

このことから、実母が娘の産後支援に関わることは、実母とその母親との関係性においても有益な結果をもたらすといえる。

実母は娘の成長を実感すると、母娘関係を再構築する。これまでの自己を顧みず無心に助ける時期から、無理せずに支え自立を支援する時期へ変化する。娘の成長を認知すると、徐々に実母の母性性は関与よりも躾や制約といった構造化を強めていく。河合ら（1997）が母性について、母性は全てのものを良きにつけ悪しきにつけ包み込み、無条件の受容、これが母としての原点であると述べている。水本（2010）は、現代の娘は実母世代の青年期から成人期への移行期と比較して実母との親密性を増しており、その親密性により依存性を高め、実母もまたそのような娘に対し友だちのように関わる相互依存的な横並びの関係であることを指摘している。長鶴（2006）もまた、実母による産後支援は、娘と実母との親密性と、娘の依存性を高めることを明らかにしている。親密性を増した産後においては、実母の母性性が時には娘の母親としての自立を妨げる恐れがある。産後1か月過ぎた頃には、娘を自宅での自立した生活へと導いていかなければならないため、どのように娘の依存を切り離していくか、実母の支援の有り方が問われる。産後支援が終了する頃、自立する娘に寂しさを感じ、長期にわたり里帰り期間を延長し、娘を誘いこむような悪しき母性性が強く表現されると、娘の母親としての発達や、娘の夫婦関係を阻害しかねない。実母が娘との距離をとり、娘を自立した母親として育つことを助けることができれば、小林（2010）や中村（2014）が明らかにしたように、実母と娘は大人同士の新たな関係構築へと発展する。そのことが、実母が祖母である自己を快く捉えることに繋がる。支援終了頃に体験する寂しさを実母が乗り越え子離れすることが、実母が祖母へと発達する重要な課題といえる。

支援終了頃の実母は娘家族の自立を促しつつ、いざという時のために【逃げ場の提供】をしていた。服部（2010）は、独立した子どもたちが保

護や非難を求めて戻ってきたときに、母港となる役割を持つことを、祖母の生涯発達の課題の一つとして挙げている。娘の産後支援を通じて、娘家族の支援と個としての人生を両立させていくという祖母としての新たな生き方に気づき（中村,2014)、これまでの自分を立て直し、実母は祖母としての発達を遂げると考えられた。

以上、実母が娘の産後支援を開始した頃は、その母性性は包みこむような関与を強く示し、次第に自立を促し構造化を強める。しかし、終盤になると娘の自立と依存、すなわち関与と構造化のバランスを取る。家族のために自己を役立てることと、家族とは切り離した個人の楽しみを見出すこととのバランスをとろうとする。このバランスをとれることこそが、服部（2010）が述べる子育てを中心に生きてきた中高年女性の発達課題を成し遂げたことになる。そのように、母親が子育てを通して母親としての発達を遂げるように、実母は自らの子育てから、母育てへ、さらに孫育てへと変化させ祖母役割を自覚し祖母としての自己を肯定的に捉えるようになり、祖母として発達すると考えられた。

一方、実母の世代性は、娘が独自の育児方法を見出す時期に直接的な支援を示す。中高年女性の子育て参加と心理的健康との関連について研究した宮中（1995）によると、積極的に「直接的」「社会文化的」な子育てに参加している祖母は心理的に満足していることを明らかにしている。娘が病院で習った育児方法が我が子に応じなくなり、新生児に特徴的な泣きのピークに向かうと、実母はこれまでの育児経験から得た『助言や手本を示し自分の育児を再現』させながら、娘と『一緒に試行錯誤する』。娘は実母に育児方法の選択肢を広げられるような助言や、育児の手本を示すことを望んでおり、実母はそれに応じるように、これまで培ってきた世代性を娘の育児を尊重しながら一歩引いた立場から最大限に発揮させていた。娘が我が子に応じた独自の育児方法を見出すことに役立てたことは、祖母と

しての自信となり、そのことは祖母であることを快く思うことに関連する。深瀬ら（2010）によると、祖父母世代の世代継承性は、育児期の家庭内世代継承性への没頭すなわち直接的世代継承性とは異なり、一歩引いた立場に徹し、一歩引いた役割から残す、守る、案ずるといった祖父母的世代性が特徴であるとし、直接的世代継承性に祖父母的世代継承性が加わることで質的幅が広がることを明らかにしている。実母が産後支援において、世代性、すなわち次世代のために育児の知識や技術を伝達し、それを見守る、案ずる態度で伝達するようになることは、深瀬ら（2010）の述べる実母世代の世代性が変容することと一致し、実母の世代性が祖母としての世代性へと発達したと考えられた。

このようにして実母が母性性と世代性を、娘の母親役割獲得過程に合わせて変容、関連させながら発揮させ、その結果、娘が母親として成長できると、祖母役割を自覚し、祖母である自分を快く捉えられる。祖母として発達するには、実母が娘の母親として成長した姿を見ること、気づくことが、実母の祖母として発達するための鍵となると考えられた。

以上のことから、本研究では、実母の持つ母性性と世代性は徐々に発達し、実母が自らの母親役割を終えた後、新たな祖母役割へと発達すると考えた。心理学者ユングの考えによると、人生を 4 つの時期に分け、40 歳を人生の正午とし、その後、徐々に弧を描きながら衰退するとしている（図 4-3）。平均寿命が 90 歳へと延命した現代においては、中年期以降衰退すると捉えるよりも、生涯発達し続けると捉え、他者を育てるとともに実母自身も育つと捉えることが相応しいと考えた。

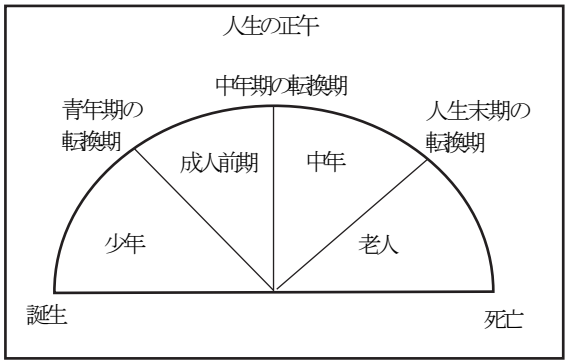

図4-3　中年期以降衰退するライフサイクル

※ 高木鉄平（2018）ユングのライフサイクル論参照

第2節　実母の祖母としての発達を促すための支援

第２節では、実母が祖母として発達することを促すための、実母と社会全体に対する支援、および本研究の成果を述べる。

実母に対する支援について、まず一つには、実母が娘の産後支援を行うことには、娘を母親として成長することを助けることと、実母自身が祖母として発達するという意味があることを理解したうえで娘の産後支援に臨めるように支援することである。実母が娘の産後 1 ヵ月間を支援する動機は、古くからの日本の慣習として娘の母親として当然行うべき義務と捉え、娘と実母自身に意義を見出さないまま行っているのが現状である（柳川,2002）。本研究においても、実母は娘の親として当然行うべきこととして支援をしていた。しかし、実母が娘の産後支援をすることには、娘が母親役割を獲得することを助けることや、実母自身がこれまでの娘との関係性を捉えなおし、娘の母親としての女性とは異なる祖母としての自己を発達させる意味があった。そのことを実母が理解したうえで支援できるように支えることが重要である。そのことは、娘の産後支援に対する義務感（柳川,2002）や役割葛藤（井関他,2013）を緩和し、実母の心身の健康を促すと考える。実母自身が娘の産後を支援する過程で、実母自身の成長を自覚することが、実母の心身の健康に繋がると考える。

二つには、実母が娘の母親役割獲得状況に合わせて育児の助言や手本を示すことができるように支援することである。田渕ら（2011）によると、近年では、世代性は高齢期においても重要な発達課題とされており、世代性行動と発達は、高齢者の心理的な健康を高めることが報告されている。そのことから、娘の産後支援は、実母の役割喪失を復活させ、心の満足を高めることが期待できる。また、初めて母親となる娘は実母の助言や育児モデルを求めており、実母もまた、子育て支援において家事支援よりも育児相談や助言することを望んでいる。しかし、実際には、娘との育児観の相違や責任が取れないことを理由に、育児支援を消極的に捉え、差し障り

のない家事支援や経済的支援を行い、娘との間に生じる葛藤を回避していることが報告されている（岡津他,2011）。この支援の現状は娘と実母双方の希求に応じていない。適切な助言により娘から頼りにされると祖母の自己評価が高まることや、祖母自身にやりがいと幸福感をもたらされ、心の健康に良い影響を与えるため、実母が娘の母親役割獲得過程で希求する支援に応じながら育児支援に関わることは重要である。そこで、従来の見守り役を推奨する実母教育プログラムに変えて、娘の母親役割獲得過程を理解し、その過程に対応した支援ができる新しい教育プログラムが好ましいと考える。必要時に、実母が持つ世代性を発揮させることは、孫と楽しい時間を持てることや、娘が母親らしくなったと感じられ、実母が祖母としての自己を快く思うことに繋がり、世代性を発揮することが、必ずしも娘の自立を阻害するわけではなかった。娘が専門家から教えられたこれまでの方法では上手く我が子の泣きに対応できなくなる時期には、実母の持つ世代性が役に立つ。娘と一緒に娘と児に適した方法を見出すことを推奨することが、実母の祖母としての発達を促すと考える。

三つには、実母が娘の自立を導く支援ができるように支えることである。実母が娘を母親として成長することを支えることよりも、役割復活に喜びが勝り、娘の育児にとって代わることが無いように留意しながら支援するように伝えることが重要である。娘の育児の肩代わりが続くと、娘は母親としての成長が遅れ、いつまでも依存が抜けないようになる。そのことは、後の娘と実母を苦しめる結果となる。また、先に述べたように、母性性は二面性を持ち合わせ、母親世代をのみこむ悪母としての母性性を示すことがある。母親世代を支え、新しい家族を自立した一つの家族として育てるように母性性を発揮する必要があり、実母自身がそのことに気づき自覚して支援にあたらなければならない。岡堂（1999）が、健全な家族の条件の第 1 に夫婦の連合、第 2 に世代境界の確立をあげているように、実母が子どもの巣立ちで生じる寂しさを乗り越え、子離れを体験し、母娘関係よ

りも夫婦関係の結びつきを強固にし、母娘関係を夫婦関係と分けなければ、お互いの健全な家族を形成できない。支援中盤に差し掛かり、実母が家族に支援協力を求め、娘との親密性を解き放つことで、実母もまた祖母として発達する。実母が娘の自立を促す支援態度へと変化する分岐点を上手く引き出すことができるように、実母教育で示すことが重要な実母への支援である。

以上、三つの内容を、現在行われている祖母学級に含ませ、広く社会に広めることが期待される。

次に、実母が祖母として発達することを促すための社会全体における支援について述べる。本研究において、娘が産後支援を実母に頼る理由には、幼少期からの娘の性格を踏まえて関わることや母娘関係を考えるなど、実母にしか出来ない娘に対する新たな関わり方がみられ、母親となる娘が母親役割を獲得するうえで、実母は重要な役割を果たしていることが見いだされた。このように実母は重要な支援源であるにもかかわらず、現状では実母に対する支援が手薄であると考える。実母が産後の支援を行い易い環境を整えることが重要である。近年では中高年女性の社会進出も見られ、就労と支援の両立を強いられる実母も少なくない。実母が健康不安を抱くことが無く、十分に娘の産後支援ができるために、産後支援休暇制度の導入を強く期待する。その他、実母には支援における苦労や娘が自立する寂しさを、実母同士で共有できる場の提供も必要であると考える。

青山ら（2014）は、近年の出産年齢の上昇により両親もまた高齢化し、母親の中には身体的回復に不安を感じているにも関わらず、サポートを得られにくいことを指摘している。母親の産後支援を血縁者だけに頼ることには限界があり、産後支援を地域社会全体で取り組んでいくことを考えることも重要である。丸島ら（2007）の研究では、中高年者の主観的幸福感と世代性との間に正の相関が認められ、田渕ら（2014）の研究においても、世代性の向上は若年世代に対する支援行動や、地域貢献に関わる行動に影

響し，中高年者の心理的健康の向上に繋がることを報告している。また、大竹（2004）も同様に、女性のソーシャルサポートは男性と異なりその範囲が狭いが、そのぶん密着した質的な関係がソーシャルサポートとして重要だと述べている。これら多くの研究者たちが明らかにしているように、中高年女性が親とは異なる祖母としての母性性・世代性を次世代に対して発揮することは、自己を肯定的に捉え心理的健康に繋がる（丸島他，2007；田渕他，2014；大竹，2004）。これらのことから、中高年女性の心身の健康と生涯発達を得る機会として産後支援を社会全体で取り組むことが望ましいと考える。

本研究の成果は、日本の特有の文化として江戸時代から続く実母による娘の産後支援を、女性の生涯発達の視点から問い直したことにある。出産した娘の実母として当然行うべきこととして捉える産後支援に、実母が母性性と世代性を変化、影響させながら発揮させ、祖母として発達するという価値を見出すことができた。産後支援における中高年女性の心身の健康や生涯発達への在り方と教育方法を示唆すると共に、超少子高齢社会がもたらす課題解決の一つに貢献できた。

おわりに

本研究では、娘の産後支援を支援する実母の母性性・世代性に関する研究に取り組んだ。本研究により、実母は、自らが持つ母性性と世代性を変化、影響しながら発揮させ、娘の母親役割獲得を支えていることが明らかにされた。その支援過程で、実母自身が祖母として発達することが明らかにされた。それらを踏まえながら、実母教育を再考する必要がある。実母が祖母として発達するための鍵は、娘の母親らしい成長を実感することであった。江戸時代から続く日本特有の里帰り形態による産後支援は、実母が娘と生活を昼夜共にし、娘の成長に気づくことを容易にする。里帰り支援にはこのような良さがあることを心に留めておきたい。

また、近年の超少子高齢社会においては、中高年女性が産後支援で母性性・世代性を発揮させることは、母となる娘の一時避難的場所の確保と担い手で終わるだけでなく、女性として発達することを刺激し、豊かに女性として老いる意味を示す。そのことは、次世代への良きモデルにもなる。中高年女性が地域における育児を支援するにあたり、フィンランドのネウボラにみるような同一の女性が妊娠期から育児期まで継続して母親世代を支援する例は、里帰り文化が継承されている日本においてはさほど困難なことではない。妊娠期から育児期まで同一の支援者に支援された母親世代は満足度が高いばかりではなく、支援も向上するといわれている（横山他，2018）。祖母世代と母親世代がお互いに質的な関係性を深めることが中高年女性の心の健康にも役立つと考える。そのことを実現可能にするために、祖母を中心に行われている従来の祖母学級の対象者を、産後の支援を希望する中高年女性へと広げ、祖母世代の生涯発達の視点に立ち支援したい。そのようにして、祖母世代全ての中高年女性が生涯発達し続けることを期待する。

本研究においては、研究参加者を実母に限定していたため、全ての中高

年女性にあてはめることはできない。今後は義母を含め育児経験を持つ中高年女性を対象に、母性性、世代性、祖母としての発達についてさらに研究をすすめたい。

第４章　引用文献

・青山裕美、鈴木真奈美（2014）当院における院内産後入院システム開設までの取り組み．母性衛生 55(3)，179.

・深瀬裕子，岡本裕子（2010）．中年期から老年期に至る世代継承性の変容．広島大学院教育研究科紀要，第三部，第 59 号，145-152.

・服部祥子（2010）．生涯人間発達論―人間の深い理解と愛情を育むために　第２版―．医学書院．161-176.

・井関敦子，南田智子，大橋一友(2013)．里帰り分娩を行った娘に対する実母の支援姿勢と支援を通じて体験した思い.母性衛生,54(1)p191 - 199.

・柏木惠子，若松素子（1994）.「親となる」ことによる人格発達：生涯発達視点から親を研究する試み．発達心理学研究，５，72-83.

・河合隼雄，藤田統，小嶋謙四郎（1997）．どう考えるか－母なるもの－．二玄社．164-168.

・厚生労働統計協会（2017）．厚生の指標　増刊　国民衛生の動向 2017/2018．64（9）.

・小林由希子，陳省仁（2008）．出産に関わる里帰りと養育性形成．北海道大学大学院教育学研究紀要，106，119-134.

・小林由希子（2010）．出産に関わる里帰りと養育性形成－里帰り慣行の実態と子育て支援初期の問題－．母性衛生，51(3)，146.

・久保恭子，刀根洋子，及川裕子（2008）．わが国における祖母の育児支援－祖母性と祖母力－．母性衛生，49（2），303-311.

・丸島令子，有光興記（2007）．世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性、妥当性の検討．心理学研究，78（3），303-309.

・宮中公子（1995）中高年女性（祖母）の子育て参加の実態と心理的健康との関連について．老年社会学．17（1），21－29

・水本深喜(2010). 青年期から成人期への移行期における母娘関係の世代間変化と世代間伝達. 家族心理学研究, 24(2), 103－115.
・森田せつこ（2002). 里帰り出産における夫婦の里方との関係. 愛知母性衛生学会誌, 第 20 号, 15-23.
・中村敦子（2014). 娘の産後里帰りを引き受けた実母の体験. 日本助産学会誌、28（2). 239-249.
・長鶴美佐子（2006). 周産期の実母との関係性が産褥 1 ヶ月の褥婦のメンタルヘルスに及ぼす影響. 母性衛生, 46（4), 550－559.
・内閣府(2014) 平成 26 年度 高齢者の日常生活に関する意識調査結果（全体版）
http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h26/sougou/zentai/index.html 2018.9.21 閲覧.
・岡堂哲夫編（1999). 家族心理学入門 補訂版, 培風館.
・岡本祐子（2010). 成人発達臨床心理ハンドブック 個と関係性からライフサイクルを見る. ナカニシヤ出版.
・岡津愛子, 藤井朝代, 山口美里（2011). 祖母の育児支援の実態ー妊婦が望む育児支援との比較ー. 香川母性衛生学会誌, 11（1), 45-49.
・大竹恵子（2004）.女性の健康心理学.ナカニシヤ出版.第 9 章 社会における女性の健康とウェルビーング.115-129.
・新道幸惠, 和田サヨ子（1990). 母性の心理社会的側面と看護ケア. 医学書院.
・田渕恵, 中川威, 石岡良子, 権藤恭之(2011). 高齢者の世代性及び世代性行動と心理的 Well-being との関連 若年者からのフィードバックに着目して. 老年社会科学, 33(2), 329.
・田渕恵, 権藤恭之, 中川威, 増井幸惠, 小川まどか, 石岡良子, 神出計, 池邉一典, 新井康通, 石崎達郎, 高橋龍太郎（2014). 年齢差・性差・地域差から見る高齢者の世代性（Generativity)－SONIC 研究 70 歳,

80 歳、90 歳調査から－．老年社会科学，36(2)．230.
・高木鉄平（2018)．生涯発達理論ユング、エリクソン、レビンソン、スーパー４人の違い．https://mental-coaching.jp/　2018.10.30 閲覧．
・玉谷直美（1985)．女性の心の成熟．創元社，80，125-126.
・陳省仁（2000)．里帰りは日本社会の知恵，アムラック「新心理学がわかる」朝日新聞社，58，15-17.
・氏家達夫，高濱裕子（2011)．親子関係の生涯発達心理学．風間書房．1-139.
・柳川真理(2002)．娘の妊娠・出産に対する実母の援助行動.香川母性衛生学会誌.2(1)，50-57.
・横山美江，Hakuline Tuovi(2018)．フィンランドのネウボラに学ぶ　母子保健のメッソッド～子育て包括支援センターのこれから～．医歯薬出版株式会社．19-21.

謝辞

本研究において、ご自宅で 2 回のインタビューに快く応じてくださいました 13 組の実母とその娘様、また、実母教育プログラムに御参加いただき、3 回のアンケートにご協力くださいました皆様に心より感謝申し上げます。皆様からは、産後の娘を支える母親の深い愛情と、祖母になることのすばらしさを感じることができました。皆様から、実母教育プログラムの継続を願う声や研究への励ましをいただきましたことを心より感謝申し上げます。

また、研究の主旨をご理解頂き、快く承諾くださいました研究協力施設の病院長様、看護部長様、看護副部長様、看護科長様に心よりお礼を申し上げます。看護科長様には、御多忙中にも関わらず、研究参加者の御紹介や、実母教育プログラム開催の準備と後片付けをご協力いただきましたことを深く感謝申し上げます。

本研究を進めるにあたり、常に温かくご指導いただきました主指導教員田中マキ子教授に心から深く感謝申し上げます。先生には、論理的な思考や研究に取り組む姿勢を教えていただきました。研究が社会にどのように貢献するのか、その意義について熟考することを教えて頂きました。暗中模索する私に道標を与えてくださり、前向きに取り組むための励みを頂きました。博士論文を作成するにあたり、具体的な修正点をご助言いただきました人見英里教授、上白木悦子教授に深く感謝申し上げます。今後は、さらに研究を深め、祖母世代の女性の豊かな人生に貢献できるよう努力する所存です。

最後に、私の研究を温かく見守ってくださいました日本赤十字広島看護大学の職員の皆様に深く感謝申し上げます。

娘を対象とした 29 文献

	文献	研究目的	研究対象者	内容
1	島田三恵(2001).産後1か月間の母子の心配事と子育てニーズに関する全国調査. 小児保健研究, 60(5), pp671-679.	全国調査により産後1か月間の母子の心配事と子育てニーズを明らかにすること	産褥 1 カ月の母親	母親の心配事は、睡眠不足による疲労感、乳房トラブル、育児放棄感や自信喪失感、夫や家族の協力が得られないこと、乳児の皮膚、母乳保育、児の不眠は初産婦に多かった。退院先は 60%が実家で 1999 年と変わっていない。産後の家事育児を手伝う夫が減っており、親の役割が増加した。無職でも利用できる一時預かり保育 37%や父親の柔軟な勤務時間を 36%の母親が望み、97%の褥婦が家事育児の支援を受けていた。
2	森田せつ子(2002).里帰り出産における夫婦の里方との関係, 愛知県母性衛生学会, 20, pp. 15-23	一地域における里帰り出産の実態を把握すること	里帰りした母親	里帰り分娩の頻度は 90.6%であり、97.3%が妻方への里帰りである。里帰りの決定は妻である。滞在期間は半数が 30～39 日。生家からのサポートは産後 1 年を経過した現在でも 81%にみられる。サポートの主体は実母である。居住地に戻ってから家事負担 33%、夫との気持ちのつながりに不安を 21%が感じている。80%が肯定的に受け止めている。里帰りの理由は「実家は人手が有り休養がとれる」「精神的に安心」が其々30%を占めていた。
3	柳川真理(2003a).周産期保健指導に関する一考察. 香川母性衛生学会誌, 3(1), pp32-44.	娘が実母、義母の援助をどのように評価しているか、祖父母学級の必要性の有無とその理由から、どのような援助を必要としているかを明らかにすること	入院中の褥婦	祖父母学級が必要である理由は、現在の出産育児法の知識習得、育児法の相違に伴う戸惑い、実母同士のピアカウンセリング効果、現在の育児法との適応性への疑問であった。 これからの包括的保健指導は①最近の妊娠・出産・子育てについての情報提供・収集・交換の場 ②祖父母同士でのコミュニケーションを通した仲間意識の育成と横の情報伝達の場 ③妊婦・夫と祖父母間での妊娠出産子育てについてのディスカッションの場が必要。娘の育児観に影響する要因に実母が上位。母親は育児について自分の考えを優先するもの実母と話しあうものと実母に従うものがいた。モデルとして助言できると娘が母親役割に自信が持てるのではないかと考えられるが、研究されていない。
4	柳川真理(2003b).妊娠から産後 1 ヵ月の援助と二者関係－実母と義母の比較を中心に－香川医科大学看護雑誌, 第 7 巻第 1 号、109－118.	妊娠から産後 1 ヵ月までの期間の実母と義母の援助内容とその程度、二者関係について、娘から明らかにすること	入院中の初産婦と経産婦	産後の援助内容は、家事の手伝い、上の子の世話、育児用品おもちゃのプレゼント、授乳の手伝い、オムツ交換、抱っこあやす、臍の消毒、不安や悩みの相談に乗ってくれる、話しに耳を傾け、気持ちを分かってくれる、ねぎらい励まし労わりの言葉をかけてくれるであった。妊娠出産において実母との精神的距離が縮まった。妊娠出産育児で 1 番頼りにしたのは実母で親密性は強まる。実母を頼りにし援助を期待していた。意図的に娘と実母の世代間での交流を含めた援助が母親役割の獲得に必要である。
5	大賀明子他 2005).周産期における生活実態からみた「里帰り出産」. 母性衛生, 45(4), pp423－431.	周産期における生活状況を捉え、その生活状況から現代の里帰り出産の実態を明らかにすること	東京近郊に住む乳幼児の父母	出産前に自宅を離れた妊婦の 92.0%、出産後自宅以外に退院した褥婦の 95.7%は妻の実家で生活していた。出産前後の生活サポート担い手は 81.8%が実母であった。父親の 21.9%は分娩前から、28.1%は出産後から母子と別れた生活をしていた。自宅に戻った日数の平均は 32.9 日 里帰り期間最短 5 日から最長 140 日であった。親役割獲得の上では新たな社会問題が潜在する可能性があり、実家に戻れば実母にとっては娘である。母親という新しい役割獲得においては、妻という役割を放棄し、娘に戻ってしまうことは、役割移行の上でマイナス要因となる可能性がある。
6	鵜山愛子他(2005).産後1カ月の母親が必要としているソーシャル・サポートの検討. 日本ウーマンズヘルス学会誌, 4 巻, pp 19－31.	産後1ヵ月の母親が受けるソーシャルサポート内容と、サポートに対する思いを明らかにし、必要な支援を検討すること	正常分娩をした初産婦	産後 1 カ月の母親が必要としているソーシャルサポートは、日常生活への手助け、人からの情報、人とのつながり、自分への理解という 4 つのカテゴリーが抽出された。産後 1 カ月はソーシャルサポートを利用しながら、自分が思い描いてきた自分の育児方法を完成させ、実現させていく重要な時期であることが示唆された。産後 1 カ月こそ十分な支援を行う必要性がある。産後 1 カ月の育児は夫や実母をはじめとする周囲の人との関わりにより行われており、周囲の人物の自分への理解は最も重要な援助であった。
7	小林康江(2006).産後1か月の母親が「できる」と思える子育ての体験. 母性衛生, 47(1), pp117-124.	母親が自ら「できる」と思える子育ての体験を記述すること	産褥 1 か月の初産婦	できるには「自分の努力と導きから実母と同じように世話ができること」「成長していないながらも母親になっている私」「試行錯誤と家族看護者の支援によって効果を実感する」などであった。できると思える子育ての体験がある母親は、愛着形成、母親の自信、満足感、良好な体調であった。できると思える体験がない母親は、「こだわりを持ち続けること」「子育てと生活をコントロールしたい」「私を嫌う子ども、頑張りが足りない、取り残される私」「思うようにならない子ども」と捉えていた。
8	榮玲子(2006).産後1か月の育児協力者別にみた褥婦の乳児への愛着と母親としての意識. 母性衛生, 47(1), pp81-88.	産後 1 ヵ月における育児協力者と育児協力者別における褥婦の乳児への愛着や母親としての意識との関連を明らかにすること	褥婦	育児協力者が、実母や義母の場合、夫の場合と比較して乳児への愛着得点が有意に高い結果であった。夫が育児協力者の場合は「子供よりも自分のことに関心がある」が高かった。母親としての意識では、実母が育児協力者の場合「母親として活動しているときが自分らしい」など、母親としての肯定的な意識が高かった。夫や義母の場合では、「子どもがいるため自分の思い通りにできない」など制約感や負担感に関する意識が高かった。
9	白井瑞子他 2006).母のサポートに対する娘(第1子育児早期)の認識と依存性の関連. 香川母性衛生学会誌, 6(1), 29-36.	実母のサポートをどのように認識しているかを明らかにすること	産後 1 ヵ月の褥婦	娘の認識において肯定的に捉えた母のサポート内容は、献身的に家事・育児を援助する、昔の話を持ち出さない、母ができなかった母乳育児をできるように助ける、娘の行動を見守る、支持するであった。両価的にとらえたことは、思い付きで行動する、行動に一貫性がない、自分の考えを押し付ける、娘の行動を指示する、昔のやり方をさせようとする。否定的に捉えたことは、育児技術が信頼できない、口は出すが手助けをしない、頼んだことは手足のようにしてくれる、相談相手にならない。母のサポートの娘の認識は手助け、見守る、支持により母親としての役割受容が肯定的適応レベルに達し、思いつきで行動する、指示的に考えを押し付けると役割移行を困難にさせる。依存様式は、否定的認識において、実母が娘より新生児に関心が向いている場合である。

10	長鶴美佐子(2006).周産期の実母との関係性が産褥 1 ヶ月の褥婦のメンタルヘルスに及ぼす影響. 母性衛生, 46(4), pp550－559.	実母の支援と母娘関係およびこの関係性と産褥 1 ヵ月の褥婦の心理的適応との関連について検討すること	妊娠末期と産褥 1 ヶ月の母親	実母の支援は妊娠末期、産褥 1 ヶ月時の母娘関係の親密性と依存性に影響を及ぼし、親密性は不安や抑うつに負の影響を、依存性は負の影及ぼしていた。 妊娠期から産褥期における母娘関係は、実母の支援により規定され、産褥 1 ヵ月の褥婦の心理的適応に影響を与えることが示唆された。
11	南貴子(2006).育児初期の母親の育児支援の在り方に関する検討「産後の里帰り」経験に焦点をあてて. 日本家政学会誌. ,57(12), pp807－817.	里帰り中と後の家族の生活実態および母親の育児に対する両価的な感情と里帰りとの関連、母親の認知する家族と里帰りとサポートの質と量との関連を明らかにすること	0～4 歳未満児の母親	里帰りの期間が 3 週間以内は 19.4%、3 週間以上は 76.1%であった。実母が家事を担っていた。里帰りが育児に専念できる一定の時間や空間を提供していた。里帰りの意義は「手助けをしてもらった」「心身ともに十分休息が出来た」「育児の方法を教えてもらってよかった」里帰り中の父親の生活場所は「ほとんど自宅にいた」が 88.1%「ほとんど毎日会いに行っていた」が 27.3%。母親の育児感情因子は「子どもを育てるのが楽しかった」などの育児有能感、「機嫌のよい子どもだと思った」などの子どもへの肯定感情と、「疲れやストレスが溜まっていらいらした」などの育児ストレス感を抱いていた。里帰り後の家事負担の増加が「育児の有能感」「子どもへの肯定的感情」に負の影響を及ぼしていた。
12	廣千晴他(2006).実母の母乳哺育援助による母親の母乳哺育への思いの変化. 日本看護学会論文集, 母性看護 37 号, 6-8.	実母の母乳哺育援助による母親の母乳哺育への思いの変化を明らかにすること	里帰り分娩を行った初産婦	産褥期は「母乳哺育行動で感じる不安」と「自分の母乳量に感じる満足感」など相反する思いを抱きながら、「実母から得られる育児に専念できる環境調整」のなかで実母からの援助を肯定的に受け止め「今の母乳哺育の受容」を行っており、「母乳哺育行動で感じる母親としての実感」を得て、「母乳哺育行動を通して確立していく母親としての自覚」を持つようになる。
13	前原邦江他(2007).乳児をもつ家族への育児支援プログラムの開発 出生後 1～3 カ月の母子を対象とした家族支援プログラムの評価. 千葉看護学会会誌, 13(2), 10－18.	出産後 1～3 か月の母子とその家族への育児プログラムを考案し、実施評価すること	出産後1～3 か月の母子と家族	個々の家族員(母親)への看護介入により、母親の育児対処の自信が高まり、子どもへの応答性が高まった。家族への関係性の看護介入により夫婦/両親間の役割調整と祖父母との協力関係の調整が行われ、母親の夫の役割満足が高まった。母親同士のピアサポートが形成され、近隣の子育ての支え合いの参加が増加した。
14	松永佳子(2008).産後 1 ヵ月の女性が受けたと認識しているサポートと希望するサポート. 東宝大学医学日看護学科紀要, 第 22 号, pp17-26.	産後 1 ヵ月間に女性が受けたと認識しているサポートと希望するサポートの実際を明らかにすること	産後 1 ヵ月健診時の褥婦	68.1%の褥婦が里帰りをして実父母のサポートを受けていた。里帰りという文化そのものを、現在においても育児支援の 1 つとして考えることができる。実際に受けたサポートは【実母からのサポート】実家で母親にミルクをあげたり、オムツを変えてもらったりした。家事や上の子の世話をしてもらった。沐浴の手伝い、育児のアドバイス。【同居している義母からのサポート】上の子の世話、家事全般であった。
15	鈴木由紀乃他(2009).産後 4 ヵ月の母親が母親としての自信を得るプロセス. 日本助産学会誌, 23(2), 251-260.	出産後から産後 4 ヵ月間の母親としての自信を得るプロセスを明らかにすること	産後 4 ヵ月の初めて育児をしている母親	【試行錯誤しながら自分と子どもに合った育児方法を確立する】【子どもの成長と自分の成長の実感を得る】【この子の母親であるという実感を得る】【育児優先の生活に家事を組み込み生活を新たに構える】【自分に確証を得るための拠り所を求める】が抽出された。それらは他者からの確証を得ることで支えられていた。子どもと関わるためのヒントを得るでは、一番身近な実母の支援を得て、子どもの要求を推測するための情報や、自分の困っていることに関する解決策についての情報や、実母など、経験のある人のやり方を模倣することで、子どもとの関わり方に役立てていた。
16	掛水恵他(2009).実母からの育児期の伝承における娘(母親)の育児観. 小児看護, 第 40 回, pp39－41.	実母からの育児期の伝承を受けた娘(母親)の新たな育児観を明らかにすること	乳児 0～6 歳い付き添いをしている実母がいる母親	「実母と同じように大事に育てていきたい」「実母を目標とする」「話すことが大事と思う」「ストレスと上手に付き合っていくことが大事と思う」「イライラせずに育てる」「過保護にしなくても良いと思う」「自分のやり方でやっていこうと思う」「育児が楽しいと思える」「成長が見られるので楽しい」「家で子どもと二人きりだと煮詰まったりする」「育児と仕事の両立で葛藤がある」「疎外感を感じる」があった。
17	渡部郁子他(2009).里帰り分娩の実態とソーシャルサポートの検討. 地域看護, 第 40 回, pp107-109.	里帰りの実態と、妊娠期から退院後のソーシャルサポートの現状とニードについて調査し、里帰りが出来なくなった場合の対策を検討すること	産後 1 カ月健診に来た褥婦	退院後の支援者は 96.6%が実母であった。実家に里帰りが出来なくなった場合に不安があるものは 95%であった。その場合の支援者は、夫が 63% 、義母 21%であった。里帰りが出来なくなった場合に望む支援対策は、医療施設の保健指導が 72.9%、次いで家庭訪問が 39.3%であった。
18	山口咲奈枝他(2009).産後1カ月の母親の育児に対する対処行動の実態及び対処行動と育児不安、ソーシャルサポートとの関連. 母性衛生, 50(1), pp141－147.	産後1ヵ月の母親の育児に対する対処行動の実態を把握し、対処行動と育児不安、ソーシャルサポートとの関係を明らかにすること	産後 1 カ月健診の母親	効果的な対処行動(積極的対処行動の得点が 7 点以上、消極的対処行動が 3 点以下)をとっている者が 68.8% で悪循環的対処行動をとっている者が 31.2%であった。対処行動が悪循環であるほど育児不安が強まり、育児不安が強いほど悪循環的対処行動をとるという結果が得られた。相談相手が多いほど、実母の手段的サポートの満足度が高いほど効果的対処行動をとりやすい事が明らかになった。
19	井関敦子他(2010). 実母からの授乳・育児支援の中で娘が体験した思いと、その思いに関係する要因, 母性衛生, 50(4), pp672-679.	実母から提供された授乳・育児支援のなかで娘が体験した思いと、その思いに関連する要因を明らかにし、実母を含めた授乳、育児支援のヒントを得ること	産後 1 ヵ月時の母親	肯定的な思いは、実母への依存、実母の育児能力を承認、自分の育児能力を自覚、精神的安全基地である実母、実母への全面的信頼と感謝、実母の人格と行動を承認すること。 否定的な思いは、一貫性のない助言、不適切な助言、母乳栄養の知識経験のなさ、昔の育児への実母のこだわり、実母のパワー、実母に対する批判的評価と反発、揺るがない信念、自尊心の低下、自分の育児能力を自覚、不全感、望むことをしてくれない実母、無神経な発言をする実母。 淡々とした思いは、低い依存性、順調な育児経過、育児の記憶があいまいな実

				母、頼りにならない母、実母との心理的距離、実母との対等な関係（母は私の手足、分身）であった。
20	小林由希子(2010).出産前後の里帰りにおける実母の援助と母子関係・母性性の発達.日本助産学会誌, 24(1), 28－39.	里帰りが子育て支援に果たしている役割や機能、今後の課題について検討すること	出産前後に里帰りを経験した初産婦と経産婦	里帰りの機能は①家事負担の軽減による産後の安静の確保・体調回復の促進 ②育児の負担感の軽減・新米母親となる娘の精神的支え ③母と娘の徒弟性関係の中で学ぶ育児・子育ての態度形成であった。問題点としては、①プライバシーが保てない②実母の過干渉③里帰り後に実母の援助が途切れることからくる不安④過去の親子の葛藤を想起するという問題点があった。葛藤は、時間と経験の語りを通して解決され、新たな親子の関係構築へと発展した。母娘関係とその変化は①母娘の新たな絆形成と新たな関係の構築 ②過去の体験の捉え直しによる親子関係の修復であった。里帰りは娘が母になり、母は祖母になる相互に新しい母親役割を獲得する縦走の母親の発達のプロセスにおける通過儀式の場となっているといえる。
21	久保恭子他（2012）. 出産前後の里帰りが父母関係、父性、夫婦関係に与える影響と支援方法. 小児保健研究, 71（3）, pp393-398.	出産前後の里帰りが父子関係、父性、夫婦関係に与える影響と父親への支援方法を明らかにすること	父親 妊娠期、産後4ヵ月、1年、2年	里帰り群の方が子どもが邪魔である、子どもが煩わしいなど、子どもに対する負の感情を持っていた。夫婦関係についても、妻との関係に満足している、妻との関係は安定しているにおいて、里帰り群が有意に低かった。
22	石田都乃（2012）.里帰りにおける初産婦褥婦の産後 1 ヵ月までの家族への思い. せいれい看護学会誌, 3(1), pp19-24.	実家での生活の中で、家族に対してどのような思いを抱いてい生活しているかを明らかにする	産後 1 ヵ月の褥婦で実家に帰省した初産婦	家族への思いは、実父母の育児支援に助けられている、家事支援に助けられている、実母の教えに納得、感情の表出と受け止めに助けられたと、実父母に負担を負わせたくない、育児方法の相違に不信感と隔たりがあるであった。
23	菅林直美他（2012）.褥婦のわが子の泣きに対する成功体験. 千葉看護学会誌, 18(2), pp1－8.	産後 1 ヵ月を経過した褥婦のわが子の泣きに対する成功体験を明らかにすること	産後に実母の支援を受けた母親	わが子の泣きに対する成功体験は「哺乳欲求の泣きを読み取り授乳できた」「眠さや甘えの欲求の泣きを読み取り応答することができた」「不快な泣きの理由がわかり、その排除や予防で応答することができた」「持続する泣きを読み取り、それに対する応答で泣き止んだ」などであり、新生児の甘え泣きの存在を知らなかった母親が、実母の助言で読み取りが促進された。実母を模倣して対応方法を試行していた。
24	中沢恵美子他（2013）.35 歳以上で初めて出産した女性の産後入院における母親としての経験. 日本母性看護学会誌 13(1), 17-24.	35 歳で初めて母親になった女性が、出産後から退院までに母親としてどのような経験をしたかを明らかにすること	高年 初産婦	産褥早期の看護は、①非公式段階への移行を見守り成功体験が得られるように支援すること、②家族による母親の自信を高めるような関わりを産褥早期から促すこと、③高齢ならではの大変さを受け止め今後の見通しを立てられるよう支援することであった。
25	出石万希子他（2014）.B 病院の産後ケア入院課題についての一考察 産後 4 か月までの母親の育児サポート状況の調査結果から. 聖泉看護研究, 3巻, p67－73.	産後 1 か月における産後ケア入院の課題について考察すること	産後 4 ヵ月～1 年未満の母親	産後 1 ヵ月までの支援を実母から受けている人は 82, 9%であった。 産後 1 ヵ月を過ぎるとサポート満足度が 2.9%から 17.1%に増加したことから、この時期のサポートの必要性がある。
26	水野祥子（2014）.産後早期支援における妊婦の予定と乳児を持つ母親の実態. 関東学院大学看護学会誌。1(2), 33－39.	予定している里帰りと実際に経験した里帰りを比較検討すること	妊婦および褥婦	里帰り分娩を予定している妊婦 37%、実際に里帰りをした乳児の母親は 44%、産後の主な支援者は実母が 80%義母 6%夫4%であった。実際に支援を受けた支援者は 81%が実母であり、支援を受けた期間は 4 週間未満 45%、4週間以上 50%であった。支援内容は炊飯 86%、掃除、洗濯 68%、買い物 52%、育児 50%、育児 31%であった。
27	前原邦江他（2015）.出産施設を退院後から産後1か月までに母親役割の自信が高まる要因-高年初産婦と 34 才以下初産婦を比較して-. 母性衛生, 56(2), pp264－272.	退院後から産後 1 ヵ月までに母親役割の自信が高まった要因を、高年初産婦と 34 才以下の初産婦それぞれ明らかに比較すること	高年初産婦と 34 才以下の初産婦	母親役割の自信につながる要因は、出産体験に満足している、手段的、情緒的、情報的サポートに満足していることである。自信と低い関連があったものは、混合人工乳、夫との役割分担の話し合いが十分でない、児の授乳から寝かしつけ時間が長い、褥婦の夜間睡眠時間が短い、日常生活で無理をしているであった。高年群では、手段的サポートに満足していると高く、既往歴があると低くなる。34 才以下では、頑張りを認める評価的サポートに満足していると高い。関連していない要因は、婚姻状況、経済的不安の有無、帝王切開か否か、人工分娩か否か、GDM の有無、早産か否か、低出生体重児か否か、産後の貧血の有無、産後の高血圧の有無、退院後の児の受診の有無であった。
28	塚田みちる（2015）.乳児の情動の調整における＜調整する－される＞という関係の検討 生後半年間における三世代の関わりをめぐって. 神戸女子短期大学論攷, 60巻 17－31.	乳児の情動を調整する有り様を 3 者の関係の視点で検討すること	出産後に里帰りをして第一子を子育て中の母親乳児祖母	①子どもの機嫌のよさが、母親と祖母の働きかけで増した。②子どもがなかなか寝かしつけられない母親の対応を示した。祖母に見守られるとゆとりを持てるようになりゆったりと寝かしつけられることができた。
29	峰崎香奈他（2016）.産後 1 カ月間の母親と祖父母の育児観の相違 祖父母への育児支援教育は必要か. 栃木県母性衛生学会雑誌, とちぼ 42号, 21-29.	産後 1 ヵ月間の育児において母親が感じた実父母・義父母向けの育児支援教育に対する母親のニーズを明らかにすること	産後 1 ヵ月の母親	産後 1 ヵ月間の滞在先は実家が 68%。育児観に最も影響した人物は実母が最も多く 38%であり、次いで夫 16%であった。育児観の相違を感じたは実母で 45%が最も多く、次いで義母 44%であった。相違を感じた内容は,「新生児のケア」「産後の生活」「授乳」「家族役割」であった。祖母世代への情報提供はとても必要だと思うが 28%、まあまあ思うが 44%であった。

実母を対象とした 15 文献

	文献	研究目的	研究対象者	研究結果の概要
1	松下キヨ子他（1992).産褥1カ月間の褥婦の心配事と，実母の援助との関係―実母の援助態度別分析－. 日本助産学会誌，6(1)pp31-37.	出産後の援助者が実母である場合の産褥 1 カ月の褥婦の心配事と実母の育児に関する援助態度と褥婦の心配事の関係を明らかにすること	初産婦とその実母	実母に対し、育児経験の有無、援助しようと考えている内容、母親をどのように評価しているかを質問した結果、実母のタイプは、「見守るタイプ（育児支援の経験があった・褥婦が育児書を参考程度と捉えていた・心配事が最も少ない・）、「任せるタイプ」「もめるタイプ」」の3つのタイプに分類できた。見守るタイプの実母の褥婦は「育児とはこのようなものだろう」と捉えており、実母の援助で心配事を解消できていた。経験に裏打ちされていない実母の知識を母親は信用できず、知識のみが不安を軽減させることにはならないことが明らかにされた。
2	柳川真理(2002).娘の妊娠・出産に対する実母の援助行動.香川母性衛生学会誌.2(1), 50-57.	娘の妊娠出産育児に対する実母の援助行動について明らかにする	産後 1 ヵ月健診頃の実母	娘の妊娠出産育児に対する実母の援助行動について調査した。「母親として祖母としての義務」「孫可愛さ」から援助を行っていた。娘のやり方に戸惑いを感じつつも娘の意見に合わせる態度をとっていた。「家事」「赤ちゃんの世話」「上の子の世話」「共感」「言葉かけ」は行うが「不安や悩みの相談に乗る」といった援助は少なく、助言者として十分な役割を果たしているとは言い難い。自分の体験を基に援助を行っていた。当時の産後の保健指導はなかったは約 5 割であった。
3	三田奈津子他（2009）.母乳育児にむけて　実母への介入についての検討. 日本看護学会論文集. 39号，9－11.	褥婦の母親の母乳に対するイメージや思いなどを明らかにすること	産後 1 ヵ月健診に来院した実母	母乳のみで育てたものは 1 名のみで、3名は母乳と人工乳の経験があり、1名は混合で育てていていた。人工乳に対して否定的なものもいた。
4	右田温美他（2010）.祖父母の母乳育児に対する意識に関する研究　祖父母学級受講の有無による比較．ペリネイタルケア,29(8), 808-815.	祖父母学級受講後の母乳育児に対する意識の違いを明らかにすること	祖父母学級を受講した祖母と生後 1～3 未満までの孫を持つ実母と義母	祖母が協力していることは受講の有無では差は見られなかった。「家事」「育児」が多くその他は「相談にのる」「助言する」であった。 受講により理解が深まったことは「昔と今との違い」「泣いているときには抱っこしてよい」「母乳の素晴らしさや大切さ」「母乳は欲しがるだけ与えてよい」「水分補給は必要なく母乳だけでよい」などであった。
5	岡津愛子他（2011）.祖母の育児支援の実態―妊婦が望む育児支援との比較―. 香川母性衛生学会誌，11(1)45-49.	祖母の育児支援の実態を明らかにすること	妊婦と褥婦の実母義母	仕事を以外の時間に出来るだけ手伝ってやりたい、要求があれば出来るだけ対応したいと思って支援している。妊婦が望む産褥期の育児支援は、子育て相談や困った時の対応などの間接的支援である。祖母も新生児の世話などの直接的支援よりも間接的支援をしたいと考えている。しかし実際には家事協力支援が最も多かった。入院中に祖母も含めた退院指導や育児情報の提供が必要である。
6	寺坂多栄子他（2011）. 初めて妊娠した娘を持つ実母の孫育て講座に対するニーズ. 滋賀母性衛生学会誌，11(1)，p7-11.	初めて子どもを出産する妊婦に実母を対象に、孫育て講座に対するニーズを明らかにすること	初産婦の実母	祖母が祖母学級に希望する内容は「子育ての今と昔の比較」「祖父母の役割」「事故の対応」の順にニーズが高かった。孫あり群の方が孫育て講座に興味が高かった。4 割が孫講座への参加を希望していた。実母自身が自分の果たすべき役割を認識し、娘の支えになりたいと考えていることが示された。
7	塚田桃代他（2011）.母娘世代間における育児意識の相違に対する効果的な支援について. 奈良県母性衛生学会雑誌. 24号，36-39.	世代間での育児に関する意識に違いがあるかを検討すること	母親世代とその母親世代	育児に関する意識は世代間に有意差はなかった。祖母世代による育児支援を受けていたものは 79%であった。支援内容は多い順に「子どもの遊び相手」「泣いたら抱っこする」「あやす」「オムツ替え」「家事支援」などであった。 困ったことは娘世代で「育児に対する考えが合わない」 母親世代では「自分の頃と育児方法が違う」であった。
8	田幡純子他（2012）.育児を支援する事による祖母の生活の質. ウーマンズヘルス学会誌，11(1)p25－32.	孫の育児支援をする祖母の QOL を測定し、育児支援をすることが祖母の健康にどのような作用を及ぼしているかを明らかにすること	誕生後 1 ヵ月の祖母	基本的属性・祖母性・WHOQOL26 を用いて測定した。孫誕生後の QOL を高める要因は健康感が良好であること、孫との距離が近く、育児支援をすることに満足感を感じていることが明らかとなった。孫の育児支援をする祖母の QOL は変動要因（健康不安と自己実現の困難）によって異なり、育児支援が無条件の「よろこび」「生きがい」にならないことが示された。祖母を対象にした研究が少ないなか、祖母自身の QOL と祖母性を測定し、孫の育児支援をする祖母への支援をする際の資料を得ることができた。
9	井関敦子他(2013).里帰り分娩を行った娘に対する実母の支援姿勢と支援を通じて体験した思い. 母性衛生，54（1）p191 - 199.	里帰り分娩を行った娘に対する実母の支援姿勢と支援の中で体験した思いを明らかにする	里帰り分娩を行った娘の実母	支援姿勢は、娘の心身の安楽をはかる、娘夫婦の育児を見守る、自身の育児能力を見極め娘に必要なサポートを判断するであった。実母の思いは、持続または再開する母親役割、低い自己評価と役割葛藤、娘との不協和音があった。生き甲斐・やりがいは、娘から頼られる喜び、幸せそうな娘への喜び、娘の努力を承認する喜びであり、低い自己評価と役割葛藤は、娘は頼ってくれない、もっと頼って欲しい、娘であって娘でなくなったようななんとも言えない淋しさがある。娘との不協和音では、とにかく自己中心的で助言を聞いてくれないであった。不協和音においては、食事の後片付けをしない娘、娘の言い方に腹が立つ、時代が違うといわれたことが見いだされた。産褥期の女性は「受容期」「保持期」「解放期」という段階的な母親役割獲得過程に従い娘のサポート希求も変化することから、サ

				ポートの授受の不均衡および娘との不協和が生じると考えられる。効果的なサポート授受のため、その時の娘に本当に必要な支援は何か、娘への支援に関する実母の認識や育児情報を確認し調整することが必要である。
10	西谷正太他(2013).家族関係の行動神経基盤-家族「愛」の神経基盤-分子精神医学, 13(4). 236-242.	家族構成員間の絆を笑顔に対する前頭野の活動性の変化から明らかにすること	祖母	祖母性「愛」は母性「愛」と父性「愛」の特徴を併せ持ち、直感的、情緒のみならず論理的、理性的な祖母行動が予想される。 祖母は孫の心理状態を注意深く観察しつつも自己の内省も同時に行うことで母親とは違う視点で孫に対する養育行動を行っているのかも知れない。
11	西村香織, 永山くに子(2014).産褥早期の初産婦の母乳を目ぐる実母の関わりの特徴. 日本助産学会誌, 28(2), pp229-238.	産褥 2 週間以内の初産婦の母乳育児をめぐる実母の関わりの特徴を明らかにすること	母乳外来に来院した初産婦とその実母	母乳育児中の初産婦に対する実母の関わりには「受容的」「支持的」「教育的」のサブパターンが見いだされた。サブパターン「食に関する言い伝え」「育児観に関する言い伝え」からなる「個人的関わりパターン」と「世代間伝承的関わりパターン」の 2 つの特徴的な関わりパターンが抽出された。母乳育児をめぐる実母の関わりには個々の関わりに加え、世代間の伝承的な関わりがあると考えられた。また、産褥早期の母乳を通して、現代の娘に対して実母が初産婦にどう考え関わっているかには、受容、支持など肯定的な側面が見られる一方で、先行研究の教育的姿勢を呈する関わりも存在していると考えられた。
12	前原邦江他(2014).高年初産の母親の産後1か月間におけるソーシャルサポートの体験　母性衛生, 55(2), 369-377.	高年初産婦の母親の産後1か月間におけるソーシャルサポートの体験を記述すること	高年初産の母親	【自分たちなりの育児生活への移行に向けた不安と準備】【産後の身体的負荷への助けと不満】【育児の試行錯誤の中での精神的支えと当惑】【育児の専門的・情報的支援の探求と納得】【自分たちなりの育児生活の始動における協働と自負】の 5 つのテーマが見いだされた。
13	中村敦子(2014)娘の産後里帰りを引き受けた実母の体験. 日本助産学会誌、28(2). 239－249.	実母が娘の産後里帰りを引き受けた体験に、どのような意味があるかを明らかにすること	産後里帰りを引き受けた実母	母親としての潜在的能力の発揮・娘と孫から得られた幸福・自己成長への気づき・人生の新たな方向性への気づきの 4 つのカテゴリーが抽出された。娘の産後里帰りを引き受けた体験には、単なる育児支援ではなく、娘の母親としての成長への喜びや娘への愛着親密性を深めること、娘夫婦の幸福のために力添えすること、自己成長に気づくこと、家族を大切にしながら子としての自分の人生を大切にするという生き方を見出す意味があった。
14	小坂麻衣他(2015).初産婦である娘をもつ実母の産後1か月間における祖母役割行動の調整過程. 日本母性看護学会誌、15(1), pp10－17.	初産婦である娘を持つ実母の産後 1ヵ月間における祖母役割行動調整に対する看護の方向性を示唆すること	初産婦とその実母	祖母役割の行動は、娘の祖母役割期待と周囲の役割期待を祖母が自認し、行動に移し、行動を期待した両者が評価し、評価を受けて知覚し、期待を受けるという行動が見られた。 祖父母の役割行動の調整過程は「対立択一型(娘とは摺り合わせず周囲の期待だけに応えようとするので娘と対立が起こる)」「実母主導型(実母が期待されることと知覚することに一致せず自分なりの行動をとり続ける)」「役割期待合致型」の3パターンとなった。娘の産後1か月間の回復と自立、新生児期の孫の健やかな成長と、実母のやりがいをもたらすことが可能なのは「役割期待合致型」を辿る場合である。
15	野村奈央他(2015). 実母の育児支援に対する母親の受け止めと実母の気分状態との関連性. 滋賀母性衛生学会誌, 15(1), pp13-19.	実母の育児支援に対する母親の受け止めと実母の気分との関連性を明らかにすること	産後 1 カ月の初産婦とその母親	実母は母親のニーズに沿った育児支援を提供しようと意識しているが、実母の気遣いは母親の受け止め方に上手く反映されていない場合があることが示された。 母親が実母からの育児支援に関する気遣いを高く受け止めている場合は、実母は自信喪失感を伴った抑うつ感や、敵意・いかりを感じにくいことが示された。 実母が母親のニーズに合った支援をすることで、自信の祖母役割を形成し、気分状態にも肯定的な影響をもたらしていると考えられた。母親への育児支援を行うためには、実母の心身の健康状態をアセスメントすることが重要である。

依頼書（病院長・看護部長用）
平成 27 年○月○日

○○病院
病院長・看護部長　　○○○○様

看護研究への協力のお願い

拝啓
○○の候、○○看護部長様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。
私は、山口県立大学大学院の博士後期課程に在籍し健康福祉学を専攻している、中村敦子と申します。「娘の母親役割取得を支える実母教育プログラムの検討」というテーマの研究を行いたいと思っています。詳細につきましては下記に示しています。お忙しい中まことに恐縮ですが、本研究へのご理解のうえ、ご協力いただければ幸いと存じます。

敬具

記

１．看護部長様へのご依頼内容
１）貴病院の産科病棟で分娩した褥婦と面会に訪室している実母に、研究の主旨を説明し、褥婦と実母宛の研究参加依頼書および研究参加の承諾書をお渡しすることをご了承いただきたいこと。
２）上記の件に関するご了承を、看護部長様から貴病院の病院長様にご確認していただきたいこと。
３）産科病棟看護部門の責任者（看護師長）に、研究参加者である褥婦および褥婦の実母を研究者にご紹介いただくことをご了承いただきたいこと。

２．研究目的
里帰り分娩をサポートする実母の娘に対する母親役割獲得を促進させる要因と、里帰りを終えるまでの実母の心理的な変化を明らかにし、実母の心身の健康のための健康教育プログラムの開発を目的とする。

３．研究方法
１）研究参加者
初産婦と、退院後に里帰りの支援を行う初産婦の実母を対象とする。
２）データ収集方法
産科病棟看護部門責任者（看護師長）から、初産婦で、退院後里帰りし実母に支援をしてもらう予定の褥婦をご紹介していただく。実母への研究参加依頼書と同意書を渡し、同意が得られた褥婦とその実母に里帰り終了まで 1～2 週間ごとに半構成的面接を行う。面接日時、場所は褥婦の里帰り先である実母の自宅で行う。

４．研究における倫理的配慮
研究にあたり、山口県立大学生命倫理委員会の承諾を得て行う。
研究参加者の個人情報の保護と匿名性の保持に配慮する。研究データおよび結果は研究以外の目的には使用しない。研究結果を論文やその他の方法で公表する際は、施設名および個人の匿名性を保持する。

５．結果の公表方法
山口県立大学大学院博士論文発表、および学会において論文として公表する予定である。
※　この研究に関するご質問がありましたら、いつでも下記の連絡先にお問い合わせください。

平成　　年　　月　　日

研究責任者：山口県立大学健康福祉学研究科
教授　田中　マキ子
連絡先：Tel（代表）／E-mail：　083-928-0211／maki@n.ypu.jp
共同研究者：山口県立大学健康福祉学研究科　博士後期課程
中村　敦子
連絡先：〒738－0052　広島県廿日市市阿品台東 1 番 2 号
TEL　（0829）20－2800　内線　2432

依頼書（看護師長用）
平成27年○月○日

○○病院
看護師長　　○○○○様

看護研究への協力のお願い

拝啓
○○の候、○○看護師長様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。
私は、山口県立大学大学院の博士後期課程に在籍し、健康福祉学を専攻している、中村敦子と申します。「娘の母親役割取得を支える実母教育プログラムの検討」というテーマの研究を行いたいと思っています。研究にあたり、ご協力いただきたく、お願いに上がりました。具体的な内容につきましては、下記を御高覧ください。お忙しい中まことに恐縮ですが、本研究の詳細についてご理解のうえ、ご協力いただければ幸いです。
敬具

記

１．看護師長様へのご依頼内容
１）貴病院の産科病棟で分娩した初産婦で、退院後に里帰りし、実母に支援を受ける予定の褥婦若しくは面会に訪室している実母をご紹介いただきたいこと。
２)上記に褥婦とその実母に研究の主旨を説明し、研究参加の同意を得ることをご了承いただくこと。

２．研究目的
里帰り分娩をサポートする実母の娘に対する母親役割獲得を促進させる要因と、里帰りを終えるまでの実母の心理的な変化を明らかにし、実母の心身の健康のための健康教育プログラムの開発を目的とする。

３．研究方法
１）研究参加者
初産婦と、退院後に里帰りの支援を行う初産婦の実母を対象とする。
２）データ収集方法
産科病棟看護部門責任者から、初産婦で、退院後里帰りし実母に支援をしてもらう予定の褥婦をご紹介していただく。実母への研究参加依頼書と同意書を渡し、同意が得られた褥婦とその実母に里帰り終了まで1～2週間ごとに半構成的面接を行う。面接日時、場所は褥婦の里帰り先である実母の自宅で行う。

４．研究における倫理的配慮
研究にあたり、山口県立大学生命倫理委員会の承諾を得て行う。
研究参加者の個人情報の保護と匿名性の保持に配慮する。研究データおよび結果は研究以外の目的には使用しない。研究結果を論文やその他の方法で公表する際は、施設名および個人の匿名性を保持する。

５．結果の公表方法
山口県立大学大学院博士論文発表、および学会において論文として公表する予定である。
※　この研究に関するご質問がありましたら、いつでも下記の連絡先にお問い合わせください。

平成　　年　　月　　日

研究責任者：山口県立大学健康福祉学研究科
教授　田中　マキ子
連絡先：Tel（代表）／E-mail：　083-928-0211／maki@n.ypu.jp

共同研究者：山口県立大学健康福祉学研究科　博士後期課程
中村　敦子
連絡先：〒738－0052　広島県廿日市市阿品台東１番２号
TEL　（0829）20－2800　内線　2432

承諾書（病院長・看護部長・看護師長用）

研究協力の承諾書

「娘の母親役割取得を支える実母教育プログラムの検討」について、研究目的・内容・方法などについて、説明文書を用いて説明を受け、理解しました。

そこで、施設の倫理委員会の意思に基づき、この研究に関する以下の事柄に協力することを承諾します。

日付：平成　　年　　月　　日

施設名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

病院長・看護部長・看護師長（ご署名）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　印

研究者（署名）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿印

承諾書は 2 部作成します。1 部は貴院で研究終了までお持ちいただきますよう、お願い申し上げます。1 部は本研究者が保管させて頂きます。

研究責任者：山口県立大学健康福祉学研究科
教授　田中　マキ子
連絡先：Tel（代表）／E-mail：　083-928-0211／maki@n.ypu.jp

共同研究者：山口県立大学健康福祉学研究科　博士後期課程
中村　敦子
連絡先：〒738－0052　広島県廿日市市阿品台東 1 番 2 号
TEL　（0829）20－2800　内線　2432

研究への参加の取り消し書

「娘の母親役割取得を支える実母教育プログラムの検討」に参加することを取り消します。

日付：平成 ＿＿＿年＿＿＿月＿＿＿日＿＿

研究参加者（署名）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 印

研究者（署名）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 印

研究への参加を取り消される場合、用紙をご記入いただき研究者へ郵送してください。
研究者が署名・押印し、１部をお手元へ返送いたします。

研究責任者：山口県立大学健康福祉学研究科
教授　田中　マキ子
連絡先：Tel（代表）／E-mail：　083-928-0211／maki@n.ypu.jp

共同研究者：山口県立大学健康福祉学研究科　博士後期課程
中村　敦子
連絡先：〒738－0052　広島県廿日市市阿品台東１番２号
TEL　（0829）20－2800　内線　2432

同意説明文書

研究課題：娘の母親役割取得を支える実母教育プログラムの検討
（山口県立大学生命倫理委員会　承認番号【　27-54 号　】）

研究代表者：田中　マキ子

所　　属　：山口県立大学健康福祉学研究科

共同研究者等（所属）：中村敦子：助産師
（山口県立大学健康福祉学研究科　博士後期課程　）

この同意説明文書は、研究課題「娘の母親役割取得を支える実母教育プログラムの検討」について、その趣旨を十分ご理解いただくために作成したものです。この研究に参加・協力していただけるかどうかは、あなたの自由意思によって決めていただきます。

１．研究の目的および方法

この研究は、母親役割取得において特徴的な心理的変化を辿る娘の産後 1 ヶ月までの期間に焦点をあて、娘の心理的な変化に合わせた実母の支援過程を明らかにし、母親役割取得を促進する支援の在り方の示唆を得ること、および、里帰り開始から終了まで、実母の心理的な変化を明らかにし、実母の心身の健康への示唆を得ることが目的です。

研究期間は、2015 年の生命倫理委員会承認後から 2018 年 3 月 31 日です。

研究対象者は、初めての出産後、里帰りで実母に支援を受ける予定の女性（娘）とその女性を支援する実母、10 組程度を対象としています。里帰りを開始後から終了するまでの期間において１～2 週間毎に女性（娘）とその実母に対し、およそ１時間程度のインタビューを、皆様のご自宅で実施させていただきます。

２．研究参加の任意性と参加撤回・辞退の自由

この研究への参加・協力は、お断りになることもできます。お断りになっても、あなたが不利益を被ることは一切ありません。研究への参加・協力は自由意志によって行ってください。

この研究への参加・協力に同意した場合であっても、いつでも途中でやめることができます。研究の参加・協力を取りやめることによって不利益を被ることはありません。遠慮なくお伝えください。

３．個人情報の保護（匿名化の方法）

この研究にご協力いただける場合、個人情報は固く守ります。個人名を一旦ご記入いただきますが、調査データはすみやかに匿名化し、匿名化されたデータのみを用いて以降の研究を進めます。匿名化データと個人名の対照表は研究終了時まで、研究責任者が厳密に管理・

保護します。
　この研究で得られた個人データは研究終了後に破棄し、承諾なしに他の目的に転用することはありません。もしも、この研究が発展しデータを継続して利用する可能性が生じた場合には、改めて説明させていただきます。

４．得られたデータの利用範囲、研究成果の公表

　研究成果は､関連学会･研究会での発表や論文等として公表し､広く社会に還元します。
　研究成果公表に際しては、対象全体のデータを分析したものを使用しますので、個人情報が特定される形式での情報提供や公表はしません。

５．研究に参加することで得られる利益と不利益

　面接時には、お母様と娘さんのお互いの話が聞こえないように、また、新生児の育児や娘さんの休息が中断されることのないように配慮しておこないます。面接では、話したくないことは無理に話されなくても構いません。

６．研究の科学的価値や当該領域・社会に対する貢献

　本研究によって、母親になられる方の、母親役割取得過程を促進する支援のあり方と、里帰りを支えている実母の方々の心身の健康のための教育方法についての示唆を得る可能性があります。

７．研究参加に対する謝礼等

　研究参加者には、謝礼として一人 3000 円程度の粗品をお渡しいたします。

８．利益相反について

　なし

９．問い合わせ・連絡先

　　本研究につきましてご不明な点は、下記にお問い合わせください。
　　研究代表者名：田中　マキ子　（山口県立大学健康福祉学研究科）
　　Tel（代表）／E-mail：　083-928-0211／maki@n.ypu.jp
　　共同研究者：中村　敦子（山口県立大学健康福祉学研究科　博士後期課程）
　　〒738－0052　広島県廿日市市阿品台東１番２号　TEL（0829）20－2800　内線（2432）

研究参加同意書

所属機関名　　山口県立大学健康福祉学研究科

田中　マキ子様

　このたび、私は「娘の母親役割取得を支える実母教育プログラムの検討」に参加するにあたり、　　年　　月　　日に中村敦子により以下の項目について文書および口頭で説明を受けました。

１．研究の目的および方法
２．研究参加の任意性と参加撤回・辞退の自由
３．個人情報の保護（匿名化の方法）
４．得られたデータの利用範囲および研究成果の公表
５．研究に参加することで得られる利益と不利益
６．研究の科学的価値や当該領域・社会に対する貢献
７．研究参加に対する謝礼等
８．利益相反について
９．問い合わせ・連絡先

　その結果、上記の内容を十分理解しましたので、研究に参加することに同意します。

　平成　　年　　月　　日

研究参加者氏名　　印
（自署の場合は、印鑑は省略してよい）

説明者（研究者）氏名　　印

＊同意書は二部作成し、各一部ずつ研究参加者と研究代表者が保管する。

研究参加同意書

所属機関名　　山口県立大学健康福祉学研究科

田中　マキ子様

　このたび、私は「娘の母親役割取得を支える実母教育プログラムの検討」に参加するにあたり、　　年　　月　　日に中村敦子により以下の項目について文書で説明を受けました。

１．研究の目的および方法
２．研究参加の任意性と参加撤回・辞退の自由
３．個人情報の保護（匿名化の方法）
４．得られたデータの利用範囲および研究成果の公表
５．研究に参加することで得られる利益と不利益
６．研究の科学的価値や当該領域・社会に対する貢献
７．研究参加に対する謝礼等
８．利益相反について
９．問い合わせ・連絡先

　その結果、上記の内容を十分理解しましたので、研究に参加することに同意します。

　平成　　年　　月　　日

研究参加者氏名（母親）　　印
研究参加者氏名（実母）　　印
（自署の場合は、印鑑は省略してよい）

ご連絡先（里帰り先）　住所

電話番号　　－　　－

説明者（研究者）氏名　　印

＊同意書は二部作成し、各一部ずつ研究参加者と研究代表者が保管する。

インタビューシート（実母）（NO.　　）

面接日		時刻	開始　　：	終了　　：

研究参加者の条件の確認（面接前に確認すること）

□ 研究協力の依頼書に基づいた研究目的，研究方法，倫理的配慮の確認

□ テープ録音の了承

□ 本日の体調はインタビューに問題がないか

研究参加者の背景

□ 年齢

□ 就労の有無

□ 今回の支援はご自身の支援の何回目にあたるか

□ 里帰り前の娘との同居期間

質問内容

□ 支援の動機はなにか

□ どのようなことに気をつけて支援をしているか

□ 娘のどのような様子を見て、実母は何を思い、どのような行動をとったか

□ 実母のどのような関わりが、娘にどのような影響を与えたと思うか

□ 支援をしていて、今、どのような気持ちでいるか
今、支援をしていて、心身の健康はどのようか

□ 必要とする支援は何か

□ 自分自身について、何か変化はあったか

次回の面接について

□ 里帰りを終了させる予定の時期に、２回目のインタビューを実施する了承を得る

面接時の注意事項

□ 面接においては誘導にならないように留意する

□ 面接時の体調や，精神的な苦痛が生じていないか配慮し，生じた場合は中断し，続行に関しては、研究参加者の意向を尊重する

□ 謝礼として，3000 円程度の品物を準備する

インタビューガイド（娘）

面接日		時刻	開始　　：	終了　　：

研究参加者の条件の確認（面接前に確認すること）

☐ 研究協力の依頼書に基づいた研究目的，研究方法，倫理的配慮の確認
☐ テープ録音の了承
☐ 初産であるか
☐ 娘とその児の健康状態が良好な経過で退院を迎えたか
☐ 実母から支援を受けているか、支援を受ける予定期間
☐ 本日の体調はインタビューに問題がないか

研究参加者の背景

☐ 年齢
☐ 既往歴
☐ 自宅と里帰り先の距離
☐ 出産体験に満足しているか
☐ 児の授乳方法
☐ 夜間の睡眠時間と日常生活において無理をしているか否か

質問内容

☐ 妊娠中の母親としての自己のイメージと、そのイメージを助けたものは何か
☐ わが子の世話に関する基本的な技術を一通りできるか、それをどのように身に付けたか
☐ 子どもの要求の意味が推測できるか、それはどのように身に付けたか
☐ 子どもの要求に応じることができるか、それはどのように身に付けたか
☐ 自分とわが子に合った自分なりの方法を見いだし、状況に応じて実施しているか
☐ 母親としての自分に充足感が持てているか　どのように感じているか、どう評価しているか
☐ 児との接触やコミュニケーションが楽しいか
☐ 実母に対する思い

次回の面接について

☐ 里帰りを終了させる予定の時期に、２回目のインタビューを実施する了承を得る

面接時の注意事項

☐ 面接においては誘導にならないように留意する
☐ 面接時の体調や精神的な苦痛、児の世話が生じていないか配慮し，生じた場合は中断し，続行に関しては、研究参加者の意向を尊重する
☐ 謝礼として，3000 円程度の品物を準備する

添付資料２-９-１

ワークシートの例 No.1

	M―GTA　分析ワークシート（あおきくこすせそ）
概念名	ポジティブな思考に向けさせる
定義	不安やネガティブな思考を払拭し、あえてポジティブな考え方、捉え方を娘に話すこと
バリエーション	(あ1-135) **かえってよかった**のかも知れませんね、急に負担がかかると大変になるので、ゆっくりとできて・・・ (お1-29) **たまたまその日は調子が良くなかった**のかなぐらいで、まあ、夕方だからしんどいんじゃろって言って、 (お1-234) **どうやってでも育つ**と思うんですよ私。実はね。ごはんさえ食べさせておけば (き１―65) もう大変よっていうから、あんたもう**楽くらい楽よ**って言うんですよ (き 1-167) 私はそこまでする必要ない、もうきちきちってね、子どものことに関しては本当に神経質すぎるぐらい(く 1-102) そんなのがスムーズに出る子は、いつも泣いているんじゃないのとか、勝手にいって、やはり、**こっちがだめならこっちが良かったり、**全くのいい子っていないから、だから、そういうところに手がかかっているのかもよって、冗談半分に言っているんです (こ 1-228) 子育てってそんなに**神経質になるのが一番いけんって言いますよね**。3 時間って言われたから、そのようにせんといけんってイライラしたり、良くない（笑い） (す 1-164) え―そんな子だったんだって、**出来るだけ、怒らせないよう**に、**気を遣って言葉かけをしているつもり**ではあるんですけど。不安がるようなこと、黄疸が出て大変だねとかそういうことはまあ、小さく生まれたので体重増えているかねとか**不安がるようなことは言わない**ようにしているんです (す 1-245)子供が心配するようなことは、吐乳したら、なんで吐いたんだろうかとか、体重増えていないねとか、黄疸がずっと、黄疸ましになってきているね、顔がふくよかになってきているから体重が増えているんじゃあない？ちょっと図ろうか、あっ増えていたねって。**いいことは言うようにしている**けど、**不安がるようなことは言わない**ように気をつけているつもりなんです (す 1-184) 案外３～４時間寝ているから、**助かりますよね**、良く寝るよねーとか言って、母乳は有り難いねって言って、それぐらいです。 (す 1-239) そう、**プラス思考になんでも考える**んです。それが良いのかも知れません。 (せ 1-86)私たちの時にはおしめでしたからね。一枚一枚洗って、それで下洗いをしてから洗濯機に入れていましたから、この子下痢だったから、１日に７回も８回もして、股関節が離れていたんです、だから又オムツをしなさいと言われて、大変でしたけど、今は**まだ良いよ**、こんなおしめが有るんだから。 (せ 1-167) そんなに子育てと家事が両立できんことはないから、家もそんなに広いわけではないしって、言って、台所も対面だからね。見ながらあやしながら出来るから (う 2-28) 人それぞれなんじゃない、寝れる時に寝たらって寝なかったら**鬱になちゃうしっ**て、そういうこう、気持ちがまた、こう**マイナス思考になっているのをプラスに引き寄せようとした**りはしました (け 2-98) **自分がどっしりと落ち着いていること**、出産の時もそうでしたけど、**自分が心配したりしないということ**ですよね、いい方向に考えるというか、痛がっていた時も、痛い痛いではなくて、もうちょっとよ、で、前に前にという感じで、自分も、痛かったでしょではなくて、良かったじゃんって、これからよっていう感じで接するということで (け 2-111) だけどね、私も最初はそう思っていましたけど、今は、大丈夫大丈夫って思いますよね。**怖い怖いと思っていたら、親も怖がりますから**ね、おじいちゃんおばあちゃんに抱っこさせて大丈夫なんだろうかと思いますからね。（笑い）
理論的メモ	実母自身が、現状をポジティブに捉えている。 多くの実母が、根拠の無い大丈夫を発している。 大丈夫だと娘に声をかけて安心させている 実母がおおらかに接するから娘もおおらかでいられるのか、もともと娘の性格がおおらかなのか？ 大変だという捉え方ではなく、楽だという捉え方をするように声かけしている。 神経質にならずにおおらかに育児するように声かけしている 物事をポジティブに捉え、娘に伝えている。 実母自身の胸のうちにネガティブなことが生じても、その気持ちはあえて抑え、ポジティブな言葉だけを娘に伝えている 娘が鬱にならないために→あえてポジティブな発言をするように心掛けている ポジティブに自分がとらえることで、→娘も不安がらずに安心してわが子に関わることが出来る あえてポジティブに捉えて発言することと、大丈夫と承認する声かけは良く似ている。

ワークシートの例 No.2

	M―GTA　分析ワークシート　（あうおえきくしすせそ）
概念名	娘と孫を対にして見る
定義	娘と孫の様子がどのような様子であるかに関心を寄せ、注意を向けて二人を同時に観察すること
バリエーション	(あ 1-16) 最近ちゃんと練習して吸い付けるようにはなってきたのですが、たぶんまだ、ゴックンはできなくて、出るのも少ないんですかね、帰ってから練習をし始めたから。 (う 1-36) 昼夜逆転したりすると、睡眠不足になるので、時々自信がなくなったり不安になったりすることがあるようなんですし。 (え 1-132) 実際に子どもの鳴き声が聞こえても、そのうち泣き止んで、乳加えさせたら泣き止んで、いま、おしめ変えているんだろうなぐらいで、それも数日にに１回ぐらいで、こっちも眠りが浅くなっていたら、あ、聞こえたぐらいで、全くその長く泣いている様子がない (く 1-29) なかなかげっぷが出ないんですよね。出せないと吐くと言われて、せっかく飲んだのに吐かれたら困ると思って、一生懸命にやっているんだけれど、それに便も出づらくって、あの、刺激したら出るんですけどそれも１日に１回なんですよ。。だいたい毎度便が出るのが普通ですよね、この子ぐらいの時には、まだ、こんなもんなんかなあ個人差があるからこれでいいんかなあと、今、思いながらやっているところなんですけど （く 1-75)それはいつも見てはいますから、どれくらい飲んだとはいつも聞いています (す 2-164) 無くなりましたね、だからうちも安心ですよね、表情が安心しきって、そんな感じです。日々太って行っているのが良く分かる (そ 1-120) (娘と、赤ちゃんの両方を見ているという) そういうつもりではありますね。娘にとってはお母さんなんですけど、私にとっては娘なので、二人の感じを見ながら、でも、言う事は言うみたいなそういう感じですよね。 (え 2-200) セットですね、私のなかではあんまりばらばらとなっていない、常にセット。どうなんだろう、なんかね、気持ちの中に、娘は自分の子どもだけれども、こっちは（新生児）は向こうの孫さんでもあるから、遠慮も入っているから、あんまりこう孫オンリーにならないんですよね、遠慮が入っている気がする、自分の中で、うちの孫だけれども、いやいや〇〇家の孫よねという遠慮が入っているのかな。娘の方が重きがあって、そこに子どもがぶら下がっているという感じで、預かっている孫だから上手に育ててあげないとという感じかな (く 2-80) まあ、その日その日にみて、まーおしっこいっぱい出たねとか、最初便が出づらかったんですよね。いま、あのすごく出すようになったから一人で、良かったねってすごく喜んだんですけれどね、その時お泣き声もすごく元気が良いしね。真っ赤になって泣いているし、元気で泣けるようになったね、と一緒に喜んでいるような感じですかね、変わったことしたら、まあ、こんなことしているよとか、この子だけのこの子の話題だけですかね (せ 2-109) 今は、泣く時間がずれて行っている感じです、夜明けに泣いていたのが次の日は朝泣いて、また夕方泣いてって、良く寝るのは良く寝るんですけど。そこらが良く分からないんですけど、ただその時には１時間起きに欲しがるんですよね、100 やってみたり、ちょっとずつ３時間飲むのを 100 づつ分けてやってみたり、もうこうやっては―は―ってミルクを欲しがる、抱いていたら欲しがるような口をしてみたり、だけどちょっとしか飲まないんですよね。そういう時はあの子も、便秘、お腹が張っているから、飲ませたら飲まないかなって言ってみたり (せ 2-119) だいたいこの白っぽい顔をしているときは良く寝るんですけどね。だから日々成長していることはしているから、ミルクを欲するのは欲するんですよね。成長しているからねどうしても、それが一定ではないですよね、３時間起きにコンスタントに飲んでほしいけど、そういうわけにはいきませんよね。
理論的メモ	娘の授乳の様子を観察している 退院後間もない頃は、まだ、上手に新生児が哺乳することができないと思っているようだ 新生児が泣く理由が分からない娘の様子に、まだ１週間だからそういうこともあるだろうと思っている最初、娘が慣れずに大変そうにしている様子を観察している 別室にいても、新生児の鳴き声でどのような様子なのかを注意深く観察している 娘の体調が回復する様子を観察している 娘がどのような思いで新生児と関わっているかを観察している 実母から見えているものは、娘の様子（娘自身の体調や気分と新生児に関わる様子）と新生児の様子、娘の夫の育児参加の様子の両方が同時に見えている 娘は新生児の様子に集中している 自分の目で確認できない部分は娘から話を聞いて確認しているようだ 新生児の様子を見て(7)、娘の気持ちを汲み取って（3）病院で言われた一般的な事と、我が母子にそれが当てはまるかを、両者の様子を見て、どうかなと疑問を持ち（一緒に悩み 4)、自分の体験から（体験の想起 15)、何が我が母子に適しているかを判断し、全責任を持って助言（11）している。 娘と孫を対で見るから、―孫の反応の読み取りを娘に伝えることが出来る 母親は自分の子どもだけを見ているが、祖母は、娘と孫の両方をセットで見ている。ばらばらに二人を見ているのでもなく、二人をセットで見ているというのが面白い。（対極例は無い）

ワークシートの例 No.3

	M―GTA　分析ワークシート　（あおきくこしすせそ）
概念名	孫の反応の翻訳
定義	孫の反応を読み取り、その意味を娘に伝え共有すること
バリエーション	(く 1-164) **顔の表情が変わる度**に話していますね、あっ泣きそうよとか、あっ笑ったよとか、しょっちゅう、この子もわかるんじゃないかなとは思うんですけど、私が抱いているときはね、どうしたの足でけって、足が丈夫だねとか（笑い）今、ほらママの方に向いたよとかしょっちゅうそういう**細かいことを** (こ 1-180) しかめっ面したら、**あー今、なんか出るんかね**とかぐらいですよね (し 1-73) **おっぱい探すようなふうだったら、これミルクだね**ぇっとか言って。 (す 1-245)**顔がふくよかになってきているから体重が増えているんじゃあない**？ちょっと測ろうか、あっ増えていたねって。 (す 1-247)表情見て、**今口すごく張っているからミルクが欲しいんじゃあない**って、ツバメが口をこうやってするように、母乳飲ませた方が良いんじゃあないって。 (せ 1-92) **この子欲しいんよ**、やはり欲しいときにあげないと (せ 1-106) もうげっぷの時と、ミルクで泣くときと、ミルク泣きの時にはわかるんですよね。**顔をこうやってこうやって、すごく泣くから、病気の痛みではなくて**、そのくらいですかね。 (せ 1-130) 赤ちゃんは暑いから、ぴちぴちのものを着せると暑いじゃあないですか、だからゆったりとしたものを着せないと、汗もかくし、で、**背中を触ってみて、汗をかいていたら着替えさせないと** (そ 1-71) この子を**見ていたら、要求がなんかおっぱいとかおしっことか、甘え泣きとか**、彼女もだんだんわかるようになってきたって言っていたけど、そういう割とはっきりとわかりやすいんで、**そこは解りますよね、なんとなくこれは甘え泣きよね**とか。なんだか**構ってほしいというような泣きかたがあるよね**、最近。 (お 2-32) 本当にこの 2～3 日で舌を出すようになって、手がパーなんですよ、私びっくり、 (く 2-80) まあ、その日その日にみて、まーおしっこいっぱい出たねとか、最初便が出づらかったんですよね。いま、あのすごく出すようになったから一人で、良かったねってすごく喜んだんですけれどね、その時は**泣き声もすごく元気が良い**しね。**真っ赤になって**泣いているし、元気で泣けるようになったね、と一緒に喜んでいるような感じですかね、変わったことしたら、まあ、こんなことしているよとか、**この子だけのこの子の話題**だけですかね (く 2-121) **この子がお乳を探す**んですよね、私にはお乳がないですから。こういう感じで良し良ししていたら良い子しているんですよきょろきょろしていて、**泣いていても、ぐにゃあとなった顔がもとに戻る**んですよね、声を出す前に、すごいなとか思ってそれは私もびっくりしたんですけど。あのこの子も目て、あー、そういう抱き方が良いんだねとか (く 2-127) **お腹が洋ナシ**みたいになっていますよね。結構お腹が膨らんでいるんですけどいいんでしょうか? (し 2-4) 子どもの泣き方で、今は**何を要求しているのかが少しずつ分かってきた**というか、**本泣きしたときは、これは絶対あれだねとか、母乳だねとか。私からそれを言っているのかも知れない**。教えるというんじゃなくて、こうだねーって話の中から娘があーそうなんかと思ってくれた面があるかもわかりません。あまり意識してはいないんですけど、口に出してポロっといったことが耳に入っているのかも知れませんね。 (し 2-26) 先週健診が有って、体重が増えていたので、良く増えているねとか**顔つきが変わったんじゃあない**、肉がついてきたねってそういう風な話を・・・ (し 2-113) なんか、パニックになっているよね、どうしてもの時には、真っ赤になって、ギャーって泣いて、ミルクじゃねって言って。おっぱいよねって。 (す 2-150)飲みたくなくなったら**自分で手でこうやってはねのける**から (す 2-164) 無くなりましたね、だからうちも安心ですよね、**表情が安心しきって**、そんな感じです。
理論的メモ	新生児の啼泣の理由を判断し、対応方法を娘に示す。新生児の表情を読み取り娘に伝えている 新生児に黄疸が出ていることに気づきいている。新生児の様子を読み取り、判断していると言える新生児の反応に気づかないようだが、実母が新生児の表情を読み取り、その意味するところを娘に伝えている 新生児の表情が変化するたびに詳細にその表情を娘に伝えている新生児の表情に関して、実母は詳細な変化に気づいているようだ。「泣く」においても、「泣きそう」「お腹が空いて泣く」「甘えて泣く」「構って欲しくて泣く」「お腹が張って不快感で泣く」という表現をしている。娘が不安にならないように新生児の反応の読み取りをポジティブに伝えているようだ新生児の様子を見て(7)、娘の気持ちを汲み取って（3）病院で言われた一般的な事と、我が母子にそれが当てはまるかを、両者の様子を見て、どうかなと疑問を持ち（一緒に悩み 4）、自分の体験から（体験の想起 15）、何が我が母子に適しているかを判断し、全責任を持って助言（11）している。母親は自分の子どもだけを見ているが、祖母は、娘と孫の両方をセットで見ている。ばらばらに二人を見ているのでもなく、二人をセットで見ているというのが面白い。 娘と孫を良く観察しているからこそ→新生児の反応や日々の変化に気づくことが出来る→それを娘に伝え、共有することで、→娘が読み取れるようになる→娘が母親らしくなったと思える

ワークシートの例 No.4

	M―GTA　分析ワークシート（うえおきけしすせそ）
概念名	娘の性格を踏まえた関わり
定義	幼いころから知っている娘の性格に合わせて関わること
バリエーション	(う 1-90) 気を使う性格、もともと何かをしてっていうのは、娘が何かをしてっていうのは、よほどだと思うので、それに対してはなるべく受けてやろうと思うんです。よほどでなければいわないので。 (お 1-101) そのうち何とかなるよって言うような娘なので、そういうところもおおらかでいいかなと思っている (お 1-121) 親に頼るというよりは、まあ、自分でやった方がいいやというタイプですね、娘は。 (え 1-106) どうしようって言うような娘だったら、あじゃあ見てあげるよって感じかも知れないんですけど、このたびはそんなに心配していなかったから (え 1-147) この子が育ってきたことがわかっていて、**その子の性格を私が見てきているから、この子にはこうしてやるといいかなと思う** (き 1-180) そうそう、**性格を知っているから、もう弱いんよね**そういうところがね (け 1-170) そこまで言ったらもう喧嘩になるなと思った時は、もう、こうちょっと黙っておこうと思いますよね、**性格を知っているから**、で、**今は時期も時期だし**と思って (し 1-129) 結構、**突っ張るタイプで、頑張るタイプだったんですけ**ど、その一言で、本当に嬉しかったです。2 番目で、何かと思ったらガーっと進むタイプで、何にでも頑張るタイプなので、これからもちょっとは甘えてくれるかな (す 1-134) (娘は) ちょっと**メンタルが弱いと思うんですよね**。 (す 1-170) 娘はメンタルが弱いから、出来るだけ娘のそばに、**精神的な安定**をしておいた方が良いなとそれでも１ヵ月したら向こうに帰るから、帰って大変だったらお母さんなんぼでも見るからねって電話してくれたら、もう心配事が有ったら声をかけなさいと言っている (せ 1-82)**ちょっとおっとり型の子なので**、朝からちゃんと計画立てて、朝は眠くてもちゃんと朝のことをして、ちゃんと洗濯して、昼から一緒に赤ちゃんみるのよとかそう言う事しか行ってないかな。やはり一日計画立ててやらないとできないよって。 (そ 1-91) **この子も**あんまり気にする方ではないから (た 1-119) **特にこの子は**言われると、あっそうよね、はいはい、みたいな、**そういうのがすごく強い**、一番反発するのが強い子だったので、それがあるので、極力ああしろこうしろ言わずに、ああしとくよ、こうしとくよ、それを聞いたらその次にああ、この時にこれをしておけばいいんだとか、ああ、この間にこれをしておけばいいんだと覚えるようになるというか、ああしたらいいとか、こうしたらいいとか、それも考えですけど、でも、そんな汚いことをしておきたくないというのも考えでしょうから、**だから極力言わないように**はしていました
理論メモ	幼いころからの娘の性格を踏まえて、その性格に合わせて支援をしている 今は時期も時期だしという言葉から、娘の心理面への配慮からそのように関わっていることが伺える。 このことは、**興味深い結果である。親子関係にあるからこそできる支援である** 娘の性格に合わせて関わることで→心の安寧をはかろうとしている

添付資料 3－1

依頼書（病院長・看護部長・看護師長用）

平成○年○月○日

○○病院　病院長（看護部長・看護師長）　　様

看護研究への協力のお願い

○○の候、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、各地で祖父母学級が開催され始めていますが、私共は、実母様の心身の健康保持と娘さんの母親役割獲得の促進を目指し「実母の母性性・世代性の発達を目指した教育プログラム」（以下、実母教育プログラム）を作成しました。今回「実母の母性性・世代性の発達を目指した教育プログラムの検証」という研究課題において、この「実母教育プログラム」の有用性を実証したいと考えています。お忙しい中まことに恐縮ですが、下記にお示しする本研究の趣旨をご理解いただき、ご協力いただければ幸いと存じます。

記

１．研究の概要

【研究目的】私共の「実母教育プログラム」の有用性を実証することを目的としています。

【研究意義】支援者である実母様の健康維持に貢献できる可能性と、実母様が情緒的な関わりならびに次世代を育てる知識と技術を娘家族のために発揮させることで、娘さんの母親役割獲得を促進し、さらに娘さん家族全体の健康と幸福に繋がることが期待されます。

【研究方法】産後の娘さんを退院後から約 1 ヶ月間支援する予定の実母様で、「実母教育プログラム」または「従来プログラム」を受講する予定があり、さらに本研究に同意の得られた方を研究対象者とします。

対象者には、プログラム受講前後と、受講後で娘の 1 ヶ月健診頃の計 3 回、4 枚の無記名自記式質問紙調査に協力してもらいます。調査は、属性（年齢、職業、娘への支援の形態等）と、受講前後では支援に関する期待の気持ち、1 ヶ月後では支援終了後の肯定的な気持ちについて尋ねるものです。

【成果の公表等】得られたデータは本研究の目的以外で使用することはありません。本研究の成果は、山口県立大学大学院博士論文として公表します。また、学会等で広く公表する予定ですが、施設名および個人が特定されることはありません。本研究は、山口県立大学生命倫理委員会の承認（29-17）のもとで実施します。

２．貴院への協力のお願い

① 「実母教育プログラム」および「従来プログラム」（1 回 120 分、各 20 名の研究対象者が必要）を実施するため、貴院の母親学級指導室を使用させていただきたいこと。

② 「実母教育プログラム」および「従来プログラム」の案内用ポスターを産婦人科外来および産婦人科病棟に貼付することと、受講希望者数確認表を設置することを許可していただきたいこと。

③ 貴院でプログラムを実施する際に、対象者の実母に研究への同意を得て、自己記入式質問紙を渡して、調査を実施することのご了承をいただきたいこと。

④ 産科病棟看護部門の責任者（看護師長）様から、妊婦、褥婦を通じてまたは実母にプログラムの開催をご案内いただきたいこと。

⑤ 産婦人科外来で 1 カ月後の調査質問紙を回収していただき、質問紙を提出された対象者の実母に粗品を渡していただきたいこと。

ご質問がありましたら、下記の連絡先までお問い合わせください。

研究責任者：〒753-0021 山口県山口市桜畠 6-2-1
山口県立大学大学院健康福祉学研究科　教授　田中マキ子
Tel: 083-928-0211（代表）／E-mail：maki@n.ypu.jp
共同研究者：山口県立大学大学院健康福祉学研究科　　中村　敦子
E-mail：an11138@jrchcn.ac.jp

アンケート調査へのご協力のお願い
「実母の母性性・世代性の発達を目指した教育プログラムの検証」

皆様におかれましては、お孫様のご誕生を心待ちにされていることと心よりお慶び申し上げます。

私どもは、娘様を支援するお母様方が健やかに楽しくお過ごしになられることを願い「実母様向けの健康教育プログラム」を実施しています。皆様のアンケートへの回答により、私どものプログラムの効果を明らかにしたいと考えています。

そこで、大変お忙しいとは存じますが、本プログラムの受講前後、および娘様の産後１カ月健診頃に、合計4枚のアンケートにご協力いただきたいと存じます。1枚のアンケートにかかる時間はおよそ5分程度です。

なお、本研究は、山口県立大学生命倫理委員会の承認(29- 17)を受けています。

・このアンケートへの回答は自由です。お答えにならなくても、あなたが不利益を被ることは一切ありません。また、質問紙による研究ですので、直接的な利益は生じません。

・得られたアンケート結果は研究以外では使用しません。

・アンケートは無記名でお願い致します。アンケートには番号が書かれていますが、４枚のアンケートが同一の回答者であることを判別するものであり、個人は特定されません。

・無記名のアンケートのため、アンケートを投函した後は撤回することが出来ませんのでご了承ください。

・アンケート回答用紙は、鍵のかかる場所で厳重に保管し、データは適正に電子化し、ID番号で管理し、本研究以外の目的以外では使用しません。

・アンケートの投函および提出をもって、本研究に同意していただいたとみなします。

・本研究成果は、学会等で発表予定ですが、個人が特定されることはありません。

・娘様の産後１カ月頃のアンケート用紙は封筒に入れて、受講した病院の産婦人科外来のスタッフにご提出ください。全てのアンケートにお答えいただいた方には1000円相当の粗品を贈呈致します。ご提出時にお受け取りください。研究参加への感謝とさせて頂きます。

・ご不明な点がありましたら、いつでも下記の連絡先にご相談ください。

研究責任者
山口県立大学大学院　健康福祉学研究科　田中マキ子
共同研究者
山口県立大学大学院　健康福祉学研究科　博士後期課程　中村敦子

【連絡先】
〒753-8502　山口県山口市桜畠3-2-1
山口県立大学大学院健康福祉学研究科　田中マキ子
TEL:083-933-1464　FAX:083-933-1453　E-mail:maki@n.ypu.jp

記入月日（　　）年（　　）月（　　）日

ID.＿＿＿＿

実母様についてお尋ねします。

1	年齢	（　　）歳
2	職業	□正規職員　□パートタイム　□専業主婦
3	配偶者の有無	□有　□無
4	娘さんとご出産されたお孫さん以外に支援する人はいらしゃいますか □いる　□いない	
5	質問4でいるとお答えになった方はどなたを支援しますか □娘の上の子　□娘婿　□その他（　　）	
6	娘さんの支援はあなたにとって何回目の支援ですか？ □初めて　□2回目　□3回目以上	
7	本日は娘さんの支援を開始して何日目になりますか？（退院日を1日目とします） （　　）日目	
8	里帰りでの支援ですか、それとも娘さんのご自宅に通って支援されますか □里帰りで支援する　□娘さんのご自宅で支援する □まだ支援をしていない	

※ご協力ありがとうございました

受講　前・　後　　記入月日　　(　　)年(　　)月(　　)日

ID.

次の項目を読んで、今のあなたの状態に最もよく当てはまると思う番号に丸印をつけてください。

	全くあてはまらない 1	ややあてはまらない 2	ややあてはまる 3	非常にあてはまる 4
1 戸惑わずに娘と接することができると思う				
2 娘と楽しい時間が持てると思う				
3 孫と楽しい時間が持てると思う				
4 娘は母親らしくなるだろうと思う				
5 戸惑わずに育児を手伝えると思う				
6 娘が母親らしく成長することに役に立てると思う				
7 必要に応じて育児の知識と技術を伝達できると思う				
8 周囲の人と育児協力することができると思う				
9 娘が自宅に戻ることが寂しいと思うだろう				
10 今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う				
11 1人の大人として娘と接していけると思う				
12 祖母である自分を快く思うだろう				
13 自分の健康に対して不安がなく支援できると思う				

ご意見、ご感想を自由にお書きください

※ご協力ありがとうございました。

1ヵ月後　　記入月日　　(　　)年(　　)月(　　)日

ID.

次の項目を読んで、今のあなたの状態に最もよく当てはまると思う番号に丸印をつけてください。

	全くあてはまらない	やあてはまらない	ややあてはまる	非常にあてはまる
	1	2	3	4
1 戸惑わずに娘と接することができた				
2 娘と楽しい時間が持てた				
3 孫と楽しい時間が持てた				
4 娘は母親らしくなったと思う				
5 戸惑わずに育児を手伝えた				
6 娘が母親らしく成長することに役に立てたと思う				
7 必要に応じて育児の知識と技術を伝達できた				
8 周囲の人と育児協力することができた				
9 娘が自宅に戻ることが寂しい				
10 今後も娘家族の力添えをしていきたいと思う				
11 1人の大人として娘と接していけると思う				
12 祖母である自分を快く思えた				
13 自分の健康に対して不安がなく支援できた				

ご意見、ご感想を自由にお書きください

※ご協力ありがとうございました。

論文要旨

題名　　「娘の産後を支援する実母の母性性･世代性に関する研究」

氏名　　中村　敦子

日本では里帰り文化により、出産後のおよそ 8 割の女性が実母から支援を受けている。個を重んじる現代にあっても、実母からの支援は当然と受け止められ、支援される娘の立場からの育児支援に関する研究や支援力を強化するための教育が取り組まれてきたが、娘の影響も大きい実母への支援や教育については手つかずの状態である。そこで、女性の平均寿命が 87 歳を超え、母としての人生よりも祖母としての人生が長期にわたる現代においては、実母の心身の健康や生涯発達の視点から祖母としてのスタートである産後支援を捉えることが重要と捉え本研究に着手した。

本研究では、実母が母性性（娘や孫世代、家族全体の健康と幸福の為に愛情を示し娘が母親として育つことを助けること）と世代性（次の世代のために育児の知識や技術を伝達すること）をいかに発揮させ、無事に娘の産後支援を終了させることができるかについて検討した。その際、実母自身の母性性・世代性を発展させるための教育プログラムを検討・実施し、実母の母性性・世代性の発展過程がどのように変化するかについて明らかにした。

実母の支援プロセスを明らかにするために採択した研究方法は、質的帰納的研究である。実母と娘 13 組に対する半構造化面接で得たデータを修正版グランデッド・セオリーアプローチで分析した。教育プログラムの検討には、前向き調査研究を採択した。プログラム受講前、直後、出産 1 か月後の無記名自己記入式質問紙で得られたデータを統計処理し分析した。結果、支援過程において実母の視野は、娘個人から家族全体へと拡大していた。実母の支援態度は、娘の気持ちを理解し、娘と一緒に試行錯誤し、自己を顧みずに無心に助ける時期から、娘の母親としての成長を実感し、母娘関係を再構築すると、育児の裏方に徹し、無理せずに支え自立を支援すると大きく変化していた。従来の実母教育プログラムは、実母が育児のサポーター役として母親世代の育児を見守ることを推奨してきた。しかし、母性性・世代性の発展を意図した本プログラムでは、娘の母親役割獲得に応じて祖母としての母性性と世代性を変化させながら、実母は心身の自立と健康を獲得し、祖母としての発達を遂げていた。

従来から産後支援は、中高年期の空の巣症候群と呼ばれる喪失感を、育児の担い手として埋め合わせる役割として捉えられ、その後に続く長い更年期や老年期への心身の健康に関する言及は不足していた。超少子高齢社会にある実母の役割は、母となる娘の一次避難的場所の確保と担い手で終わるだけなく、豊かに女性として老いる意味を示すことにある。本研究の成果は、中高年女性の心身の健康や生涯発達への在り方と教育方法を示唆すると共に、超少子高齢社会がもたらす課題解決の一つに貢献できた。

Abstract

Title ：A Study on maternity and generational characteristics of mothers who support daughters' postpartum.

Name： Atsuko Nakamura

In Japan, the culture of returning to one's parents' home implies that approximately 80% of women receive postpartum support from their mothers. Despite being in an era where the individual is valued, it is considered natural to receive support from one's mother, and research into childcare support from the standpoint of the supported daughter and education to improve the ability to provide support have been performed. However, support and education for the mother, which has a major impact on the daughter, has not been addressed. Because mean life expectancy in females is now >87 years and the duration spent as a grandmother exceeds that as a mother, the present study was performed considering the importance of ascertaining postpartum support on the grandmother from the perspective of their mental and physical health and their life development.

The present study examined how mothers express their maternal characteristics (showing affection to ensure their daughter, grandchildren, and all the family members are healthy and happy as well as helping their daughter develop as a mother), their generational characteristics (transferring knowledge and skills in childcare to the next generation), and whether they are able to provide postpartum support to their daughter without problems. In doing so, an education program to assist the mothers of a postpartum daughters in developing their maternal and generational characteristics was implemented and how the process of developing maternal and generational characteristics of the mother changed was assessed.

This qualitative study using an inductive approach clarified the support process of the mothers. Data obtained from semi-structured interviews of 13 mother–daughter groups were analyzed using a modified grounded theory approach. To examine the education program, a prospective study was used. Data obtained from a self-recorded anonymous questionnaire completed prior to program attendance, immediately after the program, and at 1 month postpartum were statistically processed and analyzed. As a result, in the support process, the mother's considerations extended from the individual daughter to the entire family. The mother's support approach markedly changed from understanding the feelings of her daughter, making trial-and-error with her daughter, and selflessly and openly helping her daughter to realize her development as a mother to rebuilding the mother–daughter relationship, providing support with childcare, and supporting independence without being excessive. Previous education programs recommended mothers to take on a supporting role for childcare and observe the childcare of their own generation. However, the present program aimed at developing maternal and generational characteristics; the mother exhibited improvements in physical and mental independence and health and developed as a grandmother, while changing their maternal and generational characteristics as a grandmother in response to her daughter becoming accustomed to her own maternal role.

Conventional postpartum support was perceived as a role to support childcare and compensate for the sense of loss, termed as "empty nest syndrome," in middle age but did not extend to involve mental and physical health for the years that followed into old age. The role of mothers in an aging society with a low birth rate involves ensuring primary shelter and guiding their daughter as they become a mother as well as providing important meaning to growing older as a woman. The results of the present study provides suggestions for the approach and education methods to improve the mental and physical health and life development in middle-to-old-age women and help to provide solutions to the problems arising

from an aging society with a low birth rate.